

鎌府の言霊



第三十四回

神道講演全国研修大会 関東大会

とき 平成三十年六月十九日～二十一日
ところ 鶴岡 八幡宮

目次

記念講演 悲劇の英雄 源義経と静御前

鶴岡八幡宮 宮司 吉田茂穂 1

記念講演 母を語る

松尾大社 名誉宮司 佐古一冽 14

— 神道講演講師・佐古幸嬰の生涯 —

記念講演 神職の務め

熊野神社 宮司 宮田修 19

パワースポットブームと氏神

牧 晃久 24

過疎化と向き合う

寺内誉迪 30

修理固成

大竹久雄 36

まごころを継ぐ 永遠の杜をめざして

平尾旨鏡 42

常にいただく神恩に感謝して

營田英型 46

すべては神のお導き

岡本行雄 53

ご神縁を結ぶ

正月飾りについて

神々を祀る山岳信仰について

御聖徳を仰ぎて

郷土横浜と神社

大口真神とニホンオオカミをとりまく環境問題について

あの日から

子供達に神社をどう伝えるか

今だからこそ家庭のおまつりを考える

大竹晴子 59

藤澤瑞朗 64

岩佐弘史 68

青山大和 73

依田信也 78

金子恵介 83

佐々木美津子 88

上藪優介 92

西川英寿 96

今、神社に求められていること

遊就館について

牧口八幡社の輪こぐり

見えないモノ

「蚕の神」 蚕影山信仰について

煮炊きの心

岐阜まつりについて

伊勢山皇大神宮について

「みたまのふゆ」 ―年忌祭にて―

吉本 宙矢 101

野崎 竜太 106

小野 日隆 114

前田 貴大 119

松田 絃和 123

鈴木 明子 128

山田 誠也 133

藤野 唯史 138

中木屋 豊 145

真清田神社について

谷田和悠

152

アメリカにおける神道教化

中西正史

156

缶ビールは落としても割れない

河本文夫

160

神社と広報

小野俊之

166

模擬講演 心を置くところ

白山神社 宮司

山下裕嗣

171

模擬講演 明治に学ぶ

旭川神社 宮司

芦原高穂

183

模擬講演 「fan」

椿大神社 宮司

山本行恭

191

神道講演全国協議会役員名簿

197

神道講演全国大会のあゆみ

199



第34回 神道講演全国研修大会 関東大会 平成30年6月19日～21日 鶴岡八幡宮

記念講演

悲劇の英雄 源義経と静御前

鶴岡八幡宮 宮司 吉田茂穂

当宮の宮司の吉田です（略）

転々としましたけれども最終的には大学を出てこちらにお世話になって以来ずっと五十年この八幡宮でご奉仕させて頂いておりますけれども、ここへ参りましてとにかく私自身は、父が神戸の湊川神社でお勤めをしておりましたけれども、その時の父の教えはですね、ご祭神楠木正成公についてでございました。その「負け戦とはわかっていても天主様の為に力を尽くした」そうした生き方をお前もしっかりと身につけなきゃいけないぞということを言われ言われて参りましたが、私は当初はこの神職になるつもりはなかったんですね。むしろマスコミあたりで頑張りたいという風に思っておりましたけれども、父がある時に「御礼奉公という言葉を知らないのか」といわれまして、そしてなるほど、という

ことでこの神社界にお世話になったわけでございます。ここへきてですね、思い出すのはいくつかあるんですけども、ちょうど昔大河ドラマで『草燃える』というドラマがございます。これが大変な人気で、この八幡宮も、私がちょうどお世話になった頃、その前にそのドラマがありましたけれども、ここへお世話になった時は、約二千三百万人の参拝者がということでした。

今は千葉のデイズニーランドが非常に多ございますけれども、ある時期は学生達がデイズニーランドとセットで来るような時期もございましたね、お参りの多いところだなという風に何もわからないながらも思ったことでもございました。いわゆる全国に約八万社ございますけれどもその中でも突出して他の神社と違うところはですね、この神社は非常に歴史がはっきりしているんですね。お祀りをされた年からずっとこう分かりやすくなっております。お賽銭箱を置いた時までわかる。これは鎌倉幕府の歴史書にもなりますけれども、『吾妻鏡』の中にそういった文が詳しく出ておりますので、非常に歴史の分かるお社となっております。そして先程ちょっと子供たちの遠足が多いというお話をしましたけれども、これは、やはり中世貴族政治から武家政治に変わっていく、いわゆる時代が革新されていく時代ということで、学校教育でもそのところは触れないわけにはいかないという

ことだろうと思います。そういったことで鎌倉に來られる学校の生徒さんが非常に多いということに特筆される所だと思っています。

それからこの神社のことで特徴的なことはやはりなんと申しましても武家、鎌倉幕府の源頼朝でございます。源頼朝という存在がなければこの神社はこのような多くの信仰を得るということはできなかっただろうという風に思います。一にも二にも源頼朝でございます。

つい最近、つい最近と申しましても七十年前の話でございますけれども、我々の神社界あるいは神社、神道には大変な辛い思いをさせられる「神道指令」を実施したのはマッカーサーでございますけれども、これはですねあまり私も公言しておりませんけれども、マッカーサーがなんとこの神社に四度お参りをしているんです。これは、アメリカ大使館でも「えっ」という風におっしゃいますけれども、これは何故かと申しますと、私の推測でもありますけれども、マッカーサーというのはソルジャー。ですから、ソルジャースピリットというものがあって、それは何によって養われたかといえますと、頼朝の武士道精神とということだという風に私は思っております。と申しますのは、マッカーサーが新婚旅行で選んだのは日本でございます。

日本です、ここへ、それから、皆様方よく覚えていつてらっしゃると思いますけれども。写真なんかに乗っておりますからお分りかと思えますけれども厚木の岸に降り立った時、サングラスをかけてコーンパイプを持って降りて参りましたけれども、それから宿舍が横浜のニューグランドでございましたけれども、その宿舍へ向かう際にこの八幡宮に寄つて、そして宿舍へ向かった。それから三度目が例のミズーリ号の甲板上で講和条約を締結して、(略)このときもその講和条約の締結を終えて、まずここへやってきた。将校十二名を帯同して、石段を上がつてですね、そしてなんとあの門のところで靴を脱いだ。そうして十二名とともに、今お賽銭箱になっておりますがそこで深々と頭を下げて、そして後ろを振り向きますと授与所がございますけれども、そこで十二本の破魔矢を求めた。それを将校一人一人に手渡しして、ちょうどこう降りてきたところが社務所でございますが、その当時の座田宮司さんが、マッカーサーが来たのを知りまして「上がつてどうぞ」という風に言つたら、「今日は急ぐからこのまま失礼する。しかし、もう一度お参りに来た」といふことを言つて、その宮司さんに向かつて、「私がはじめてここへ来たのは新婚旅行の時だ。あなたはおそらくこのぐらいの可愛いお子さんだっただろう」といふような事を言つたそうですけれども、そういつて帰つて行つて、それから一週間後にやはり約束

通りやってきてですね、その時は奥様と一緒にこられたということでございます。ですから、都合四回（昭和）二十一年に、頼朝公をお祀りする末社がそこに白旗神社というお社がありますけれども、このお祭りの時に二百人の連合軍の将校他皆が参列をしたんですね。舞殿で神賑わいがあったりしましたけれどもそういったのを見て楽しんでそして帰っていった。

それから、ここは流鏑馬なんかをやりますが、常に米軍の或いは連合軍の将校がやってきたというところでございます。それと神道指令とのギャップがどうしても、私は埋まらないのですが、しかし、マッカーサー自身はそうした士道・武士道といったものを守り、身につける端緒として源頼朝がいるこのお社にお参りされたのだろうと私は考えております。

それから、時々大使がお参りに来られますが、任期中に最低四回はお参りに来たいとおっしゃられた大使もおられました。そういう意味では、頼朝の影響が現代にも及んだということでしょうし、現在八幡宮は奈良の東大寺とも東日本大震災の復興祈念祭を、毎年奈良・京都、現在では東北の方で肅行しておりますけど、これも頼朝によって八幡宮と東大寺が結びつけられたということ。これは八幡宮の別当はおそらく鎌倉時代になります

と、いくら奈良は元の都といっても力が落ちたこともあったのでしよう。ここの別当が大寺の別当を兼務するということのようなこともございました。そういつたことで頼朝の影響が大きいことが今に繋がっているんだと私は思っております。

そういうことで八幡宮は武神でございますから武士との関わりが今も強いんだと私自身が理解しております。この記念講演の依頼をいただいたとき、なにをお話ししようか迷ったんですが、やはりここの特徴である武士との関わりというものをお話ししたいということとで、本来でしたら頼朝についてお話しすれば良いんですが、なんとなく悲劇の英雄というものに、今も私はあこがれを持っていて、そのことを少しお話ししたいと思って『悲劇の英雄、源義経と静御前』を題にさせていただきました。

日本の歴史において悲劇の英雄とは数多くいらっしゃいますが、その後の奮闘や悲劇といったものが、これほど文芸の題材に取り上げられている武士はそうはいない。やはり源義経において他には居ないと私は思っています。特に悲劇の英雄の条件というのは幾つもあります。一つには、乱世を生きたと言うこと。そしてもう一つは正義心を持って生き抜いていったということ。そして人生の中によく分からないような空白の部分があるとうことで、末路が悲劇に終わる。これが条件だと思います。

平家物語によりますと、義経は出づる處で小男なんだと表現されています。逆に頼朝は穏やかで気品がある武士であるとされています。そして義経は空白の部分がありますから、だんだん時代が進んでまいりますと、出づる處で小男から、しだいに理想的な美男子として表現されるようになりました。治承四年一千百八十年に頼朝が旗上げをして、一旦敗れて阿波国にいき、体勢を立て直して武蔵国を通って相模国に入っていきます。そして同年十月六日、鎌倉に入り、まずしたことは、自分の五代前のご先祖頼義が石清水八幡宮の御分霊を小さな祠であった、現在の当社の境内にお祀りし神社を創建した。それからすぐに源平の最後の戦いに際して富士川に出陣します。このときは、もう平氏もずいぶん力が落ちておりましたので、夜に水鳥の羽音に驚いて平氏が退散し、源氏が見事に勝利をするわけですが、旗上げをして兵士を打つべく頑張っている頼朝の所に、奥州よりはせ参じたのは義経でございます。

二人が出会った時、頼朝は「連絡もしていなかったのに、わざわざ戦陣をはっているこちらまで来てくれて大変嬉しい。今は亡き父にも会えたと思うくらい嬉しい」と涙を流して喜びました。それに対し義経は「今まで会ったこともないお兄さんですが、こうして立

派な勇姿を見ますと、亡くなったお父さんを見たような気がする。心はお父さんに、身はお兄さんに差し上げたい。どんな命令でも従うのでどうぞ宜しく」と涙した。そしてこれからは円陣を組んで共に戦つていこうと誓ひ合いました。

その後の平家との戦いは、皆様ご承知のとおり一ノ谷の戦い、屋島の戦いを経て、壇ノ浦の戦いでついに源氏が平氏を滅ぼしたわけでございます。その中でめざましい活躍を義経はしていくわけですが、壇ノ浦の戦いので平氏が沈んでいくとき、赤い旗が波間に揺れていた様が、季節外れの紅葉を見るようであったとしたためられております。

このように頼朝と義経が力を合わせてこれから源氏を再興していくんだと意気込んで、本当に素晴らしい滑り出しをしたわけです。一一八五年寿永四年、義経は京都に居りましたが、平宗盛親子を連れて鎌倉にまいりました。その時、義経は、敵陣の将を連れてきたということ、頼朝に喜んでもらえろと思つたんですが、逆に鎌倉に入ることすら許してもらえませんでした。それはいろいろな考え方があつた訳ですが、一つ決定的に違いますのは、天皇或いは貴族による権謀術数にはまつてしまつたということです。義経は、後白河法皇や公家達から階位を授けていただいていた。それを聞いた頼朝は、そういった物を受取つてはいけなさと怒り論した。

しかし、義経は源氏の誉れだと階位を貰ってしまうんですが、これを機に、二人の中段々悪くなってしまったのです。頼朝の目線というのは、仇討ちだとか家族の情愛を遙かに超えた遠いところにあったわけですが、義経はそういった考えが理解できなかった。いつてみれば器量の違い、そして一つ考えられるのは、頼朝は組織というものは、頂点一つでなければならぬと考えていたが、義経は二人が頂点になれば良いと考えていた。頼朝は頂点が二つではピラミッドの組織図が崩れてしまうと批判した。

こういった中、義経は後白河法皇より頼朝を討つように命じられる。これを知った頼朝は逆に義経を拘束しようとしてしまう。この時の義経の逃避行で有名なのが静御前の舞です。義経の一人が吉野山に逃げていくときに、静御前も一緒に連れていった。ところが雪深い中での逃避行は、女性の脚では險しく、足手まといになってしまふと言うことで京都に静御前を帰します。そして義経は北陸を通して、自分たちを守ってくれるであろう藤原秀衡が居りました奥州へ向かった。時を同じくして鎌倉幕府は、どうしても義経を捕らえなければならぬということで、静御前を京都から鎌倉に連れてきて、義経の行方を聞き出すため尋問しました。

しかし結果は分らずじまい。この時、頼朝の妻・北条政子が「京都で有名な白拍子の

舞がみたい」というのですが、静御前は「そんな気分にはなれません」と断りました。そうすると頼朝は「それでは八幡宮の神様に奉納しろ」といい、やむなく静御前は舞を舞いました。このことは、あまりにも有名な語り草でありまして、多くの方が語り継ぎ書き継いでまいりました。一千百八十六年文治二年四月八日のことでした。

このことを詳しくしたためた歴史書『吾妻鏡』に「誠に社壇壯観、梁塵もほとほと動つべし、上下皆興感を催す」とその感動ぶりを伝えております。これは、建物が非常に絢爛豪華で立派であり、その梁に積もっている塵が感動の余り打ち震えた、そして境内に居た身分の高い者も低い者も皆興感したと表現されているのですが、現代で我々がこういう風に表現することは皆無であります。

頼朝はこの時、これから統一しようとする関東の繁栄を寿ぐ祝いの舞・祝儀舞を期待していたのですが、静御前はそれに反して義経との別れの舞を舞いました。「吉野山峰の白雪踏みわけて入りにし人のあとぞ恋しき静や静しずのおだ巻きくり返し昔を今になすよしもがな」を歌いながら舞いました。もちろん東西の名手である静御前が芸能の本義を知らないわけがないのに、こともあろうか御神前で別れの舞を舞ったという事で、頼朝は烈火のごとく怒り、これから関東をおさめていこうとするときにとんでもないということ

叱り飛ばしました。その時に仲に割って入ったのが北条政子でございました。

政子は波乱万丈の中で頼朝と添い遂げたが、そのことが静御前の心境と重なって、静御前の夫を慕う気持ちに共感し、なんとか仲をとりなそうとしたのですが、頼朝はまったく聞き入れなかった。

しかし、再三、政子が懇願しまして、ようやく頼朝は御簾の下からそつと卯の花襲の衣を褒美として差し出したと記してこの出来事を締め括っています。私はこれを読んで八幡宮のご覧覧のもとに、頼朝も政子も静御前も、何処までも正直でそして真剣な三者三様の祈りの姿であつたと思ひました。この歴史の一コマから、神様の斎庭・境内では、おじいちゃんや孫の手を引き鳩に餌をあげたりと、普段は非常にのどかですが、いざというとき命をかけると言うことが日本人にはあるんだと思います。

命懸けで義経の事を想ひ慕ひ舞つた静御前。関東の主としてそれを許すことは出来ないということゝして烈火のごとく怒つた頼朝。そしてそのことをよく承知した上で、なんとか仲をとりなして許してあげて欲しいと懇願した政子。政子は尼將軍として強い女とされておりますが、一面ではそうゆう心優しい面を持つていた。ですからいざというとき日本人は何処までも正直にそして自分自身の心に真向かうそういう場所が神様の斎庭であるとこの

出来事から学んだのです。

そして舞の後、褒美を貰った静御前が義経の子供を宿していることが分かり、七月二十日まで鎌倉に留め置かれ、男の子を出産しました。幕府はこのままにしておくわけにはいかないということで、由比ヶ浜に赤子は流され殺害されてしまうのです。おそらくその失意の中で静御前はお母様である磯禪師と共に、鎌倉をあとにし京都に帰って行ったことでしょう。

その後の静御前の消息はどの歴史書にも記されておりません。おそらく殺害された我が子のことを弔いながら寂しく生きていったんだろうと思います。一方、義経は体勢を立て直して北陸から厳しい中、奥州に向かいました。そして奥州藤原氏の保護下に入りますが、鎌倉からの圧力が激しく、文治三年に自刃に迫り込まれました。非業の死をとげたもの、或いは志半ばで亡くなっていった人の亡霊亡魂は祟ると日本人は云います。

それは御霊怨霊信仰でございます。そのような魂・怨霊は供養しなければならぬと考え、一生懸命供養することが日本人の心根であると思います。そのようなことは全国でも行っていますが、特に遊行僧や廻国の聖は義経や静御前の鎮魂を行いながら全国を渡り歩いた。そして、訪れた各地で自然物や文物と結びついて、あらこちらに根を下ろして義経

伝説がまわっていくわけです。

また静御前の櫻はこちらにありますと伝わるのです。また、三代將軍実朝が八幡宮の別当である公暁に暗殺されてしまいました。この時百人の鎌倉の武士が弔いのために出家し、僧侶として全国を歩いて回ったということです。これも魂を鎮めるために行われたことです。このような出来事がこの境内で行われてきたという歴史的真実をご紹介します、当社のご紹介にかえさせていただきます。今から数えて八百三十二年前の、義経と静御前の話をこうやって聞いていただけることが御霊鎮めになるのではないかと思います。ご紹介させていただきます。

母を語る

—神道講演講師・佐古幸嬰の生涯—

松尾大社 名誉宮司

佐古 一 冽

母は、山口県岩国市今津町に御鎮座・宇津神社の宮司佐古芳浦・しづの長女として明治三十八年七月三日に生誕致しました。

山口県内神社では祭典後、社頭講演が盛大に行われており、その故は幕末文久三年、時の毛利藩主より藩内神社に対し、氏子へ敬神崇祖・尊皇愛国の精神を氏子等へ説くよう、神道講演奨励の沙汰文が下されたからであります。

母は幼い頃より、人前で話をすることを好み、いつしか神道講演の講師を夢見るようになりました。そして昭和五年二十五歳、山口国学院特設神道研究部に入学、当代随一の大
家渡辺武清先生に師事して、その道に励みました。

やがて一人立ちし始めた或る時、初めて九州の地に足を運んだ折のことです。長門一宮住吉神社宮司渡辺織雄先生のご紹介で、福岡県筑上郡椎田町の「公会堂びらき」の記念講演に赴きました。

汽車で椎田駅に着きましたが、案内の人が見つからない。実は町長さん以下二、三名の人々が出迎えていたのですが、まさか年端もゆかぬ小娘が講師だとは、想像もつかなかったのであります。

母が名乗りますと、町長さんは驚きを露骨にあらわし、半信半疑の態でじつと母の顔を眺め、「鬼に角、会場へどうぞと誘われました。控え室で長い時間待たされましたが、お茶の一杯も出ません。母は次第に心細くなり、このまますぐにわが家に帰りたい、とさえ思いました。実はこの間、町の重立った人々のあいだで、「あんな小娘を、演壇に立たせてよいものか、どうか」と議論が続けられていたのであります。「どうせ数百人の聴衆の前に立たせれば、若い女性のことだ。物おじて、泣きべそをかくに違いない。その時は町長のわしが、かわりに講演を引き受ける」と言うことで衆議一決、母は壇上に立つことが出来ました。いつも通り、一時間余りの講演を無事に済ませ、町長さんのお宅へ案内されました。先程とは打ってかわって、下にも置かぬねんごろなもてなし。しばらくして、町

長さんは平身低頭の面持ちで現われ、開口一番、「上田比古、一生一代の大失敗・大不覚をやらかしました。誠に申し訳ない。どうぞお許し下さい。あなたによって、人の値打ちというものを男女の別、令の差、身なりとあしで決めてはならぬことを骨の随まで教えられました。」と。

全非を悔い、小娘に書道に謝れる上田町長の偉大さ。これが幾縁で、上田町長の労を惜しまぬご推挽により、九州地区の巡講が次第に拡大していったのであります。

母は縁あって昭和十一年三月に結婚、三十一歳の晩婚であります。夫舜逸は、広島県呉市の出身、その母親は四国愛媛の社家の生まれ、舜逸に是非神職になるよう遺言しそれを受けて伊勢・神宮皇學館を卒業しております。

卒業後山口県の忌宮室から熱田神宮へそしてその奉職中肺結核を思い、療養の為、母は郷里岩国へ疎開致しましたが、薬石効なく昭和十九年十一月十七日三十八歳の若さで亡くなりました。

夫の死後、再び神道講演活動に専念し母は戦前・戦中そして戦後神道講演一筋に、全国各地を駆け巡り、平成十年齢九十四歳で亡くなります七十有余年の間、神道講演行脚を続ける道の為に尽くしました。

特に戦後は、同じ神道講演講師の石井寿夫先生と共に両輪の輪となって、各地で講演活動を重ねております。又後継者育成の為、各地区で神道講演の研修会（現神道講演全国七協議会を開催し、後継者の育成にも力を注いだのであります）。

母は遺言の若七首を残しております。そのうち三首は全て、「日の本の国に生まれし民なれば」から始まり、下の句は、「すめらみことを仰ぎ奉らむ・日の丸揚げて国を祝はむ・声高らかに国歌うたわん」であります。戦中戦愛夫を亡くして後は、祖国日本をその夫として「尊皇愛国」道を説き来たったのであります。そして、残り遺言歌のうち二つは、

老いの坂越す程神ながら

正道ふかき尊さを知る

人の道世のなりわいを一すじに

説きていつしか米寿迎えり

でありました。母は一人の女性として娘・妻・母・未亡人・姑の体験を通して、敬神崇祖を柱とした「庭のおしえ」たる人の道、神の道を、多くの人々に披歴し続けたのであります。正しく母は、日本古来の正道を言霊の力で雄々しく、言挙げしつつ雄叫びを重ねた昭和の、そして平成の語り部でありました。しかもそれは「至誠にして動かざるものは未だ

曾つて是あらずる也」の至誠と、「千万人と雖も吾行かん」との確固不屈の信念に裏打ちされた語り部でありました。

生前母は、テレビの時代劇例えば銭形平次・遠山の金さん・大岡越前などを好んで見ておりました。水戸黄門もその一つであります。その黄門のみちのく偏で、上杉藩内山形の紅花をけなげに栽培する農民を、一行が悪代官から助ける話がありました。テレビの最後の画面に、花は死んでも紅は死なない。人は死んでも夢は死なないと言うタイトルが出てまいりました。

吾が母は身罷つしまいましたが、子たる私の胸の中に、又多年に亘りご昵懇をいただきました皆様のお心の中に、いつまでも生き続けるものと確信して止みません。そして、母や優れた先人のめざした『日本国再生』という大きな夢実現の為に国志の皆様と共に力を合わせて邁進してまいりたいと存じます。

神職の務め

熊野神社 宮司 宮田 修

先日こんなことが報道されていた。福島県会津若松市での出来事である。観光の名所にもなっている白虎隊のお墓で中学生が狛犬にまたがり写真を撮っていた。それを見たお墓のお守りをしている地元の人が、がっかりしているというのだ。いたずら盛りの中学生の行動に眉をひそめていたところ、何とカメラのシャッターを押していたのは引率の先生だったとテレビは伝えている。信じられないことであつた。地元の人には二重の落胆であつた。

最近の日本人は、どうもおかしい。以前であつたら考えられないことがこの国で起こるようになった。

日本人ならではの素晴らしい考え方はたくさんある。諸外国から称賛されることも多い。

例えばあの東日本大震災の後、日本人がとった行動は外国人には信じられないものかも知れない。

「江戸しぐさ」が知られている。雨傘を差した者同士が狭い道で行き違いをする時、傘を傾けて相手に雨のしずくがかからないように配慮するなどである。

電車を降りる時、日本人は、使っていたリクライニングを元通りに直す。

他人の前を通る時、右手をさりげなく出して相手に対して「失礼します」と言う気持ちを表す。挙げればきりがなが日本人なら不思議とも思わずしてきたことである。

なぜ日本人はそうするのかを考えてみた。

元々わが国は、米作りを中心とした農業国であった。縄文時代の末期に伝わり、弥生時代には本格的になった米作りによって先人たちは食糧を確保することができるようになった。これによって人口が爆発的に増えたと言われている。

米作りに当たっては、共同体を作り皆が協力するという方法をとった。この方が効率的であると考えたのだろう。日本人の心の原点は、この「米作りの共同体」にある。自分が属する共同体のために自分は何ができるのかが重要であった。こうした日本人の考え方は、その後家族のために自分は何ができるか。地域のために、会社のためにと常に全体のため

に自分ができることを考えるようになっていった。自分自身のことは常に全体の後に置かれていたのだ。

戦後、見事に変わったと思う。あらゆるところで、個人を大切にしないといふ教えられてきた。個人を大切にするか、全体を優先するか――私はどちらが正しいとは言えないと思っている。しかし数千年の間、我々日本人は、全体を大切に考えてきたのだ。その情報、明らかに我われの遺伝子に刻み込まれているのではないだろうか。それならばその遺伝子に忠実に生きた方が私は楽なのではないかと思うのである。今起こっているさまざまな不都合なこと、例えば家族や近所の争いなどを見ているとかつて共同体の中で先人たちが培い、大切にしてきた、和をもって貴しとなす、が忘れられているように思えて仕方がないのである。誰もが自分の周囲の人たちを大切に思い、その人たちのために自分は何ができるかを考えてきた日本人――いわば日本人全員が大きな家族のように暮らしてきたのである。それがこの国の形である。

神道では、言挙げせず、と言う。すべてのものに霊が宿ると考えたわが先人たちはことばにも霊が存在し、口から発せられたことばの霊力によって福も凶事もたらされると考えた。言挙げをためらったのは、ことばによる影響に留意したからであると言われている。

確かにそうであろう。しかし私は、日本人同士では話す必要がなかったのではないかと思つてゐる。ほとんど全員が米作りの農家である。皆が同じように共同体に所属している。従つて皆が同じように考へてゐる。そのようなところでは話さなくても、説明しなくてもお互いに理解しあへるのではないだろうか。従つて、言挙げせずで済んだのではないだろうか。そう言えば日本人は、外国人に比べて確かに話をしない。説明をしない。人前で話すことが苦手だという人が多い。多言を弄する人に高い評価を与えることがない。逆にじつと押し黙つてほとんど話をしない人を重く見る傾向がある。

こうした我が国の伝統、それ自体は素晴らしいと思う。しかし残念ながらと言ふべきなのだろう、こうした我が国の伝統は、今我われが暮らしている、現代に通用しなくなつてしまつた。そんなの時代遅れですよと言われて一蹴されてしまうであろう。それで良いのであろうか。先人たちが長い年月をかけて培つてきた我が国のやり方―私はこれを、美風と呼んでいる―を簡単に蔑ろにして良いのだろうか。私は、取り戻すべきだと思ふ。そこで日本人の伝統的考へ方をもつともよく知つてゐる神職の果たすべき役割は大きいと思ふ。

厳しい言い方をするならば、言挙げせず、などと暢気なことを言つていて宜しいのです。

か。そんなことしていたらこの国は日本ではなくなりますよと言いたいのだ。今こそ神職の出番ではないだろうか。多くの人たちが我が国の将来に不安を抱いているように感じる。時間はかかるかも知れないが、私たち神職一人ひとりの地道な活動が求められていると思う。

福島・会津若松を訪れたあの中学生もそして先生も、日本人の伝統的な考え方を教えられていないだけのことだと思うのだ。

パワースポットブームと氏神

牧 晃 久

今日は私の実家、ふるさとにある京都府宮津市の日吉神社の氏子の方々にお話すると仮定して講和をさせていただきます。日吉神社は式内社である杉末神社を摂社として続く宮津市の氏神様です。それでは始めさせていただきます。

みなさんこんにち。今日はパワースポットと氏神様についてお話をします。昨今、神社を取り巻く信仰はある意味で活況を呈しています。それは御朱印帳とパワースポットという二つの要因が作り出す神社ブームが大きく影響しているからでしょう。

御朱印帳とは神社の社名と御朱印をいただくものですが、当神社のように観光客が大勢訪れるような神社でもない普通の氏神様のところまで若い方々を中心に御朱印をいただきに訪れられます。もっとも多い日であつても一日に五、六人ほどですから、それによって神社の経営が豊かになるといったわけではありませんし、また御祈祷の重なる土日に突然

に御朱印がほしいと来られるので、官司一人で切り盛りしている当社のようなところでは中々つらい訪問でもあります。そう考えるとこの御朱印帳ブームが当神社にとって良いものなのかは微妙なところではあります。

ただ著名な神社では多くの方が御朱印帳をもって訪れられ、そうした神社ではありがたいブームではありますし、なにより神社界全般の教化活動といった面では多くの方にさまざまな神社を知っていただくというまたとない機会でもあります。

もうひとつのパワースポットブームですが、これもインターネットで調べてみますとパワースポットベストテンなどといった記事がにぎやかに特集されています。私は実はパワースポットというものが一体なんなのかというのはよくわからないのですが、傾向だけ見ますと大きく二通りに分けられるように思えます。

ひとつは巨岩や滝、大木などがある、見るからに神々しい自然のなかで感じるパワーのようなものです。よくテレビなどでも取材されていますが、その多くは「包み込まれるようなパワー」「湧き出すようなパワー」といった表現がよく使われます。「氣を感じる」などという人もいますが、共通するのが具体的な表現があまりされないことです。ある意味で非常に神秘的であり、霊的なものと言えます。こうした神秘主義のようなものを感覚的

にとらえる人たちによってこのパワースポットは支えられています。

もうひとつは、神社の社名や故実などにちなんでパワーとする傾向です。たとえば社名に「金」の文字が入る神社では宝くじの御利益があるといったものが良い例ですが、ネットでは恋愛パワースポット、金運パワースポットなどの紹介がいくつも並んでおります。これらは先ほどの神秘主義的なパワースポットとはことなり、現世利益につながるもののパワーであり、スポーツから健康、金運、果てはタレントのファンが多数集まるなど様々な様相を見せています。こうした信仰の形は、現在のような極端さを除けば過去から存在するもので、京都で言うならば天神様への学業の信仰、あるいは晴明神社における阿倍晴明への信仰もある意味でパワースポットともいえるでしょう。

ただ、私はこうした強調した御利益への信仰は、全国八万社以上あるとされている神社への信仰の中では特別な信仰ではないかと考えます。一般的な氏神様への氏子の方々の崇敬のほとんどは御利益の追求ではないように思われるからです。「氏神様にはどんな御利益があるのですか？」と聞かれることがあります。この質問に答えるのはなかなか躊躇します。たとえば、どこの神社であっても御祭神があり、神様にはそれぞれに名前があります。そうであればその神様について古事記や日本書紀を紐解けばその神様にまつわるス

トリーを知ることには出来ます。たとえば、日吉の神はオオヤマクイとオオナムチです。から。日吉大社や松尾大社にからめてオオヤマクイの話は出来ますし、出雲大社との関係でオオナムチの話もできます。また、日吉の神の使いがサルであることから、サルはイヌと同じように安産の象徴とされていることから古来より日吉の神は安産・子育ての神として信仰されています。ですから安産の神ですと説明することは可能です。

しかし、こうした話を氏子の方々にしても、氏神様への知識として理解していただくことには有益ですが、氏神様への信仰といった面では若干ズレているように思えます。神社ではお正月や節分祭、例祭になど日々たくさんの方々の氏子のみなさんがお詣りされます。その方々にとって氏神様への思いのほとんど御利益の追求ばかりではないはずです。

では「氏神さまはどんな神様ですか？」と聞かれたときに私はこう答えます。

私たちが暮らすこの宮津の一年の自然の循環そのものが神様なのではと。

たとえば、お正月が終わると雪が降り積もり天橋立も白く輝きます。寒さの中で節分の行事を行い、二月も中ごろになれば雪も降りやみ、次第に春の気配を感じます。三月になると雪は解け、山々にはコブシが開花し、小川にはイサザという春を知らせる小魚が遡上して、人々はそれを食べることによってようやく春が来たと感じます。

桜が咲き、宮津祭の季節が近づくと、町は早くも祭りの準備であわただしくなります。祭りが終わると農作業がはじまり、漁師はアサリ漁に励み、すぐにトリガイの季節を迎え夏が来ます。夏の終わりの地藏盆が過ぎれば、すぐに稲刈りがはじまり、市場には桃やブドウなどの果物でいっぱいになります。やがて浦西とよばれる冷たい北西の季節風が吹く冬となり、海はマツバガニ漁で活気づき魚市場は一面カニ一色となります。そしてまたお正月へと季節は巡ります。

そうした故郷の季節の変化の中で、今も昔も私たちは喜びまた悲しみ、年を重ねながら生きています。台風や豪雪などの災禍がある代わりに、豊穡や豊漁がある。自然の巡り会わせの中で苦楽があり、そこで私たちは生かされているのです。

そうした私たちを包み込む故郷の自然、人の力では変えることのできない畏き自然を神として祀っているのが氏神様であると考えます。だからこそ、そこに生きる私たちは子供が生まれると氏神様に報告をしに初宮詣でをして健康を願い、七五三になれば同じように祈願をします。日々私たちをお守りくださいと祈るのです。お祭りには町を挙げて参加して、今まで知らなかった人たちが交流を結び、氏神様のもとで町が結束し地域は活性化して安全が保たれます。そうした氏子の守り、町の守りが一体となった信仰の形を古来より

私たちは続けてきました。

各地の天神様、八幡様、お稲荷様など神様の名前の異なる様々な神社に於いても、実は同じような信仰が続いているのではないのでしょうか。

それが日本に普遍的な氏神さまへの信仰であり、素朴ではありますが今のパワースポットブームとは別のとても大切な祈りの原点ではないだろうかという気がします。

(東京都 神社本庁)

過疎化と向き合う

寺内 誉 迪

本日も多くの皆様のご協力によりまして、夏の催し『神社で遊ぼう』が、盛大に行うことが出来ました事、改めて厚く御礼申し上げます。

このお祭りも、本年度第四回となりました。地元の子供たち、そして親御さんに、気軽に神社へ足を運んでいただきたい。そして神社をもっともっと身近に感じてもらいながら、夏休みの楽しい思い出を一つ増やして戴けたら、との想いで始まった催しです。

本日も若い親御さんが沢山お越しいただいておりますので、少しお時間を頂戴しまして、私の想いをお話しさせていただきます。

私が宮司を拝命致しましたのが七年前になります。宮司になりましてから今日まで、ずっと心に引かかるものがあります。それは過疎の問題です。同じ地域に住む皆様ですから、過疎について感じるどころが、それぞれあると思います。

そこで本日は過疎化について少しお話申し上げます。

『過疎化』と一言で申し上げましても、その現状は各都道府県で多種多様であると考えております。県内であっても同様で、農村地帯なのか、山岳地帯なのか、はたまた住宅街なのか。その土地、その場所によって、過疎化の意味合いも大きく変わってきますし、当然それに対する対応や施策も変わって当然であると私は考えております。

そうした中で、皆さま方と共に、この地域を護り、そして村檜神社を護っていくことを考えた時、どうしたら良いものかと、日々自問自答しております。

ご承知の通り、当社は県南のここ岩舟町小野寺に鎮座し、南方に広がりますのは田園地帯です。そして氏子数は、約四百戸ほどです。この数を聞いても、多いのか少ないのか、よくお分かりにならないと思いますが、県内で申し上げますと、本務神社としては少ない方と言えます。ですが、神社の規模や鎮座地の条件等を考慮しますと、決して少ないとは言いきれません。

この何ともはつきりしない曖昧な感じが、過疎を考える上で非常に重要なものではないかと私は思います。そして当社が過疎化と向き合う中で、この四百戸という数字は、一つの重要な物差しになると考えております。

氏子数について、もう少し掘り下げて話をしていきたいと思います。

さきほど四百戸と申し上げましたが、この数は若干減少傾向ではあるものの、ここ数十年は変わっておりません。

「それならば、さほど深刻な問題ではない」

「まだまだ過疎化は進んでいない」

と、お思いいなられた方もいるのではないのでしょうか。これがもし、別の条件のお社であるならば、そうなのかもしれません。ですが、当社の場合、氏子数には表れない『隠れ過疎化』が起っています。

数十年前、例えば私が産まれたばかりの頃は、一軒に二世代・三世代が同居していました。皆様もそうでしたよね。しかしながら近年はどうでしょうか。良いとか、悪いとか、そう言う意味ではなく、若い世代が地元を離れて、より住みやすい・より環境が整った地域を求めて、地元を離れてしまっております。もとの家には親や祖父母が住んでいます。氏子数自体は変わりませんが、地元地域に若い人がいないのです。子供たちがいないのです。今日お越しの皆様の中にも、日々そう感じている方がおられると思います。

つまり氏子数に大きな変化はありませんが、人口、特に若い世代の人口が極端に減少し

ているのです。これがまさに『隠れ過疎化』です。この現状は、神社を預かる宮司として、また同じ若者として、非常に寂しく、また将来に不安を覚えます。現在は横ばいに見える氏子数も、長い目で見たらどうでしょうか。大きく減ってしまう可能性があることは、容易に想像できます。

しかしながら、地域の現状は非常に厳しいものがあります。

「地元の仕事がない。」

「コンビニやスーパーもない。」

「病院や幼稚園もない。」

そのような状況下で、若い方々が将来を見据え、真剣に考えた時、地元を離れていくことは、むしろ必然なのかもしれません。

私は神職として、神社の護持運営、祭祀の厳修等の使命が御座います。そして何よりも、この地域をどうにかして盛り上げていきたい、という強い想いが御座います。そのためにも、どうにかしてこの現状を打破しないといけません。ですが、私一人で出来ること、神社で出来ることには限りがあります。ですから、是非とも皆さんのお力をお貸し下さい。

今すべきことは、自分のことだけを考えるのではなく、もっと広い目で物事をとらえる

ことが必要であると考えております。そして今まで以上に、行政と連携を図り、地域の活性化を強く進めなければいけないと考えております。

「空き家となった古民家を改修して、カフェや飲食店を開いたところ。」

「農業体験として、都会から農業に縁遠かった人を受け入れたところ。」

成功した事例を挙げたらきりがありませんが、いずれにしても我が国は、これから先、超少子高齢化の険しい坂道を長期にわたって登ってきくことは明白であります。そして、人口減少の中で経済を盛り上げ、地域を活性化させてくには、外からの人を受け入れていく必要があります。そうした対策・対応が求められております。極端に申し上げるならば、外国からの人々を受け入れていく、そのようなことも考えていく必要があるでしょう。我々は、先を見据えた画期的な施策を考え、そして勇気をもって行動する必要があるのではないのでしょうか。

『国があなたのために何をしてくれるのかを問うのではなく、あなたが国のために何を成すことができるのかを問うて欲しい。』

ジョン・F・ケネディの言葉です。

我々は、受け身ではいけません。世の為人の為に、何かしら出来ることがあるはずで

それに気付かなければいけませんし、気付こうとしなければいけません。

いつの時代も、混沌とした世を切り開いてきた背景には、若者たちの力がありました。今は理解されないかもしれない。時に笑われてしまうかもしれない。それでも、先人達は勇気を持って一歩踏み出してきました。

私も一人の若者として、地域の皆さんが、そして日本中が、世界中が、たくさんの笑顔で満ち溢れる未来、そしてこれからを担う子供たちが、夢いっぱいに暮らせる、そんな未来を目指して、一歩一歩頑張っていきたいと思います。

取り留めのない話をしてしまいましたが、今日もこうして皆様が神社へお越し下さったこと、これもひとつの御縁であります。是非今まで以上に、地域に愛着を持って戴き、皆様のお心を世の為人の為に少しばかり傾けて戴けたらと存じます。そして過疎の件は、非常に難しい問題では御座いますが、決して悲観せずに、むしろ好機であると前向きに捉えて、『輝かしい未来』に向けての一歩を、共に踏み出してみようじゃありませんか。

結びに、大神様の御神徳のもとに、皆々様が益々ご健康ご多幸であります様、心よりご祈念申し上げます、御礼のご挨拶とさせていただきます。

本日は誠に有難う御座いました。

(栃木県 村檜神社 宮司)

修理固成

大竹久雄

本日は、ご遠路のところ、ようこそ　ご参拝いただきました。

皆様は、当神社はもとより、全国津々浦々の神社にもご参拝なされているかと思いが、ご参拝なされた　それぞれの神社には、神様がお祀りされています。

ご祭神と申し上げておりますが、各神社にお祀りされている神様には、それぞれに、ご神徳、また、何故、その地にお祀りされたのかという由緒、ご創建の歴史由来が、それぞれの神社にはあります。

そのご神徳などを理解するには、理解と申しましょうか？神様を感じるには、申し上げるまでもなく、まずは、元の元と為す信仰・信心。その上で、古事記や日本書紀などに記されている神話を紐解かなければ理解ができません。

皆さんは神様のお言葉をお聞きになったことはございますでしょうか？

私もありませんが、しかし、その神様のお言葉が、古事記に明らかに記されています。そのお話を申し上げます。

先日、筑波山神社に参拝させていただきました。

筑波山神社のご祭神は、ご承知の通り、イザナギ・イザナミの命のご夫婦の神様をお祀りされています。

このイザナギ・イザナミの神様のご神徳は、日本の国々、神々をご夫婦がお力を合わせ、お産みになられました。

神道は一つに「産霊の信仰」とも謂われますが、陰陽の調和・和合を以て物が産まれ、生成化育して行くという信仰があります。

古事記によるイザナギ・イザナミの命の初見は、次の様に記されています。

「天津神諸の命もちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に『この漂へる國を修め理り固め成せ。』と詔て、天の沼矛を賜ひて、言依さしたまひき。故、二柱の神、天浮橋に立たして、その沼矛を指し下ろして盡きたまへば、塩を、こをろこをろに盡き鳴らして引き上げたまふ時、その矛の末より垂り落つる塩、累なり積もりて島と成りき。これ淤能碁呂島なり。」と、書かれております。

この絵をご覧いただくとイメージが沸いてきます。（※絵の提示）

もろもろの天の神々が、伊耶那岐命と伊耶那美命のご夫婦の神に「この漂っている国土を有るべき姿に整え、修理つくりかた固めなさい。」と、お命じになられ、天の沼矛という、天と地を結ぶ矛をお授けになり、二柱の神が、天の浮き橋という下界を見下ろす天上の橋にお立ちになられて、その沼矛で、下界をかき回し、沼矛を引き揚げたときに、沼矛の先から滴った潮が、島になり、その島がオノコロ島で、二柱の神様は、そこに降り立たれ、日本列島をはじめとした国を生み、そして、神々を産んでいくという神話に繋がって行くのですが、この時の、天の神々のお言葉が、「修理固成」だったわけです。

神様のご命令としての神の第一声は、伊耶那岐命と伊耶那美命に託されたお言葉ではありませんが……。

実は、伊耶那岐命と伊耶那美命を通して、今日の私達こんにちに託された最初にして最も大事なお言葉でもあるのです。

さて、明年の四月三十日に、今上陛下が、ご譲位なされ、五月一日には、皇太子殿下が、百二十六代天皇にご即位なされます。

今の「平成」の元号も新しい元号に改元されますが、三十年前、昭和天皇から今上陛下

が即位された時も「昭和」から「平成」の元号に改元されましたが、この元号は国の在り方、私達国民の在り方を示唆している「祈り」なのです。

三十年前当時の小渕官房長官の公表では、その出典箇所の前文・後文の説明が、全くなされていませんでした。

今、この時だからこそ、改めて申し上げます。

資料をお配りしておりますので、ご覧下さい。（※資料にて説明）

この平成は『史記―五帝本紀』より「内平らかに外成る」。『書経―大禹謨』より「地平らぎ天成り」とあります。

『史記―五帝本紀』の「内平らかに外成る」の前文には、父義、母慈、兄友、弟恭、子孝とあります。父は義愛、母は慈愛、兄は友愛、弟は恭愛、子は親に孝養を尽くしてこそ、内平らかに外成る。

その内とは、申し上げるまでもなく私達一人一人の心の内をいうのであります。

この「修理固成」という神のお言葉は、この国・社会を立派に造り固めなすべきであるとされています。国・社会を支えているのは私たち国民であり、自分であり、家庭であることを自覚すべきであります。自ら、或いは家庭から、私達一人一人の心の内を平らかに

「修理固成」していくことから始まるのです。

「打ち祓ふ 心の内に住む神を 社にのみと思ひぬるか」

江戸時代の神道家・吉川惟足が、心の内に住む神、神と人との繋がりを詠んだ歌ですが、心の内の神性の顕現が、正に修理固成の第一歩なのです。

今日、この修理固成のお話するのも、実は、先日、筑波山神社に参拝の折り、お祓いを受けました時、（※ジェスチャー）胡床から起立し、祓詞奏上の間、平伏しました時、足元がグルー。グルー。グルー。と回るんです。

『えっ!!何だろう?立ち眩み?』、違います。

その日の午前中、茨城県では、震度4の地震があり、『余震かな?』と、一瞬思いましたが、違います。

神様は感じるものであり。私の感じ方ではありましたが、私の身体そのものが、天の沼矛と感じたのです。

筑波山神社のご祭神は、伊邪那岐命と伊邪那美命。修理固成のご神徳、天つ神から伊邪那岐・伊邪那美命を通して、神主である私目に、「この世の中を修理固成（つくりかためなせ）」とのご神託と捉え感じたのです。

本研修会は、一般の氏子・崇敬者・参拝者対象の模擬講演実習ではありますが、結びに、これだけは、皆さんに申し上げたい!!

神主の皆様と共に、「今の混沌とするこの世の中を修理つくりかため固成なして行こうではありませんか!!」

ご静聴ありがとうございました。

(三重県 椿大神社 榎宜)

まごころを継ぐ

永遠の杜をめざして

平尾 旨鏡

本日はようこそ明治神宮にご参拝いただきました。さて、本日はまごころを継ぐ永遠の杜を目指してと題しまして講話をさせていただきますが、ご存知の方もいらっしゃるかと存じますが、明治神宮には三方向からなる参拝の道があります。一つは渋谷・青山あたりに隣接したおしゃれな街として、多くの若者たちで賑わう原宿方面からの「表参道」。もう一方は、各種スポーツ施設からなる明治神宮外苑・千駄ヶ谷、予備校や専門学校などがある代々木方面からの「北参道」。そして、新宿副都心と甲州街道沿いの街からの「西参道」。これらの参道に連なる町並みは、常に時代を象徴する躍動的な「動」なる世界を生み出しております。明治神宮はこれらの街の鎮守の杜として、みどり豊かで静寂な、神様がお鎮まりになる「聖」なる世界が息づくところとして、今日、国内外より年間およそ一千万人の方々にお参りいただき、「代々木の杜」として広く親しまれておりま

す。『明治神宮造営誌』によりますと、明治神宮が創建になる前は、代々木・原宿の一带は、遙か遠くに富士山をも眺めることができるほど、広々とした原野であつたと記されております。明治四十五年七月三十日に偉大なる明治の終焉ともいふべき、明治天皇の崩御に、国民は深い悲しみと同時に明治天皇をお祀りする神社を創建したいとの熱い願いが寄せられ、大正天皇の御裁可を賜り、明治神宮造営のはこびとなりました。その鎮座地の選定にあたっては、御祭神ゆかりの深い、十数ヶ所の候補地の中から代々木の地が選ばれました。明治天皇をお慕いしたいとの全国民のまごころは、約十万本の樹木の献木によって、人工の「永遠の杜」を創ろうという活動へと繋がり、神域づくりが始まりました。更に、全国から延べ十一万人に及ぶ青年達が、境内の造営に携わり、大正九年、西暦一九二〇年、十一月一日にはれて、明治天皇と皇后の昭憲皇太后をお祀りする、明治神宮が鎮座になりました。

その創建に携わつた多くの国民のまごころは、美談となつて神宮に数多く残されておりますが、これらは両御祭神がいかに国民から敬愛されてやまなかつたかを物語るものであります。しかし、昭和二十年四月十四日未明、先の大戦の戦火により、本殿を始め主要な建物はことごとく焼失してしまいました。以降、占領下における厳しい時代を経て、昭和

二十七年四月二十八日のサンフランシスコ講和条約の発効とともに、明治神宮外苑の諸施設も接収が解除されました。このことが本格的な再建の兆しともなり、国民からも「明治神宮の再建復興なくして、日本の戦後復興はない」との声も沸きあがり、翌昭和二十八年には明治神宮復興奉賛会が結成され、本格的に奉賛活動と復興事業が始まりました。その情熱と精神は鎮座当時に勝るとも劣らない熱意となつて、神々しくも壮麗で優美な本殿と、社殿などの諸建築物が見事に再建され、昭和三十三年十月三十一日、鎮座記念祭の前日に、再建された御社殿へと御神霊がお遷しされました。

明治神宮ご創建から戦後復興を経まして、明治神宮は本年で九十八年目を迎えております。二年後の二〇二〇年、東京オリンピック・パラリンピックが開催されます年には、明治神宮が代々木の地に創建されてから百年を迎えます。現在、鎮座百年記念事業として御社殿群修復工事を始め、両御祭神の御事績をより多くの皆様に知っていただくための明治神宮ミュージアムの建設、境内のバリアフリー化など様々な記念事業を進めております。本年五月十八日には、御本殿修復工事に当たり、六十年ぶりとなる仮殿遷座祭が執り行われました。本殿から仮のお社である仮殿に両御祭神の御神体、御霊代とも呼びますが、お遷しする儀式が執り行われたわけでございます。一年後の夏頃には修復工事が終了し、仮

殿から本殿へと御神体をお遷しする本殿遷座祭が執り行われる予定となっております。これらの記念事業は、明治神宮を次の百年、二百年へと伝えていくための大切な事業でございます。創建当初、先人たちは、鎮守の杜をつくるため、ただやみくもに木々を植えたわけではありません。百年後、百五十年後に自然の森になるようにと計画的に植えました。自分たちの時代に完成させて満足を得るのではなく、百年後の子孫たちのための基礎を作りました。ある種の滅私、利他の精神です。私はこの杜の木々を見てみると首を垂れずにはいられません。創建当時から戦後復興、そして現在是一个の同心円上にあり、さらには将来へと繋がっていると私は確信しております。

明治天皇の御製の中にこのような歌がございます。

いそのかみ古きためしをたづねつつ

新しき世のこともさだめん

私たちを支えてくれるのは、先人たちの創ってきた歴史と伝統です。この御製のように温故知新の精神を大切にして、この杜を未来に伝えていくため、多くの人と共心努力、叡智を寄せ合って新たな歴史と伝統を創っていききたいと思ひます。

常にいただく神恩に感謝して

營田英聖

今回はありがとう・おかげさまで・と言った『常にいただく神恩に感謝して』と題し、少しお話させて頂きたいと思っています。

突然ですが、皆様は神社や神棚に手を合わせる時、どのような気持ちでどのような考えでお願い事をしますか？それぞれ人には色々な立場や今その人が置かれている状況によって違いがあると思いますが、神様の大前に出向く時は何らかの悩みや願いを持ってお願いをしに行くと思います。心の悩みであったり・体の悩みであったり・家庭関係・人間関係・仕事関係等、色々な思いがあり、人はみな神様の前で深く頭を下げ、その願いを聞き入れて下さいと願います。

人は悩みの無い時や健康な時には、自分が辛かった時や悲しかった時、苦しかった時のことなんて全くという程に忘れてしまい神棚や神社に手を合わせることさえも怠ってしま

います。しかし、それでいいのでしょうか？ 苦しいときは神様にお願ひし、幸せなときには何もしない。これでは一方的ではないでしょうか？ 自己中心過ぎではないでしょうか？ やはり幸せなとき悩みのないときにも手を合わせ感謝を捧げるのが当然ではないでしょうか？

ですので神社や神棚の前に立つたらず常になだく神様のお恵みに対して「感謝」を捧げてください。

感謝の心を言葉にすると「ありがとうございます」となります。日本語の中で一番美しい言葉だと思います。「ありがとう」を漢字で書くと、「有り難う」。有ることが難しいと書きます。つまり、減多にない、稀であるという意味です。減多にないこと、稀にしかないことだから尊いと思い、幸せに思い、嬉しく思うのです。当たり前のこと、普通のこと、当然のことと思う心からは感謝の心は生まれてきません。私たちは自分の尺度で、当たり前のことと、当たり前でないことを振り分けて感謝をしたり、しなかったりします。しかし、世の中に当たり前のことが本当にあるのでしょうか。

一所懸命働いているのだから給料をもらえるのが当たり前と思っても、突然会社が倒産してしまうことがあります。夜寝たら朝が来て起きるのが当たり前と思っても、

突然の病氣に襲われて寝たきりになってしまふこともあります。自分は若いし、健康だし、元氣で暮らせるのが当たり前と思つていても、事故で怪我をしてしまふことだつてあるのです。女房も子どもも親も自分も皆元氣だから、明日も元氣に暮らせるだろうと思つていても、先のことは誰にも保証できません。そうした、当たり前でない中に生活をしているのに、私たちは多くのことを当たり前と錯覚して生活してゐるのではないでしょうか。

親がいるから自分が生まれたのは当たり前。頼みもしないのになぜ勝手に生んだと、憎まれ口を利く子どもがいます。しかし、親から自分が生まれてきたことは決して当たり前なことではありません。親子というのは、一億の中のたった一つの出会ひなのです。我々の人生は、この稀で貴重な出会いを土台として始まつてゐるのです。

大自然の時間の流れから見れば我々の人生の時間は、川に流れる水の泡粒と同じです。アツと言う間に消えてしまひます。そうした短い尊い時間にめぐり会うことのできた人々との出会いには、何と素晴らしく有り難いことではないでしょうか。瞬時に消えていく泡粒の中でめぐり会つた貴重な出会い。そう思えば、氣の合う人、合わない人、好きな人、嫌いな人との出会いもすべて共に泡粒の中に生きる仲間であり、いとおしく思ふ人生が楽しくなつてきます。有り難きことの中に自分が今生きてゐる、いや神様に生かされてゐると

いうことへの感謝の心を持つことが、今自分が背負っているすべての悩み苦しみを解消する力ギとなると思います。

健康で日々を過ごす事のできる有難さ。

「健康な体でありがとう」

母がづらい思いをして生んでくれた事。親が大きくなるまで育ててくれた事の有難さ。

「お父さん、お母さん、ありがとう」

ご先祖様が苦勞して築き上げてきてくれた今に

「おいしいちゃん、おばあちゃん、ありがとう」

色々な物が食べられる事の有難さに、ご飯を食べる前、食べた後に必ず口に出して言います。

「いただきます、ごちそうさまでした」

物が手に入る有難さ、友達ができ、恋人ができる出会いの大切さ、新しい家庭ができ新しい命が誕生するこの上ない喜びに、この生活をしている地球に太陽に、月に星に、水や空気に「ありがとう」という気持ち、全ての事に対して感謝の気持ちを心の中に思っていただけで、神様に伝えましょう。感謝の気持ちを。

それから自分自身のお願いをして頂きたいと思ひます。この事を常に心がけて頂ければ更なる幸せ、神様の御神徳が戴けると思ひます。

神様にお願ひ事をしたり、神様におすがりしたりできることの有り難さが、神道の素晴らしさの一つだと思ひます。神様は私達の親です。子どもが親に甘えるように、我々は親である神様に甘えるのです。親に甘えたからといって、親は子どものいうことをすべて聞き入れてくれるわけではありません。神様もしかりです。しかし子どもは、親に聞き入れられなくても、私達は神様に聞き入れられなくても、甘えること・祈ることによって安心と、元氣とやる氣と知恵がわき出てきます。

神様は何でも聞いてくださいます。すべてを見ていてくださいます。そしてすべてを知っています。

明治天皇御製

目に見えぬ 神にむかいてはじざるは
人の心のまことなりけり

人々の目には見えない神さま、しかし人の行いや考えまで全てお見通しになられている。その神さまの前に出ても恥ずかしくないという生き方こそが、正に人間らしい「誠の心」であろう。という意味です。このことを踏まえて日々をお過ごし下さい。

最後に伊勢の神宮で掲示されていたポスターの文章を述べたいと思います。

「ありがとう」

太陽に、光に、この星の温かさに、

ありがとう。

雨に、川に、きれいな水に、

ありがとう。

大地に、杜に、お米に、

ありがとう。

先祖に、父に、母に、私の命に

ありがとう。

感謝するべきものに気づいたら、

大切なものを守ることが出来ます。

この鳥居の向こうでは、

二千年以上ものあいだ、

感謝の心を捧げる祈りがつづけられています。

人生には何ひとつ当たり前のことはありません。すべてが稀なことのつながりです。

一億の中から選ばれ導かれ貴重なめぐり合わせによって生まれ出た私たちです。無駄な人は誰もいません。どうか神さまご先祖様そして日々の何事にも感謝され、何があっても前向きに捉え笑顔で元氣にお過ごしください。

(三重県 椿大神社 権彌宜)

すべては神のお導き

岡 本 行 雄

今日生きていられるのも、辛い状況にあるとしても、すべては神様のお導き、感謝しましょう。

さて来年は、一世一代の御代替わりが予定されています。御代替わりにおける天皇陛下のご譲位並びに皇太子のご即位などの一連の儀式は、我々日本人が自分たちが日本人であることを再確認し、この国に生まれた喜びを再発見する千載一遇のチャンスであります。様々な国家の危機が立ちはだかる現在において、この一連の行事を通して、私たち一人一人が天皇陛下とつながっていることを実感し、日本国民が神国日本の国民として一つにまとまることが肝要です。そのためには国体を共有することが必要であります。国体を共有することとは、我々日本人が天皇陛下が統べる日本国に生まれ、陛下の溢れんばかりの慈愛に育まれて生かされていることに気づくこと。また天皇陛下が高天原の神々と直結して

おられ、その大御心を継承しておられることを再認識することであります。大御心とは、高天原の神世より、国民の幸せを祈っておられる天皇が国をまとめておられるということ。一方国民は、天皇が体现しておられる高天原の大御心に奉仕すること。つまり国民が大御心を肝に銘じ、各々の分野で刻苦勉励することによって、天皇が神々から受け継がれた事業をお助け申し上げることで、日本国及び日本国民が発展していくと言うことであります。そうすることが高天原の神々の大御心をいただいた神国日本が、天壤無窮の神勅を實踐しているということになるのです。つまり一連の儀式は、日本の国や民を思う大御心が引き継がれる儀式であり、有難くもつたいない行事なのであります。天皇の広く深い慈悲に應えるためにも我々国民は奉祝申し上げなければならぬし、己が勤めにまします精励しなければならぬのです。

ところで天皇の国民を思う大御心を知るには、歴代天皇の和歌を知ることが有効です。

第十六代天皇、仁徳天皇

「高き屋にのほりて見れば煙立つ　民のかまどはにぎはひにけり」

仁徳天皇が難波高津宮から遠くをご覧になられ、人々の家から少しも煙が上がっていないことに気付き、三年間の税を免除されました。

三年がたつて、再び高殿に登つて国のありさまを見わたすと、民家からは煙がたちのぼつており、民のかまども豊かに栄えている事を喜び詠んだものです。

第五十六代天皇、清和天皇

「災いは偶然に起きるものではない。みな朕の不徳の致すところからである」
肥後国（熊本）で起きた洪水に際して、天災さえもご自身の不徳から民を苦しめたのだと、心より反省なさっている。

第二百二十二代天皇、明治天皇

「罪あらば 吾をとがめよ 天津神 あまつかみ 民はわが身の 生みし子なれば」
不幸な出来事それらの責任はすべて自分にあるとされる大御心。

第二百二十四代天皇、昭和天皇

「爆撃に たふれゆく民の 上をおもひ いくさとめけり 身はいかならむとも」
自分の身はどうなつてもよいから戦争を止める陛下の御決心の歌である。

最後に

「我が君は千代に八千代にさざれ石のいはとなりて苔のむすまで」

—— 読人知らず（古今和歌集の巻七賀歌の部）——

どこの誰が詠んだか解らない歌が国歌になっているという日本の素晴らしさ、天皇の御世が、細かい石の粒が徐々に固まって岩になって苔が生えるほどの長い期間、栄え続けていくことを祈っている歌であります。こんな壮大で神々しい歌が誰知れず作られたことに感謝！

・大嘗祭の本義正しく伝える

大嘗祭とは、新天皇が即位後始めて行う新嘗祭のことです。

もともと大嘗祭は旧暦十一月の二番目の卯の日、冬至の頃に行われていた。古代においては冬至は一年の始まりであり、その一年の始まりに天皇がその年に獲れた新穀を神々にお供えし、神々と共に食し、五穀豊穣に感謝し、国家国民の安寧を祈願する。そして新しい力を授かるという意味合いが込められていました。古代において天皇が日本を知らず、すなわち一つにまとめるためには、単に武力で民を平定するだけでなく、農業を起こして民を豊かにし、国を安定させることが重要でありました。そのために、天照大神は斎庭の稲穂をニニギノミコトに授けて、稲作を振興して国を栄えさせなさい、そうすれば皇位は

永遠に榮えることであらうとさとされたのです。

つまり、天壤無窮の神勅を実現するには、国民が稲作に励むことが必要であると言っているわけです。教育勅語にも国民の義務として天壤無窮の皇運を翼賛すべしと述べられています。その意味は国民一人一人が高天原の大御心を体現しておられる天皇に奉仕するには、自らの仕事の分を尽くせば良い。それによって国民も天皇も繁榮することになるのだと言うことでした。要するに国民が自らの仕事に尽くせば、その結果国民も天皇も永遠に榮える事となると言うのです。稲作と言う国民の生産活動（現在では国民の経済活動全般を指します）と行為（日本国）が榮えることとは同義であると言うことです。つまり、国民が榮えれば国が繁榮すると言うことを確認しているのです。逆に国が繁榮すれば国民も榮えると言うことです。つまり大嘗祭を通して、天皇は改めて天皇としての自覚を神々にお誓いし、国民は天皇の大御心を頂きつつ、己が職務に専念するぞと改めて決意するのです。それは天壤無窮の神勅と齋庭の稲穂の神勅を再確認する日でもあるのです。新天皇にとっては神々や国民に対して、国民にとっては神々や新天皇に対しての決意表明的なものではないでしょうか。従って、非常に大切な儀式なのです。

この御代替わりを通して、皇室がますます榮えますようにと祈り、それから私たち一人

一人がそれぞれの職務に専念しますと改めて決意をし、天皇陛下が統べる日本国に生まれ
た喜びを皆さんと共に祝福しようではありませんか。

こうした祝賀行事を持てるのも神様のお導き、神恩感謝です。これからも生活の様々な
場面で、神恩感謝を感じながら生きていきましよう。ご静聴有り難うございました。

(埼玉県 川越熊野神社 宮司)

ご神縁を結ぶ

大竹 晴子

本日は、ようこそお参りくださいました。

以上をもちまして、昇殿祈願祭滞りなくご奉仕申し上げました。大神様のご神徳を得られ、日々健やかに、つつがなくお過ごしなれますようにと、ご神前にてお祈り申し上げます。次第であります。

さて、この度の御祈願『禍事清祓』でございますが、人間の力ではどうすることもできない様な悪いことが重なる、といった際に執り行ないます。

私は以前、山形県の出羽三山神社にてご奉仕をさせていただいておりました。神仏習合の、古くから修験道の信仰が伝わる神社です。修験道のお山には、特別な悩みを抱えて参拝に来る方が多かった印象があります。

当社、琴平神社は、田園都市線のたまプラーザ駅、または小田急線の新百合ヶ丘駅から

バスで二十分という所に鎮座しておりますが、実は、そんな神奈川県の開静な住宅街にある神社にも、諸々の禍事に悩み、自分自身の力ではどうすることもできないと相談に来る方が、実はとても多い事に驚いております。

これは、世の中が正に混沌としている様を表しているのではないか、と思いますが、この『禍事』はなぜ起こってしまうのでしょうか？

一概には言えませんが、神道的観念から申し上げますと、やはり罪や穢れが溜まってしまったことから起こる出来事だと考えられます。

罪、穢れとは、日々生活する中でのストレスや、心身の疲れなどの誰しもが抱えているものです。その心に付いた汚れ、チリやホコリのようなものを溜めてしまうと、外部にある不浄な事柄と知らず知らずに悪縁を結んでしまい、良くないことが現実になると考えています。

こういったことを防ぐには、神道の基本である祓いが大切になります。神道は、『祓いで始まり祓いに終わる』とも言われますが、要は祓いにより清浄（正常）にし、心身共に健やかでいることが大切であると説いています。

しかしながら、なかなか自分自身ではコントロールすることが難しいこともあると思い

ます。そういったときはやはり、神様に頼るのが宜しいと思うのです。

本日の祈願祭では、神様の最もお近くまで昇殿し、その罪穢れを大麻でもって、お祓いをいたしました。

そして、皆様が更に、お守りお導きいただきますようにと、『仲執り持ち』をさせていだきました。

しかし、私達神職ができることは、神様と皆様の、『はしわたし』をすることであつて、ご神縁を結び固めるのは、皆様お一人お一人であります。

神様は全てご照覧で、いつも私たちを見守り導いてくださっておりますが、そのお陰様に気がつかず、当たり前のように生活をしていると、生まれもった神様とのご縁は、綻んでしまうのです。その綻んだ隙に、禍事というものが入り込んでくるのだと思います。

では、神様との絆を深め『結び固める』のにはどうすれば良いのでしょうか？

私はまず、神棚をお祀りすることが、とても重要だと思ひます。

神社にいつて、感謝報告することはとても大切でありますが、毎日毎日参拝に訪れることは難しいかもしれません。

しかし、神棚は神社と結ぶ心の窓です。日々の感謝や出来事の報告もすぐにできます。

いつでも神様と対話できるということです。

何かとせわしない世の中で、神棚に手を合わせ、心を落ち着かせる時間が、ひいては自分自身とも対話する事となり、自らを省みる貴重なひと時になるのではないかと思います。

その様な信仰があれば、隙によって魔が刺すようなことは防げるのではないのでしょうか。家にはいつも神様がおられる、こんな安心感はありません。そして、神様との絆を深めれば、いつもお守りお導きいただいているという安心感に包まれ、日々健やかに生き生きと生活できます。その充実した毎日に、更に「ありがたいなあ」という気持ち^{こころ}が沸き、自然と手を合わせる時間が増えてきて、神様もその感謝の祈りによって、御神威^{ごしんい}が^い増すのであります。

鎌倉幕府の基本法典、御成敗式目第一条にも『神は人の敬によりて威を増し、人は神の徳によりて運を添ふ』と記されており『いかなる神も人間の崇敬をうけてこそ、その御威光を輝かすのであり、御神意を高めるのは、人の敬^{うやまい}の力である。人が、運や生命を与えられるのは、その神の徳によってである』という意味であります。これは、神道の立場での神と人との密接な関係が的確に述べられており、古来より神と人は、このような繋がりである事が望ましいと考えられております。

毎日毎日、ニュースでは様々な事件が報道され、胸が痛みます。そういった事も、『邪気、悪鬼、毒気』等と、悪縁を結んでしまった究極の出来事だと私は考えます。

どうか、皆様が健やかに、生き生きと日々を謳歌するためにも、そんな禍事などと悪縁を結ばず、神様とのご神縁を更に強く結んでください。

その為にも、是非神棚をおまつりする事をおすすめ致します。

結びに、祈願主様はもとより、ご家族ご一家様の益々のご健勝、弥栄をお祈り申し上げます。

この度は、ようこそのお参りでございました。

(神奈川県 琴平神社 権瀬宜)

正月飾りについて

藤澤瑞朗

私たち日本人は、年末になると、新年を迎える準備をします。勿論日本の総氏神様である神宮大麻のお札を奉り、産土の神社のお札を奉り、新年を迎える準備をします。

これらは、極一般的な家庭で行われているお正月の準備かと思えます。その中で、宮城県では、この他に「きりこ」という正月かざりがあります。この「きりこ」は地域によって形や大きさ、また、その内容が違います。

お祭りには、神籬や紙垂、御幣など紙は欠かせません。私の地域では、神棚の所に飾り、お札と同様に奉ります。

この「きりこ」ですが、「きりこ」と言ってもなかなか結びつかないと思いますが、寄席芸の「紙きり」があります。紙をはさみで人や動物のかたちいきりぬく芸ですが、「きりこ」も同じように縁起物の形や立体的いきりぬきます。地域によっては、模造紙程の大

きさや半紙の大きさなどまちまちです。

今回は私の地域の宮城県の「きりこ」を紹介したいと思います。

「きりこ」は県内でも特に、海岸沿いや山沿いに飾り付けが盛んで、複雑な形の切り紙で、毎年その土地の神社の神職の手で奉製され、氏子や崇敬者の家へ年末に頒布され、一年間奉ります。

この「きりこ」は、新年を迎える装飾にもなっており、神様へのお供えだったり、神への祈りの表示でもあったりします。これは、近世にさかのぼる伝統的なものであり、かつ造形的に複雑で、中には芸術的にも価値のある評価されるものもあります。

この「きりこ」と言っても三種類に分けられ、一つ目が幣束形式、二つ目が、切り透かし形式、三つ目が、紙注連形式があります。

先ず一つ目の幣束形式は、紙の切り紙を幣串に挟んだ形、二つ目の切り透かし形式は、紙全体に様々な縁起物の柄を切透かした形になります。三つ目の紙注連形式は、折った紙に複雑な切れ込みを入れ、のばして立体的にする形を言います。

幣束形式は、紙を切り抜いて竹串に挟みますが、この切り抜いた紙の形が神々を象徴する形となっています。宮城県でも山沿いは、農業地域となっており、幣束の形も水の神、

家畜の神、豊作守護の神、また、魔よけの神などの形になっています。勿論この他にも各家庭において昔ながらの伝統の形を継承している家もあります。

次に、切り透かし形式ですが、これは一枚の紙を切り抜くことによってさまざまな表現を作り、一枚の平面的な形にします。一枚の紙全体に図柄をほどこし、紙を立て半分に折り切込みをいれて、左右対称の図柄となります。

内陸では、五穀豊穡や商売繁盛を祈願する意味で、図柄は、米俵、扇、星、竹などが切り抜かれ、中には、「金」という文字が刻まれています。また、縁起の良い「燕」の図柄が大きく描かれているものもあります。これらが切り透かしの代表的な特徴となっております。

三つ目の紙注連形式は地域によって様々で、海岸側では、鯛や扇、宝船など縁起の良い図柄が特徴となっており、そのような図柄を天井などから下げることによって立体的な造形が表現されます。また、数種類を組み合わせて一組する場合が多く、より一層芸術となります。

ここで紹介した「きりこ」は、県内でもごく一部であり、代表的なものを紹介してきました。

以前、農村地域ではこのような正月飾りを自分達で製作し、また神社の神職が奉製し、各家庭に頒布してきました。

現代では、正月飾りをスーパーで購入したり、中には飾らない家庭までであると聞いています。

今日まで、正月飾りとして「きりこ」や「御幣」は神社の神職によって伝承され継続されてきたのは事実であり、今後伝承し、切り紙の技法も保持しなければなりません。

今後このような伝承文化を続け、伝えなければならぬと思います。

(宮城県 志波彦神社 鹽竈神社 権瀬宜)

神々を祀る山岳信仰について

岩 佐 弘 史

平成二十八年に祝日法が改正され「山の日」が制定されたことは、皆さま記憶に新しいかと思っています。

「海の日」の祝日があつて、「山の日」がなかったのですから、当然の制定とも言えるのかも知れません。神社神道においては、「海川山野」と表現されるように、万物に神が宿るとされています。中でも山岳信仰は、霊力が宿り、神々の棲まう山として古来より日本人が崇敬しつづけているのです。

人々が定住し、農耕に従事するようになると、山は清流を生み、恵みをもたらす有り難い存在として「田の神」・「山の神」の信仰が自ずと発生してきたことでしょう。

日本全国各地には、山を御神体そのものとして崇め、社殿を造営して御祭神として祀るようになつていったと容易に推測できます。

さて、山岳信仰の一山である私が本務する神社は、文字通り筑波山に鎮座しています。鎮座地は、昨年度市制三十年を迎えた茨城県つくば市です。

つくば市と言えば、今や世界トップクラスのスーパーサイエンスシティと呼ばれています。G7科学技術大臣会合も開催されたほどで、英語で表記される「TSUKUBA」は、世界的にも広くその名を知られているのです。

最先端科学技術の研究機関が、市内各所に集中しています。その一方で、古より少しも変わらぬ姿で筑波山が関東平野越しに聳えます。

筑波山神社は、両山頂に御本殿、中腹に拝殿を構え、山そのものを御神体としています。太古より悠久の歴史を刻みつつ、人々の暮らしを見守り、信仰を今に伝えていきます。

ところで、日本の森林面積は国土の約三分二を占め、フィンランド、スウェーデンについて世界第三位の森林国であるとの知識は、社会科学で教わったかと思います。標高は、等高線で地図上に表示されますが、何メートル以上を山という明確な定義はありません。国土地理院の地形図によると、日本一低い築山（つきやま）は、宮城県仙台市の日和山が標高三メートル、自然の山で最も低いのは、徳島県徳島市の弁天山で、標高六・一メートルとされています。

その自然で最も低い山・弁天山の山頂には厳島神社が祀られ、著名な登山家も訪れています。例祭も標高に準えた六月一日に斎行され、山頂結婚式も人気を博しているそうです。これだけ低くても山である以上、平たく言えば日本の国土は約七割が山であり、その多くを森林が覆っていることになります。

また、山は生物を育む源であり、樹木は家屋や家財、燃料といった人々の生活の糧を担っています。日本文化は、「山の文化」と「河川の文化」・「海の文化」によって培われ、世界の文明も大河流域で大きく栄えたことは歴史が証明しています。

ところで「林」と「森」の違いはご存知でしょうか。「森は林より木が多い」とか「山に木々が生えていれば森」などと言われる方が大勢おられますが、その区分を知る人は案外少ないのです。

林業界では、常識的な区別として植林など人の手の入っているのを「林」とし、木々が自然に生えているのを「森」と定義しています。

国語的には「林」を更に「人工林」、「自然林」に分けていますが、林は「生やす」ことを語源としているのです。一方、「森」は「盛り」を語源とし、手つかずに自然に盛り上がっているさまを示しています。自然の木々は神々の依代（よりしろ）であり、神々の靈力に

よって木々が自生し、森を成すのです。

それ故に自生の森は、山岳信仰の対象となり、神の宿る神聖な地とされます。山そのものが御神体と崇められた一因です。神社を「鎮守の杜（もり）」と表現するのは、手つかずだからこそ樹齢を重ねた御神木等の巨樹巨木が多く見られることが何よりの証左です。

現在、国立公園にも指定されている筑波山は、万葉歌人に愛されていた坂東無双の名峰であり、万葉集に二十五首の歌が収録されています。

同集に『東歌』として収録される筑波山をモチーフにした歌は、男女の愛や恋について詠まれたものが多くを占め、まさにイザナギノミコト・イザナミノミコト二柱の夫婦神の鎮まる山として歌垣（かがい）男女が集まり歌を詠み交わす）が頻繁に開かれ、誰もが憧れを抱く恋の成就する山でした。

現代においても歌謡曲や演歌に愛や恋の歌が多いのは、その名残りなのかも知れません。いつの時代においても、「むすひ」の靈威により、結びつく男女の恋仲には関心がある人々の心は変わらないのです。

筑波山では、婚活ハイキングが開催されていますが、毎回カップリング率が三割を超えています。昨春秋に開催されたハイキングでは、四割を超えるカップルが誕生したそうで

す。さすがは筑波山、実に靈驗あらたかではありませんか。

いくら科学万能の時代の中、恋心を心情豊かに表現した夫婦神の静まる山岳信仰のあつた万葉の時代に思いを馳せてみては、如何でしょうか。

（茨城県 筑波山神社 宮司）

御聖徳を仰ぎて

青 山 大 和

皆様本日はようこそ明治神宮に御参拝くださいました。明治神宮は明治天皇様とそのお妃の昭憲皇太后様、二柱の神様をお祀りする神社でございます。

さて、テレビや新聞では、明年の御代替に関する報道が続いておりますが、本日は、明治天皇様をお祀りする神社に奉仕する神職の立場から、天皇陛下と私たちのつながりについてお伝えさせていただきます。そこで、明治維新百五十年を迎える日本の美しいお国柄、また、神社のお祭りの意義とその伝統という、二つの事柄についてお話し致します。

まず、本年は明治維新百五十年という節目の年を迎えております。この明治維新という、国の大変革を成し遂げるための基本方針とされたのが、慶応四年三月十四日、明治天皇様が天地の神々にお誓いになった五箇條の御誓文であります。

この近代日本の礎となった御誓文の理念は、現代日本においても今なお受け継がれてお

ります。といいますのも、昭和二十一年元日の「新日本建設ニ関スル詔書」の冒頭において、昭和天皇様は五箇條の御誓文を引用され、その精神に立ち返り、国づくりに努める御決意をなされました。日本の民主主義は戦後に外国から輸入されたものではなく、明治天皇様の思し召しによるものであったということを示されたのであります。

また、同じく明治維新の始まりである、慶応三年の王政復古の太号令には「諸事神武創業ノ始ニ原ツキ」とございますが、これは、初代神武天皇様の建国に、明治維新の理念、日本のあるべき姿を求めたということになります。その理想は『日本書記』巻第三に記される「皇都經營の詔」に見ることができます。

『古事記』上巻に「是のただよへる国を修理固成せ」という言葉がございますが、日本という国は、天上の神々からの命を頂き、万世一系の天皇様がしろしめす国であり続けているのであり、そこに日本の美しいお国柄が端的に表されているといえます。

次に、神社のお祭りの意義とその伝統について御説明申し上げます。

神社のお祭りといいますと、初宮詣、七五三詣、また厄除などが挙げられるかと存じます。これらは個人的なお願いが込められたお祭りでございますが、実は神社では、日本という国家の安泰や国民の繁栄を祈るという、公共的な性格をもつお祭りが執り行われてい

ます。本日はその中から二つ、祈年祭と新嘗祭についてお話しさせていただきます。

祈年祭は、その年の五穀豊穡を祈るお祭りです。二月十七日に斎行されます。「としごいのまつり」とも呼ばれますが、「とし」とは五穀のうちの特に稲を、「こい」とは神様をお願いをするということを示しています。農耕が生活の中心であった我々の祖先にとって、穀物の収穫は生きていくために重要な事柄でした。豊作をお祈りすることは、共同体の安泰と繁栄を祈ることと同義だったといえます。その為、かなり早い時期に国家規模でお祭りが執り行われていたとされており、『日本書紀』巻第二十九にみられる、七世紀後半の天武天皇様の御代に成立したものと考えられています。その後、戦乱によって廃絶された時代もごいますが、明治時代になり、再び国家の重要な祭祀として位置づけられ、再興されております。

新嘗祭は、五穀の収穫を神々に感謝するお祭りで、十一月二十三日に斎行されます。この日は今日「勤労感謝の日」という祝日でございますが、もともとは新嘗祭が斎行される祭日であり、明治六年の新暦採用から十一月二十三日と定められました。「新」は新穀を、「嘗」はお供えすることを意味します。これは、豊作をお祈りする祈年祭と対の関係になるお祭りということが出来ます。収穫を感謝する稲米儀礼としてみた場合、稲作が開始さ

れた弥生時代にまでその起源はさかのぼることになります。『日本書紀』巻第一にも「天照大神新嘗きこしめす時」という記述がみられます。また、とくに宮中における新嘗祭においては、天皇陛下が御自らお育てになった新穀をお供えするとともに、御自らもその新穀をお召し上がりになります。即位後初めての新嘗祭を大嘗祭といい、一世一度のお祭りとなります。

これら二つの神道儀礼は、その起源を太古の時代までさかのぼることができ、時代の変化に影響を受けながらも、歴代の天皇様が祭祀を伝承され続け、今日でも宮中及び全国の神社において執り行われています。

明治維新といいますが、髪型・服装・食事など生活の西洋化や、文明の近代化という事柄が中心的に理解されています。しかし、ここまで私がお話ししてきました通り、明治時代とは、日本という国の歴史について、建国の理念にまでさかのぼって確認し、日本の伝統や文化を大切にした時代だったといえるのではないのでしょうか。そして、この日本をお治めになってきた歴代の天皇様の祈りを仰ぐとき、――今上陛下におかれましては、平成二十三年の「東北地方太平洋沖地震に関する天皇陛下のおことば」に見られるように――、我々日本人と御皇室との連帯が深く感じられるのではないのでしょうか。

さてそれでは、どうか本日のお参拝の記念に、改めて五箇条の御誓文をお読みになり、明治維新に思いを馳せ、日本の歴史を振りかえってみましょう。

(東京都 明治神宮 権禰宜)

郷土横浜と神社

依田信也

皆さん、本日はようこそお参り下さいました。今日は恒例の年末餅つき大会という事で、新年を一週間後に控えお忙しい中、若い皆様に大勢お集まり頂きました。ありがとうございます。今日はこの場をお借りして皆様に郷土横浜の歴史と神社について少しお話しをさせて戴きます。

この横浜の地は現在観光名所にもなっております山下公園、そしてそのすぐ隣にあります「象の鼻パーク」がありますけど、戦後の当時はあの辺り一帯が占領軍、つまりGHQの駐留軍が軒を連ねておりました。そして司令官を努めたマッカーサー元帥はその目の前のホテルニューグランドを拠点として活動しておりました。皆さんが住んでいるこの石川町からほんの目と鼻の先にそういった歴史の跡があるんです。

そして駅右手の小高い山は何山と呼ばれているか知っていますか？そうですね、フランス山です。ここも今では「みなとの見える丘公園」と共に多くの観光客が来られます。皆さんも一度は行かれた事があるうかと思いますが、当時はその名前の通り、フランス軍の駐留所でありました。

私が小学生の頃ですからもう四十年くらい前になりますが、フランス山から尾根伝いの根岸あたりの地域に米軍ハウスというのがあって、大きな柵に囲まれた芝生の庭がある邸宅が密集していました。悪い友達と連れ立ってイタズラしに行った記憶があります。

ですからこの石川町の周りはそうした外国人が多く住んでいた場所なのです。インターネットで探すとフランス山も米軍ハウスも出てきますから、あとで調べてみて下さい。

一方でその昔横浜村と言われた江戸時代には、その名前の由来にもなっていますが、横に長い浜辺が続いており、そこを中心に村が形成されておりました。九年前くらいだったと思いますが、NHKの「ブラタモリ」という番組でも、象の鼻パークからずっと散策して、最後は石川町の上の山手の方まで紹介して歩いて横浜の歴史を紐解いておりましたが、やはりあの波止場の辺り、今の山下公園の辺りが横浜の発祥という事でしたね。

しかし当時の横浜は陸地が少なく、住むには適さない環境でしたから、材木商で財産を

築いた吉田勘兵衛という人によって新田の開発がなされ、約八年かけて今の中区、南区の入江を埋めたてて、多くの人が移り住むようになって、現在の横浜の基礎が築かれました。教科書にも載っておりましたが、これが吉田新田ですね。

その新田の工事にあたっては、その突端部分にあたる場所に日枝神社という神社が建てられ、作業をする人の安全、工事の成功、そして横浜の発展が祈られてまいりました。

現在横浜市は日本の市町村の中で最も人口の多い市で、三七二万人いるそうです。これは四国四県全体の人口とほぼ同じになります。四つの県の人口とほぼ同じと言いますから、どれほど人口が集中しているかわかりますけど、人がたくさん集まって、それで経済も発展していくわけです。ですからこの横浜の発展が吉田新田にあり、その工事を無事完成に導いた氏神様、日枝神社のご加護があるわけでございます。

さて、日枝神社は別名おさんの宮とも呼ばれ、桜木町にあります伊勢山皇大神宮と共に私たち浜っ子の代表的なお社の一つにあげられます。そしてこの諏訪神社はと言いますと、吉田新田ができる前からある神社ですから、当時入江だったこの辺りは漁船の往来も多く、神社の篝火が現代で言う「灯台」の役割を果たしていたと『武蔵風土記』という本に書いてあります。

しかし戦争によって横浜の町は空襲で焼けて、この神社も焼けてしまいました。その後、石川町地区、打越地区の氏子の協力により社殿が再建されました。その後も何度か火事で焼失したようですが、不思議と神社が焼けても町は無事だった事から「火伏せの神」として氏子から深く信仰されてきました。

話が変わりますが、社殿の前に大きい注連縄がありますね、あれは毎年皆さんのおじいさん達の代には氏子の皆様の手作りです、七月中旬くらいから毎晩この境内で大きな木槌で藁を叩いて、水を吹きかけたり、編んだりしながら大きく巻いていくのです。私も何にもしていませんでしたが、ウロチョロウロチョロしながら見ていた記憶があります。そうして出来上がった注連縄をお祭り前に社殿に掲げて清々しい気持ちでお祭りが行われました。日頃町内をお護り下さる神社に対し、町内氏子一同が感謝の気持ちで奉仕するわけです、ですから神様のご加護と人々の奉仕の心が常に連動してるのです。今は残念ながらやってませんが、またいつか復活して今日ここにいらっしゃる皆さんと出来たら、と思っています。

さて、色々と脱線しましたが、横浜の歴史と横浜の神社の事、そしてこの神社の事など少しお話させていただきました。この横浜の町を護って下さる神様のご加護と横浜の発展の基礎を築いた先人達のご恩に報いる為にも、この素晴らしい郷土を後世に受け継いでい

きたいものです。

来年一月初旬の日曜日には今日皆さんで搗いたお餅で鏡開きをしますので、また大勢でお越し戴き、神様のご加護を戴いて、一年が良い年になるようお祈りしましょう。
それでは良い年をお迎え下さい。

（神奈川県 諏訪神社（神奈川県神社庁） 禰宜）

大口真神とニホンオオカミをとりまく

環境問題について

金子 恵 介

山間部に住む人々が恐怖と感謝の念を込め、野山に住まう狼を神として奉った存在が大口真神である。その名前は古事記や万葉集にも表記があり古くより信仰されてきた神である。

大口真神とは神社界隈の呼び方であり、庶民信仰からは御神犬やお犬様など呼ばれている。狼とお犬様という呼称に関して、後に大きな神とかけて狼と呼んだ。狼では畏れ多いので親しみを込めてお犬様と呼んだなどの諸説がある。古くからの庶民信仰である為、全国の間部部に大口真神、また狼の信仰や逸話が存在している。取り分け関東山地の東側、関東平野全域と山地西側、静岡県天竜川沿いに今尚、狼信仰の風土が色濃く残っている。その中でも特に秩父地方には大口真神に関する神社が集中している。

私の奉職している埼玉県長瀨町に鎮座する寶登山神社もその一つであり創建の由緒にも

大口真神の記述がある。

千九百年前に日本武尊命が東征の折りに遥拝をする為、寶登山に登られた。しかし山火事に遭われ進むことも退くことも出来なくなってしまう。すると何処からともなく黒と白の山犬が現れ山火事を消し止め日本武尊命は無事に山にお登りになることが出来た。この山犬こそ大口真神であり、山の神の御遣いである。このことに感謝した日本武尊命はお登りになられた山を火止山と名付け、神社を建てられた。これが寶登山神社の由緒である。

こうした寶登山神社の由緒のみならず、秩父地方とその周辺地域には多く狼と大口真神の話が今日まで伝えられてきている。

寶登山神社に程近い場所に大口真神の名前が記された石碑が二つ存在している。一つは娘を襲った狼を棒で打ち倒しこれを供養する為に娘の父親が建てたもの、もう一つは狼の狛犬に唾を吐き崇られてしまった人がその謝罪の為に建てたものである。こうした石碑に纏わる話以外にも狼の喉に刺さった骨を抜いてやったらお札にイノシシを置いていった話、神社の狼像の出来に喜び足跡を残していったという話など情緒溢れる話が多く残っている。

こういった日本の伝承に対し西洋圏での狼が登場する昔話はこの話でも狼を悪者且つ狡

猾な存在として扱ふことが多い。それは西洋の人々に狼は集団で家畜を襲い狡猾に人間へ害を成す存在であるという認識があるからである。勿論、日本でも狼による家畜また人々への被害は出ていたが、日本の、主に農民たちは狼の恐怖と同時に感謝の念も持っていた。今から百年以上前の山間部には日本固有の狼であるニホンオオカミが生息していて、特に関東山地に多く数がいたとされている。

山間部の食物連鎖に於いて頂点に立つ狼は鹿やイノシシなどを捕食していた。そのことが農作物を荒らす獣の被害を削減していた為、農民たちは狼に四足除の御加護を見出すようになり、鋭い眼光と遠吠えから盗賊除、先の寶登山神社由緒の様に山火事や焼畑に関係があるとされ火防除の御加護もその神性に見出され信仰されることとなる。

こうした火防、盗賊除、四足除などの信仰が爆発的に広がったのは江戸時代後期である。狼を奉る神社への参拝は講と呼ばれる組織を構成して行われた。参拝の晩には狼の御姿が描かれた護符を家庭毎にいただいている。この狼の護符は先にも話題に触れた狼信仰の篤い関東山地周辺の寺社を中心に頒布しており古きより今尚、講を組織して参拝される方々も少なくない。全国的に見てもこの地域に残された独特な信仰形態であると言える。

関東で狼の護符を頒布している寺社は二十以上であるとされ、寶登山神社もその一つに

挙げられる。寶登山神社では狼の護符は箱の形をしており、一年おきに御眷属の返却と借用を行う御借換えと呼ばれる形式で頒布を行っている。また毎月七日の明朝に白米を羽釜で炊き上げ、御眷属様に召し上がっていただき精力をつけていただく御炊上祭が斎行されている。御眷属様は御炊上祭の後にまた各家庭へとお戻りになり御神徳を奮われる。

このように昔の人々と密接に関わり、信仰されてきた狼であるが、その信仰の対象であったニホンオオカミは百二十五年前、奈良県での捕獲を最後に発見例が無く絶滅したとされている。その原因は明治時代による西洋文化流入に伴う狂犬病の蔓延、それを駆逐する為の狩猟、山の開発による餌不足、古い道具である頭蓋骨目当ての乱獲など様々な要因が重なり絶滅に至ったとされている。これは人間の手により原因が広げられ、人間の事情によって行われたことと言える。

狼という捕食者が消え、鹿や猪が増え続け深刻な環境問題となっている。これに対し海外のタイリクオオカミを日本の山に放す計画が持ち上がっている。様々な議論が成されているが賛否両論であり今のところ実施されていない。此の事に関し皆さんはどうお考えになっただろうか？

こういった環境問題は人間の生活圏拡張と自然のバランスが損なわれることで消失して

いると思う。バランスが崩れることで前述してきた狼の事例のように今まで当たり前であった事が一転して消え去り、幻の存在となってしまう。私はこの事態を自然の多いところに住んでいる故になんとかでも避けたいと思っている。そして美しい自然や歴史ある風土を神主の立場として出来ることを模索して守っていきたいと考えている。

この講和を聞き、どんな些細なことでも構わないので自分の身の回りに起きている環境問題を知り、熟慮し、自分に何が出来るのかを改めて考え直す機会となっていただければ幸いと思う。

(埼玉県 寶登山神社 権禰宜)

あの日から

佐々木美津子

日本を世界を大きく揺るがせた平成二十三年三月十一日午後二時四十六分、東日本大震災から七年が経ちました。あの日のが忘れることはできません。

大津波で甚大な被害を受けた陸前高田市は山を切り崩しの高台造成が進み住宅再建や公共施設整備が行われておりますが、大津波による死者一千五百五十七人、震災関連死を含めますと一千六百四人が犠牲となり、今も二百二人の行方がわからないのです。

私達岩手県神社庁気仙支部は、震災犠牲者の御霊を慰め被災地の早期復興を願い、平成二十三年九月十一日瓦礫広がる陸前高田市で第一回を、そして翌年からは三月十一日に毎年海に向かい地域の人々と共に冥福を祈っております。あれから七年過ぎてみれば、あつと、いう間の歳月で、復興はまだですが、それなりに進み、国の力、全国の皆様方の支援あつてのことと感謝いたしております。震災の時に生れた子らは、すでに小学生とな

り、発生当時十代だった若い人たちは、社会人としてそれぞれに自立しはじめているほどの歳月です。

ちょうどあの日、三月十一日午前、私の神社に初宮詣りに来ていた多恵ちゃんは、小学二年生になりました。父と母そして父方の祖父母、母方の祖父母と一緒に……。家族に見守られ祖母に抱かれた多恵ちゃんは、すこやかな成長を祈り幸わせそのものでありました。ところが神社から帰った二時間後にあの大震災が起きたのです。多恵ちゃんとお母さんは、母の実家に帰った後のこと、父の祖父母そして父の弟は非難した市民館で亡くなり、お父さんは自宅の三階屋上に逃げ波を受けながらも助かり、一命は取り留めたもののあの恐怖は忘れることは出来ないと言っていました。多恵ちゃんが四歳になった時によく家を建てた時にこのことを話したそうですが、仏間の祖父母の写真に手をあわすとのことで、学校においてもお友だちに親切でハキハキしたよい子に育っております。

吉田君は、中学校の卒業式の前日でした。式のリハーサルを終え帰りの会での地震でした。揺れが終わってから校庭に避難をした時に海の方を見たら、水が引き底が見え更に学校の裏山へ避難したと言う、家族は無事だったが自宅は全壊、高校三年間は仮設住宅での生活でした。あの時の自衛隊の人達が危険を顧みず遺体捜索を行い、救援物資を届け、仮

設の風呂を造るなど災害時に活動するその姿に深く感動し自分も「誰かを助けることが出来たら」と思い高校卒業後陸上自衛隊に入隊し訓練に励んでおります。中学二年生だった祐菜さんは避難所に派遣されてきた看護師さんを見て自分も人の為に仕事をしたいと思いい、看護師として病院で働いております。祐菜さんは実家が全壊し、母と姉は今もわからず、家を失った被害者でもあり遺児でもあります、そのように呼ばれるのには、実感が無いと、「自分の人生後ろ向きになってはいけない、前向きに進もう」と、県立の病院で働いています。

そば屋の店主として頑張っている及川君、あの日、幸いにして昼食に来ていたお客様は帰った後で、父や母、スタッフの方々と遅い食事をとっていた時でした。あの強い地震、父の「逃げろー」の声でそれぞれ店を飛び出し、かろうじて生きた及川君、父との再会は一ヵ月後の遺体安置所で、店の再建など考えるところではありませんでした。しかし生きていくためには、店を出さなければと…。

父のいない、そしてどんぶりも鍋も何も無いところからの再建は、それこそ大変でした。父の味を求め、何度も何度も作ってみるものの味を出すことも出来ずに、悩みに悩み円形脱毛症に…。そんな苦勞の末、昨年高台に「やぶや」ののれんを出すことが出来ました。

奥様とともに笑顔で頑張っております。

このようにあの時中学生、高校生だった若い人達は立派な大人になり社会の一員として、それぞれの道に進んでおります。

派遣やボランティアで支援においでになった自衛隊、警察、お医者さん、看護師さん、全国の大勢の方々、亡き祖母の姿から、今度は若い人達が大好きな故郷陸前高田市の復興を支え、時代を担う一人として力強く歩んでおります。

陸前高田市の復興のシンボルとなりました一本松、その松の枝から接木して育った松、松ぼっくりの種から育った若松、あの白砂の松原の再生に向かって一本松のある高田松原で育つ若木の松と共に…。

子供たちが、お年寄りが、すべての住民たちが笑顔で生活出来る陸前高田市に生まれることを祈りながら。

（岩手県 天照御祖神社 宮司）

子供達に神社をどう伝えるか

上 藪 優 介

突然ですが、第三十四回神道講演研修会にご参加の皆様には質問いたします。

「神主さんになって良かったと思うことと、大変だなと感じることはなんですか」

この質問は、先日、私が、奉職しております調神社で、地元の小学生の男の子から受けたものです。皆さんは、どうお答えになりますか？

私の現在、ご奉仕させていただいております、調神社は、さいたま市浦和区にございます。さいたま市浦和区は、東京の通勤圏として、今も尚、人口が増えている地域であります。小学校では、全校生徒が千人をこえている学校も多くあります。

浦和駅から、徒歩十五分。旧中山道沿いに神社があります。ウサギが神様のお使いということもあり、境内には、多くのウサギの像があります。そのことから、子供達からは、ウサギの神社と親しまれています。

また、サッカーJリーグの浦和レッズダイヤモンドの必勝祈願を奉仕している神社としても地域の方々から慕われています。

そういう神社にご奉仕させていただいて、「神主さんになって良かったと思うことと、大変だなと感じることはなんですか?」という質問。

正直、こんな質問をされるとは、思わなかったです。私は、「神社」や「神主」について、少しでも、興味を持ち、理解をしてもらい、さらには、厚い崇敬に繋がっていくことを願い、この質問について、深く考えることにしました。

そもそも、神職としての役割は、古き良き伝統を守り、後世へと伝えていく、大切な役割があります。また、御祭神、御社頭を始め、境内を守っていくこと、さらには、日々、日頃の祭事を疎かにすることなく、ご奉仕していかなければなりません。しかし、それだけではいけません。總代、氏子、崇敬者、参拝者、神社に来られる全ての方々、良き関係を築き上げていくことが、最も重要なことであると考えます。

その中で、先ほど申し上げましたが、さいたま市は、東京のベットタウンとして、今も尚、人口が増え続けています。街が大きくなると、そこにも、問題が生じてきます。マナーやモラルの問題です。神社に来られる方との良い関係性を築いていくには、やはり、来ら

れる方には、マナーやモラルを守っていただきたいと思っています。

當神社では、ポケモンGOのスポットがあるらしく、ポケモンGOだけをしに来られる方がたくさんいらっしゃいます。まずは、参拝してほしいという気持ちと、何とも言えない複雑な気持ちになります。あた、お金を払えば何をしてもいいんだ、という、テーマパーク化になりつつあると、感じます。大きなカメラ機材や椅子を持ち込み参道の真ん中を占領する家族、手水鉢に石を投げ入れる子供に、見て見ぬふりをする親。ゴミを平気で捨てるお年寄り、勝手に野良猫に餌を与える人、注意した警備員につかみかかる人。

色々、考えましたが、大変だな。って、感じるどころかな、と思います。

それでも、やっぱり、調神社の「神主さん」になって良かったことは、調神社と隣接する調宮公園には、多くの木々があり、緑豊かであり、その中で、所謂お仕事をさせていただけということが、良かったと、感じるそうです。

木々の緑は、人々の心を豊かにしてくれます。現代では、便利さを求め、多くの木々を倒し、川をせき止め、山を削り、そこに、電車を走らせ、家々を建て、暮らしています。

鎮守の杜の落葉樹が葉を落とせば、迷惑している。木を切ってしまう！と、怒鳴り散らす人まで、出てきました。しかし、緑、自然が無くなれば、人々の心は、すさんでいきます。

環境は、人々を大きく変えていきます。人々の気持ち、思考、さらには、言動までもが、環境によって、大きく変わっていきます。私自身、さいたま市で生活してますが、三重県に帰省しますと、気持ち、言動が大きく変化していると感じます。何かしら、せわしく動き回る街、信号が青になり、少し出遅れると、後からクラクションをならされます。落ちてきません。実家に帰ると、時間の流れがゆっくりと回っていると、感じます。

山々があり、緑の豊かさが、人々の心落ち着かせていると、感じます。

そんな時、ふと、ジブリ映画の「もののけ姫」のある台詞を思い出します。その台詞は、エボシという登場人物が、発した衝撃的な言葉であります。

「森に光が入り、山犬どもがしずまれば、ここは豊かな国になる。古い神がいなくなれば、もののけ達も、ただの獣になろう」

本当に、そうなのでしょうか？

神社には、緑豊かな木々があります。そこに、入ると、心が洗われ、豊かな気持ちへとさせてくれます。子供達には、目先の豊かさだけを求めるのではなく、心の豊かさを心から感じ取ってほしい、と、感じます。

今だからこそ

家庭のおまつりを考える

西川 英 寿

皆さん改めましておはようございます。本日も早朝よりのご参拝誠にありがとうございます。ます。

皆さんが、毎朝神社でお参りをなさり、神様に日々の生活を感謝し、ともにお参りに来られたお仲間と楽しくお話をする姿を拝見させていただくと、神様のご神徳を戴いているのだなど、いつも感じさせて頂いております。皆さんは如何でしょうか。

それでは、本日は、家庭のおまつりについてお話をしたいと思います。

核家族化が進み単身世帯が増えた現代では、家庭環境や住宅状況の変化など神棚を中心に行う家庭のおまつりを行なうことが難しくなっていました。このような時であるからこそ改めて家庭のおまつりの大切さについて、お話させていただきたいと思います。

私たち日本人は昔から生活に欠かすことの出来ない大切な場所に神様をおまつりしてき

ました。家の中には神棚を設け、玄関や台所などに神札をおまつりし、お正月には歳神さまを、お盆には特別に棚を設けてご先祖さまをお迎えします。そして何か特別なことがあれば神さまに報告しお祈りをしたり、朝晩の食事には手を合せ感謝申し上げます。このように神さまは、昔から日本人の生活の中で身近な存在であつて、日々のおまつりを通して、また、日々の生活の中で神さまを常に感じ祖先を思い感謝する敬神崇祖の心を自然と育んできました。特に毎朝の神棚のおまつりは、家族が同じ気持ちで神棚の前に立ち神さまに感謝を申し上げ、家の安泰家族の幸せをお願いする。家族の絆を深め強くする大切なものです。私も家族と神棚の前でお参りしていると神さまと共に家族との一体感を得られ、自然と心が温まり幸せな気持ちになります。この家族の一体感は、日々の生活に潤いと活力を与えてくれます。そして、一日の生活の中に、当たり前のように家庭のおまつりが正しく実践されることは、純粹無垢な次世代の子供たちにしっかりと記憶され、人が人として生活していく上で必要な感謝の気持ちや思いやりの心、そして、礼儀作法も自然と身に着くことでしょう。家庭のおまつりが実践できていれば、家族が幸せを共有し家庭が安泰するのです。

然しながら、今の世の中は、私たちの日常生活の中では考えられないような多種多様な

酷い事件が起き、誰にも知られること無く亡くなっている高齢者の孤立死などが、よく報道されるようになりました。

これは、核家族化が進み、単身世帯が増える中、家族とのコミュニケーションが減少し、孤立する人が増える。また、地域交流の希薄化など様々な要因が問題として上がっています。このような社会状況の中、家庭のおまつりが減ってしまい、人が人として生きる道を見失ってしまったのかもしれない。

この様な時代だからこそ、今、家庭のおまつりを見直すことが必要ではないでしょうか。家庭のおまつりは家族揃って実践することに意義がありますが、二〇一五年の国勢調査では単身世帯の比率が三分の一を越え、現在も増え続けています。昔の教えに「こころはかたちを求め、かたちはこころを進める」という言葉がありますが、目に見える神棚のおまつりを毎日正しく行うことによつて、目には見えない、おまつりに込められた御先祖様から受け継いだ心に触れることができる。単身世帯についても、神様を通し家族と繋がる事が出来るのではないのでしょうか。今は神社でも現況を考え住宅事情に合せた形で、おまつりできる神棚も用意されています。家庭のおまつりを毎日実践出来るのがこれらの問題を解決する方法の一つになるのではないのでしょうか。

最後になりますが、皆さん、不易流行という言葉をご存知でしょうか。不易とはいつまでも変わらないこと。流行とは時代時代に応じて変化することです。この二つの言葉が一つになると、いつまでも変化しない本質的なものを忘れない中にも、新しく変化を重ねているものを取り入れていくこと。時代の変化に取り残されてしまうとそのもの自体は失われてしまう。時代時代に応じて変化することによってその本質は変わることなく生き続けていく。現代の人は、流行ばかり目に行き過ぎてしまい、不易、変わらない、変わってはいけない本質を見失ってしまっているのかもしれない。

私たちは今までだって不易流行で先祖様から日本人の心を受け継いできたのですから、これからも時代の変化に対応しながら皆さんも家庭のおまつりを続けていかれますこと、そしてご家族、親族が集まった時には全員でおまつりをして、少しでも家庭のおまつりの大切さを伝えていただきたいと思います。それから朝のお参りにもなるべく近隣の人にお声掛けいただければ大変ありがたいことですし、高齢者の孤立化を減らす一助になるのかもしれない。

日本の国がいつまでも美しい自然とともに心の美しい国。浦安の国であることを願い、また、皆様が今日一日幸せにお過ごしいただきますことをお祈りいたしまして、お話を終

わりにさせて戴きます。

本日のご参拝誠にありがとうございました。

(神奈川県 鶴岡八幡宮 権禰宜)

今、神社に求められていること

吉 本 宙 矢

来年、元号が変わるという話は、皆さん既にご存知のことと思います。三十年続いた平成の御世も、いよいよ代替わりということになります。

昭和の時代をご存知の方からしてみれば、三十年という時間はあまり長いものではないのかも知れません。何せ、昭和時代は六十年以上続きました。昭和のはじめ頃に生まれた方は、もう九十歳を過ぎるようなご高齢でいらっしゃることになります。

昭和時代の前の時代、大正時代をご存知の方となりますと、これはもう百歳を過ぎていらっしゃる。さらに明治時代となりますと、いま国内最高齢の女性が一六歳、明治三四年生まれということですから、もはや明治末期にお生まれになった方ですら稀、ということになります。

何せ今年、西暦二〇一八年は、明治百五十年の節目の歳なのです。

百五十年……にわかには想像できない歴史です。明治元年、つまり西暦一八六八年に始まったいわゆる「明治維新」によつて、わが国は近代国家に生まれ変わったとされます。

最近、この明治維新の評価に関する、新たな視点が脚光を浴びているように感じます。明治維新こそが、後年わが国が悲惨な敗北を喫する元凶であつたのだといった考え方です。こうした歴史観の是非はここでは触れません。ただ、明治という時代に、平成の御世を生きる我々の関心が向けられるのは、素晴らしいことなのではないでしょうか。

繰り返しになりますが、明治百五十年なのです。こうした機会で注目されることがないと、明治という時代が「学校の授業で習つたような……」という遠い昔の歴史となり、いつの日か完全に忘却されてしまう気がするのです。

明治時代、我々のご先祖様方は西欧諸国に倣つた国づくりを始められ、日清、日露の戦争を経て、近代日本を作り上げました。

わが国を、西欧の方々から見れば「極東の小国」から、少なくとも中国を破りロシアを退けた、「アジアの中では最も強力な、なかなか侮れない国」に変貌させたわけです。

そこには、大変な苦労や犠牲がありました。

日本が発展し、他国の植民地になる事がなかったのも、この時代の方々の、それこそ血

のにじむような努力があったからこそなのではないでしょうか。先人達が築かれた日本国の発展を、後世にも継承してゆかねばなりません。

皆さん。明治という時代を忘れないでください。明治百五十年の節目たる、今がいきっかけです。

是非、お子さんやお孫さんと、ご先祖様の話をなさって下さい。そして、明治という時代、ひいては日本の歴史について話をなさって下さい。そして、話をする中で、よければご自宅近くの神社にも足を運んでみて下さい。

小さな神社にも、過去の歴史に関わるものが多く残されているのです。例えば、戦地で戦い、亡くなられた方々を顕彰し、御魂をお慰めするための忠魂碑です。

近年、若い世代の間でもゲームなどを入口に過去の戦争、特に大東亜戦争への関心が高まっていると言います。このことに関しては、いろいろと思うところのある方もいらっしゃるかと思います。

ですが、きつかけはどうあれ、過去の歴史が忘却されてしまうことに比べれば、遙かに良いことなのではないでしょうか。

身近に、そうしたゲームで遊んでいる若い方がおりましたら、是非一緒に昔の話をして

みて下さい。「こんなことも知らないのか」とか「戦争を軟派なゲームにするなんてけしからん」と思うこともあるかもしれません。

それでも、興味が全く無いより数等良いではありませんか。こうした僅かなきっかけがないがしろにしているのは、ご先祖様方が築いた過去の歴史は、いつか本当に忘却されてしまいます。

残念ながら、激変する国際情勢の中において、わが国の前途は必ずしも容易なものではないようです。

未来を担うはずの子供たちは減り続け、もはや移民の受け入れなくして国の発展は維持し得ないとまで言われております。

そのような中、国家、そして民族の歴史まで喪われてしまつては、どうして日本国の姿が維持できましようか。

どうか皆さん、国の歴史、地域の歴史、そして家族の歴史を大切になさつて下さい。子供たちに、歴史を伝えていつて下さい。

神社は、古来地域の人々に寄り添って、地域の歴史を見つめてきた場所です。毎日を忙しく、必死に過ごす日本人たちが、ふと自分たちの歴史に想いを致すとき、たとえ世の

中がどのような姿になっていようと、神社がその道しるべたることができれば、と考え
ております。

どうか、これからも神社にお力添えを賜りますよう、お願いします。ご清聴ありがとう
ございました。

(神奈川県 鶴岡八幡宮 権禰宜)

遊就館について

野崎 竜太

皆様、本日はようこそ靖國神社に御参拝くださいました。

靖國神社には二百四十六万六千余柱の御祭神がお祀りされております。

その御祭神の御事績と御遺族の想いを伝える施設が遊就館でございます。

今から遊就館の展示の中からいくつか話をさせていただきます。

今回お話をさせていただくのは「奇跡のヤシの実」、「英霊に捧げる花嫁人形」、「樺太真岡郵便局の九人の乙女」の三件です。

（奇跡のヤシの実）

昭和十九年、島根県出身の軍属山之内辰四郎命は戦況の悪化によりマニラ市を退避する

ことになったのですが、その時同郷の友人である飯塚正一さんの名前を記してマニラ湾からヤシの実を流しました。

山之内さんの一行は翌昭和二十年フィリピンにおいて移動中、米比軍約三百名とゲリラ二百名に包囲されて大腿部に貫通銃創を受け歩行出来なくなつて自決されました。

山之内辰四郎命が家族に宛てて書いた手紙が遊就館に奉納されておりますが、その中に飯塚さんの事が出てきます。二通の内一通を読んでみます。

これから農繁期に向ひますから何卒御身大に御働きのほど御祈り申上ます。

老母や子供の面倒をくれぐれも御願ひ致します。母に宜敷く。

近所の皆様に宜敷く御傳ひ下さい。

飯塚君、今朝無事帰隊しましたので貴女からの送物受取ました。色々と御無理な御願ひ致し申訳ありませんでした。

皆元気で暮して居るとの事安心しました。

僕も此れで又飯塚君二人で楽しく暮す事が出来ます。

貴女から送っていたいただいたもちで今日中食にぜんざいをしていただきました。目

井君は三月中頃舟共にセブ島に行きましたが又船便がありますから便のものを送っておきますから宜敷く。時間がありませんから又後日。

病院船ばいかる丸ニ託ス

四月二十八日

流されたヤシの実は山之内さんの故郷である島根県に至り、浪間に浮かんでいるのを魚釣をしていた方が偶然発見。

書かれていた名前と地名を手掛かりにして飯塚氏の許へ届けられました。

飯塚氏は過去の記憶をたどり、流した人を山之内さんであると特定してそのヤシの実を辰四郎命の未亡人きよ子さんの許に届けました。

実に三千キロの距離、三十一年の歳月をへて妻の手許に帰ってきたのです。

ヤシの実は「奇跡のヤシの実」と呼ばれて遊就館に実物が展示されているのですが、この感動的な話をヤシの実の展示風景画像と共に関係者を交えて是非テレビで放送したいという話が来ております。

ヤシの実実妻宛の書簡、戦死詳報、御遺影などともに昭和五十一年に山之内辰四郎命

の長女の方から奉納されました。一緒に来館された戦友は「帰ってきたのはヤシの実だけではなく、山之内さんの魂も一緒に帰ってきたのです」と語っていたそうです。

（花嫁人形）

遊就館第十八号展示室には花嫁人形が展示されています。

花嫁人形を奉納されたのは北海道に住む佐藤ナミさんと言います。

昭和二十年四月十日、沖縄において戦死された息子さんの佐藤武一命たけいちに会うため昭和五十一年に北海道から靖國神社にお越しになりました。

この時、花嫁人形の他に息子の佐藤武一命に宛てた一通の手紙、熊の親子の木彫りの置物などを奉納されました。

手紙には次のように記されております。

武一よ貴男は本当に偉かった。二十三才の若さで家を出て征く時、今度逢う時は靖國神社へきて下さいと雄々しく笑って征った貴男だった。どんなにきびしい苦しい戦

いであつただろうか。沖縄の激戦で逝ってしまった貴男 年老いたこの母には今も二十三才のままの貴男の面影しかありません。日本男子と産れ、妻も娶らず逝ってしまった貴男を思うと涙新たに胸がつまります。今日ここに日本一美しい花嫁の桜子さんを貴男に捧げます。私も八十四才になりましたので、元気で居りましたなら又逢いに来ますよ。どうか安らかに眠って下さい。有りがとう。

祖国に命を捧げられた方々の大半は若者です。その中には妻を娶ることなく散華された方も多数いらっしゃいます。

独身で亡くなった我が子、我が兄弟の為にあの世で結婚して幸せに暮らしてほしいという願いをこめて靖國神社の御神前に花嫁人形が奉納されるのです。

佐藤ナミさんが昭和五十七年に最初の花嫁人形を奉納されて以降、現在では約三百体の花嫁人形が御神前にお供えされ、保管されております。

「靖國神社へ来てください」と身内に語った英霊とあの世での幸福を願ってお供えされる花嫁人形。両者の魂の交流の証が花嫁人形なのです。

（九人の乙女）

遊就館にはソ連軍の侵攻により自決した樺太真岡郵便局の女子電話交換手九人の御遺影や御遺品が展示されております。

昭和二十年八月十五日、日本は終戦を迎えます。

この時樺太全土に婦女子、並びに十三歳未満の男子に内地引揚げ命令が出されました。しかし、すぐに交代の準備が整わないことを知った交換手の女性たちは非常な覚悟で残留を申し出て郵便局に踏みとどまりました。

八月九日、日ソ中立条約の破棄を一方的に通告して、満洲に攻め入ったソ連軍は十五日に終戦を迎えても攻撃を中止することはありませんでした。そして八月二十日、樺太の真岡沖にソ連艦隊が出現して艦砲射撃の後ソ連軍は上陸。町は戦場と化しました。

この時、真岡郵便局には高石ミキ電話主事補以下九名が緊急情報連絡と交換業務に狂奔していました。

郵便局の間に砲弾が炸裂し、ソ連兵の姿が見えます。

そのような切迫した状況の中、九人の女性達はついに覚悟を決して交換台にむかって「皆

さんこれが最後です さようなら さようなら」という言葉を発した後、全員が青酸カリを飲んで自決されました。

昭和四十三年九月五日、昭和天皇・皇后両陛下は北海道稚内公園の「九人の乙女の慰霊碑」をご覧になられてその話をお聞きになりました。

そして昭和天皇は

「樺太にいのちをすてしたをやめの こゝろおもへばむねせまりくる」

という御製を、香淳皇后は

「樺太に露ときえたるをとめらの みたまやすかれとたゞいのりぬる」

という御歌をお詠みになられています。

展示ケースの中には九人の乙女の中の一人、可香谷シゲ命の着物が展示されています。これは平成十六年に可香谷シゲ命の弟さんが御遺影、襦袢などとともに奉納されたものです。

先般、拝観にこられた団体の方々にこの解説をしたのですが、帰り際に年配の女性が「私も終戦の時に樺太にいてたくさんソ連兵が集まっているのを見た」というお話を聞き、九人の乙女たちに対して時間的、空間的に非常な身近さを感じました。

遊就館は現在、展示室は二十二部屋ございまして三千点の御遺品、史資料が展示されております。

地下には収蔵庫がありまして、そこにおよそ十萬点におよぶ御遺品、史資料が収蔵されております。

私は経験がないのですが、御遺族の御申出により臨時に御遺品を展示をする際など、どうしても見つからない時がまれにあります。

何時間も何日もかかる場合があるのですが、そのような時に御祭神のお名前を念じたりすると御祭神がその場所を教えてくれる。たとえば音がして、その音の方をみると探していた御遺品があったなどという話もあります。

みなさま方におかれましては是非、遊就館に足をお運びいただいて御祭神が抱いておりました国家や郷土、肉親に対する思いや肉親の御祭神に対する気持ち等を直接に感じとっていただければと存じます。

（東京都 靖國神社 権禰宜）

牧口八幡社の輪こぐり

小野 日 隆

本日はお暑い中をようこそお参り下さいました。世の中自体が忙しいのか、それとも年のせいなのか、時間の流れの速さに驚かされる毎日と考えるのは私だけでしょうか。この前こそお正月を迎えたばかりだと思っていたのに、今日は七月三十一日、既に一年の半分以上が経過、マラソンで言えば、折り返し地点を過ぎてしまいました。この時期に、この半年分のお祓いをするのが、牧口八幡社の夏越祭、輪こぐりです。

神事の前に、この夏越祭の説明をしておきます。先程祝詞を奉上了した御神前にしつらえられていた茅（ちがや）で作った大きな輪、茅の輪が今、総代の皆様方によって拝殿前に準備されましたが、これから皆様方には、この茅の輪を潜っていただきます。皆様も新聞やテレビで六月の三十日に行われた、各地の夏越祭と呼ばれる、夏越の大祓い、茅の輪神事の報道を目や耳にしたと思います。夏越祭は、夏を越す祭りと書きますが、文字通りお

正月からの半年分のお祓いをして夏を乗り切る、夏を越して後半年の息災を祈る神事です。当牧口八幡社は旧暦に則ってか、旧暦六月三十日に近い月末である、七月三十一日の今日行っております。

皆様方も、折々にお祓いをお受けになられると思いますが、わざわざこの時期に大祓いという特別のお祓いの行事をするということはどういう事でしょうか、お正月になりますと、私たちは家にやってきた年神様から一年分の新しい力を頂きます。あの門松は、神様が宿る神籬として、山から切り出した、常磐木、正に「松」であり、神様を家にお招きする目印でもありました。鏡餅は、神様が宿る御鏡であり、その神様の魂の籠った鏡餅を家長が家族に分け与えたものがお年玉です。こうして私たちは、年が改まると年神様から頂いた、年玉で身も心も充実した状態になります。いわば各々の燃料タンクは満タンになるわけです。ところが、私たちは生活をしていく中でその時間の経過と共に、せっかく神様から戴いた力もだんだんと萎えてきます。ちょうど車も走り続ける中でガソリンが減っていくように、私たちの気力や体力が衰えてきます。半年も経つとそれはピークを迎えます。体に垢がたまってくるように、知らず知らずのうちに、我々に罪や穢れがたまってきます。まして季節は真夏、このままでは厳しい暑さの夏は乗り切られませんか。そこで体についた

罪や穢れを祓いさつて、お正月の様な清々しい気分に立ち返つて、後半年を無事に乗り切つて、また新しい年を迎える。そして再び年神様から新しい力を頂く、そのためにお祓いを受けるのです。これが夏を越す祭、夏越の大祓いです。

そこで今から潜っていたきます茅の輪のお話をしなければなりません。茅の輪に関して、次の様なお話が残されています。昔々、素戔鳴尊が旅をしている途中、蘇民将来、巨旦将来という兄弟のところで宿を求めたところ、弟の巨旦将来は裕福であるにも関わらず宿泊を拒んだのに対し、兄の蘇民将来は貧しいながらも精一杯のもてなしをしました。その数年後、再び蘇民将来のもとを訪ねた素戔鳴尊は「もし悪い病気が流行ることが有ったときには、茅で輪を作りそれを腰に下げたら病気にかからない」と教えました。そして疫病が流行った時に巨旦将来の一族は病に倒れますが、蘇民将来とその家族は助かったという事です。因みに、私は学生時代の四年間を伊勢で過しましたが、伊勢では住宅の玄関に飾られた注連縄に、蘇民将来子孫の家と書かれた木札が取り付けられている家を多く見ましたが、その時に、蘇民将来、巨旦将来の話を知りました。我が家は蘇民将来の子孫ですとアピールして災厄を免れようとしたのですね。では、なぜ、茅の輪でなければいけないのでしょうか。なぜ茅なのでしょう。この伝説の根底には、茅という植物自体に神

聖な力があるとの考えによるものからだと思われます。固い大地を突き破って芽を出す茅、その成長した葉は刃物を連想させる鋭さですし、実際にその葉で怪我さえます。三種の神器の一つが剣であるように、剣、刃物は神聖なものであり、厄除け、魔よけ、悪を切り捨てる刃物を連想させる茅もまた神聖な力を持つと考えたのです。改めて茅という字を見ると、確かに草冠に矛という字ですね。

もう一つ大事なお話があります。大祓詞という祝詞の事です。茅の輪を潜る前に全員で大祓詞を奏上いたしますが、私がゆっくり奏上しますので、皆さんもお配りした大祓詞と一緒に声を出して読んでください。今からみんなで奏上する大祓詞は、中臣祓詞と言われ、奈良時代以前から存在し、千二百年以上の歴史を持つ古い祝詞です。千二百年前の文章をそのまま読めるといふ事事態が、日本の歴史、文化のすごさ、素晴らしさを象徴していますが、この祝詞が千二百年間ずっと奏上され続けてきた、繰り返し繰り返しその祈りが捧げられてきたという事がどれだけすごい事か、改めて驚かされますね。大祓詞は約九百の文字から出来ていますが、その内容は、先ず建国の由来を説き、そして人々が犯す故意の罪や無意識の罪穢れの祓い方が述べられています。そして、そのような祓いを行うと、罪穢れがどのように消滅するかが述べられています。この大祓詞を奏上することで、神様か

ら頂いた本来の自分に立ち返る、すなわち神様の心と自分自身が一緒になるのです。そして、茅の輪を潜る事でそのお祓いの仕上げをします。

今年の夏は、格別暑いようですが、みんなと一緒に大きな声で大祓詞を奏上し、そして茅の輪を潜って罪穢れを祓いさり、身も心もリフレッシュして、夏を乗り切りましょう。ご参列皆様方の無病息災、健康長寿を改めてお祈りします。それでは神事を始めます。

(大分県 八坂社 宮司)

見えないモノ

前田 貴大

この度は「見えないモノ」という表題を用い普段の奉仕の中で感じた思いを少しお話させていただこうと思います。

私は現在、京都の八坂神社に務めまだ五年目であり、さほど多くの参拝者と接した訳ではありませんが、参拝は賽銭を入れて手を合わせるだけで良いというような意見が聞こえてくる程、決まった形のみに囚われた、枠にはめたお参りをしてしまったている方をお見受けする機会がよくあります。目に見える形、行為として行うことも非常に大切なことでありそれ自体を否定するべきものではないことも十分理解しているつもりです。それでも、私は目に見えるお社に奉仕をしているのではなく、そこに見えなくともいらっしゃる神様に對してご奉仕をさせていただいておる心積もりです。その目に見えない対象に形だけでとらえて、札の心を欠いてしまっていては、せっかくの参拝の意義が無くなってしまうので

はないかと思っております。

昨今はパワースポットブームや御朱印ブームなどで社寺仏閣を訪れる人々が増えてきております。これは私個人的にはとても良い事であると思います。いろんな年齢層の方が動機はどうあれ自ら興味を持ち、お寺なり神社なりを参拝いただく事で、普段の生活とは違った何かを感じ、持って帰っていただけではないかと思うからです。しかし、どこかの遊園地のような行楽施設を歩いているような、写真だけをとって満足される方や、朱印だけを受けて満足される方も併せて増えてきております。これは、酷く私の主観が入ってしまった意見になるのですが、わざわざ御祈禱を受けに来ているのにサングラスをかけアロハシャツに短パン等の非常にラフ極まる服装でお越しになられ、本殿内の御神座近くで手を合わせていただいても、神様は呆れてしまうのではないかなと思っております。また、朱印に於いても浄書して神璽印を押した紙をそのままクシャッと鞆に入れられてしまった時や、携帯を見ながら、食べ物をはおばりながら御札等を受けていかれるのは、私としてはもったいないと思うのです。別に正装をして参拝しろだとか、お参りを楽しむなというつもりは一切ありません。私としても初めて訪れる境内地等は非常にワクワクしながらお参りをしています。そうではなく、せっかく神社という普段の生活の場とは異なる神域に

訪れたのですから、少しでも神様と向き合っていただき、常日頃よりの感謝の気持ちを持って手を合わせて頂けたら良いと思うのです。

では、何を感謝すれば良いのだという方もいると思います。私はそれこそ何でも良いと思います。私たちが日々食べている食料。米や野菜・魚に肉類それらすべては人に手により作られ、採られ、加工されて私どもの手に届きますが、もっと大局的にみるならば太陽の光があつて水があつて土があつて、この世の様々な恩恵を受けています。食料だけではなく私たちも先の恩恵を受けて自然の中で生きています。もっと判りやすく例えるなら皆さんも子供の頃、一度は「神様はいつでも我々を見守ってくださっている。だから悪いことをしてはいけない」といった内容を聞かれた事が有ると思います。神様が見守ってくださっている事、これこそが神の導きであつたり、御神縁と呼ばれるものではないのだろうか。と私は考えます。そして、その日頃への感謝の心と是より先の安寧を願つて人は神社を始め各々の神の息吹を感じる事の出来る場へと赴く事こそが参拝というものなのだと思います。私は今迄で神様の夢を見たり、お姿を感じたりしたことは一度もありません。しかし幼少の身分の頃、川で流されたり、山で崖から落ちかけたり、また交通事故等危険な目に合う度に、顔も姿も知らない神様と祖先の方々に感謝していただいたのを今でも強く

覚えています。こうした思いは、昨今の目に見える便利なものがそこら中に溢れるように現れ、簡単に手に取る事の出来る状況になってしまった事が、自身が神様に見守られ、自然の中で生かされている事を始めとする、目に見えないモノを感じ取り、それを敬い感謝する気持ちを薄め、日常の中で感じさせるのを難しくしているのだと私は考えます。

だからこそ、私は神職として、見ないモノと人々の中執持として自身の思いを、参拝いただく人達にも日常の中で見えないモノへの感謝を持っていただけるように、より一層神明奉仕に励んでいきたいと思ひます。

ご清聴ありがとうございました。

(京都府 八坂神社 権禰宜)

「蚕の神」

蚕影山信仰について

松田 紘和

本日は当社にお参り頂きありがとうございます。少々お時間をいただきまして、当社についてお話をさせて頂きます。当社は日本一社蚕影神社（ニホンイツシャコカゲジンジャ）と申しまして、茨城県つくば市神郡に鎮座する古社でございます。日本一社は「日本で唯一つの社」の意味であり、関東や信州に点在する蚕影神社は当社の神様の御魂をわけた神社でございます。

創建年代は第十三代成務天皇の御代（西暦一三一〇）といわれ、「蚕の神」「養蚕の守護神」として信仰されて参りました。明治から大正にかけて国が外貨を稼ぐ為、国策として大量の生糸を外国に輸出した時代より、養蚕を営む多くの農家、生糸や絹を扱う業者などから篤い尊崇を頂いております。

さて、当社には古くより、氏子・崇敬者の皆様に掛け軸をお配りしております。それに

は木船に乗った女神、それを仰ぎ見るように翁・媼が描かれ、「蛭影大神」という文字が刻印されているものでございます。多くの崇敬者の皆様はこの女神さまを「蛭影大神」としてお祀りしていたわけでございます。この女神様は「金色姫」と申しまして、当社にはそれにまつわる伝説が伝わっております。概ね次のような話になります。

三十代欽明天皇の時代、遠く天竺の国に帝と皇后、そして金色姫という姫がいた。ある時、母である皇后が亡くなり、後后が迎えられた。しかし、この後后、金色姫を邪険に扱い最後には亡き者にしようとした。まず、獅子吼山という悪獣の住む深山に捨ててしまった。しかし、悪獣たちは姫を襲うどころか逆に姫に額づき山一番の獅子が姫を背負い王城まで送り届けた。それを見た後后は今度は鷹群山という驚熊鷹が多く住み、一年中雪に埋もれている山に姫を打ち捨てた。そこへ帝より鷹狩りのため遣わされた兵士が山へ来た時、木の根に座る姫を見つけた。兵士は驚き急ぎ狩りをやめ、姫を王城に連れて戻った。後后はそれにも懲りず今度は草木の生えない海眼山という島へ姫を流してしまった。そこへ釣りの小舟が風に流されこの島へ漂着し、姫を見つけ王城へ連れて戻った。後后は悔しがり帝の居ない時を狙って、罪人に金を握らせ帝の住まいの庭に七尺の穴をほらせ姫を生き埋

めにしてしまった。帝が還御し姫の居場所を尋ねるが誰もわからず帝は大いに嘆き悲しんだ。ある時帝の住まいの庭より、眩いばかりの金色の光が射し始めた。帝はあやしんで占わせてみると「この地下に神人あり、七尺掘って御覧あるべし」との託宣があった。託宣に従い庭を七尺掘り進めたところ、穴底に眩い光を放つ金色姫を見つけた。帝は大いに喜び、「おまえは只の人ではない。しかし、ここでは後後の仕業によりいつ命を落すかわからない。ここについて長く苦しい思いをするより、ここではない国へ行つたほうが良い」と仰せられ桑の木で穿船をつくり宝珠を授けられ「お前は神の化身であろうから、神の国に流れ着き人々を救いなさい」と仰せられ、泣く泣く姫を乗せた船を沖に流した。船は波に揺られ、ついに日本の東の果てである常陸国筑波郡豊浦湊に流れ着いた。この湊に住んでいた権大夫がこの穿船を見つけ薪にしようと斧で壊してみるとなんと光り輝く姫を見つけた。

大夫は大いに驚き「是非、名前をお聞かせください」というと姫は今までの経緯を話し「もしこの国が神の国であれば私を引き上げてください。必ずやその恩に報いるでしょう。」大夫はこの姫を家に招き入れ婦人とともに我が娘のように大切にした。しかし、姫は突然この世を去ってしまう。大夫夫婦は大いに嘆き悲しんだ。そんなある夜、姫が夢にあらわ

れ「私に食べ物をご覧ください。必ずやあなた方の恩に報いましょう」と言われた。大夫夫妻は夜が明けて急ぎ姫を入れた棺を開けたところ、姫の亡骸はなく蚕の幼虫となっていた。夫婦は何か食べ物とを考え、姫が乗ってきた船が桑の木でできていた事を思い出し、桑の葉を与えてみた。蚕は喜んでこれを食し次第に成長していった。ある時、蚕は食するのをやめ繭をなつてしまった。夫婦はこれはどうしたことかと悩んでいると、眼前に筑波山の神があらわれ、この繭から糸をとる方法を教えた。これが日本養蚕の始めであり、夫婦はこの蚕の糸により「富貴になること限りない」身となった。

以上、このようなお話でございます。

御話しましたとおり、金色姫は多くの災難を被ります。しかし、姫は清らかな心を失わず最後まで恩を受けた翁・媼の為に死して尚、尽くされました。また、姫の光り輝く清らかな姿が、蚕が生み出す絹を連想させ、多くの人々に「蚕影大神」として崇敬されたものと思われまふ。

本日御参拝の皆様にも、日々様々なことがあろうかと存じますが、金色姫様の清らかな

生き様を思い起こされ、「人の心」を忘れずにお過ごし頂ければと御祈念申し上げます。

本日は御参拝ありがとうございました。

(茨木県 筑波山神社 権瀬宜)

旅立ちの心

煮炊きの心

鈴木明子

江戸時代の歌人橘曙覧は、

楽しみは妻子メケむつまじくうちつどい頭ならべて物ふとき

とか

楽しみはまれに魚煮て児等こら皆がうましうましといいて食うとき

と子供達に食べさせる喜びを歌っています。また江戸末期に来日した米国総領事館ハリスは貧しいながら子供達は楽しそうに走り回り、その様子をお百姓さん達は笑顔で見守っている。彼らからは怒声を聞いたことが無い、と感心しております。こんなに子供を大切に
する国民性はいったどこにいったのでしょうか。五歳の女の子を餓死させたり、児童虐待
が後を絶たない最近の日本です。

色々理由はあると思いますが、一番大きな理由はそれまで培ってきた日本の道徳観や倫
理観を徹底的に打ち壊した米国GHQの見事な占領政策と言えるでしょう。

私達日本人は悪い悪いと教え込まれ、それまで大事にしてきた親孝行とか国を愛する心とか皇室を敬う心を否定され自分に自信を失ったためだと思います。それはアメリカ人の弁護士であり人気タレントのケントギルバート氏がその著書、「アメリカ人だから言えた戦後日本教育の不都合な真実」ではつきりと指摘しております。ぜひ一読を。

彼はこの本の中で日本人の本来の強さとして、自分の頭で考え行動した吉田松陰や新渡戸稲造、指揮者の小澤征爾、野球を美学まで高めたイチロウ等々を挙げておりまして、日本人は彼らのように本来の強さを取り戻さなくてはいけないと強く言っています。

又、目下公人くさかきみんじんは著書「情の力で勝つ日本」という本の中で、以心伝心、直観力、情報読解力、ひらめき等は「情」から生まれるもので、合理性、効率化、論理的思考などは低レベルの発想であると断じています。

「情」という目に見えないものを感じ取れる日本人、それは神道が目に見えない命を木や草や石に感じ取って神の働きとして敬う姿そのものであります。「情」に深い日本人だからこそ、昔から親は自分が食べなくても子供にまず食べさせ慈しんできたのです。その姿がハリスを感動させたのです。

古来から日本の食事の中心は煮物でした。鉄のお鍋に野菜を入れてぐつぐつと煮るので

すが、最近の研究で煮炊きをしたものに母親からでたオキシトシンという愛情ホルモンがあることがわかったそうです。抱きしめたり、頭を撫でてもらったりしてオキシトシンを貰うと、本人にもオキシトシンがでて情緒が安定するそうです。それを知ったある暴力学校^{ガングロ}の先生方は、毎朝校門で生徒達に握手を始めたら、一年で暴力は消えたとNHKのテレビで報告されておりました。

サラダとか簡単に出来るものにはオキシトシンは少ししか入らないのではと思います。ある料理研究家の方が、夏なので冷たい料理ばかりしていたら、家族中がイライラして口喧嘩をするようになったので、これは火を使わない料理ばかりしているからかもしれないと思い、火を使ってじっくり煮たものを出すようにしたら、家族が落ち着いて和やかになったとコラムに書いておられました。

手間をかけて煮込むと愛情ホルモン、オキシトシンが沢山入るのですね。

NHKの朝ドラ「半分青い」で失恋した鈴愛に幼馴染みの律君が黙って煮込んだスープを作ってやります。それを食べているうちに鈴愛の悲しみは癒されていく場面がありました。愛情ホルモン、オキシトシンのおかげですね。

さて、元年者^{がんねんもの}という言葉をお聞きになったことおありでしょうか。私も最近新聞で知っ

たばかりです。明治元年にハワイに移住された人達百五十人を尊敬を込めてそう呼ぶそうです。

今年は明治維新から百五十年、国難に毅然として立ち向かった明治人が見せた気概が今こそ必要ではないかと、都留文化大学教授の新保さんは産経新聞で述べておられますが、ハワイでも元年者のルーツをたどろうとしているそうです。元年者から八世代にあたる佐藤さんは、明治の人の勤勉さや家族や先祖への畏敬など日本のルーツに誇りを感じています。と語っていました。

又、「中東が見つめる日本の心」というので、五年前ですが産経新聞に、アラブのタミム首長のモットーは「日本に学べ」ということだと載っておりしました。それは何故かというと、皇太子のとき中国に行ったら、大人も子供もゴミをポイポイ道に捨てて、地下鉄では我先にと突っ込んで行く、日本に来たら、デイズニーにはゴミ一つ落ちていず、列車には秩序正しく静かに乗る、その秩序とマナーの良さに感銘を受けたからだそうです。サウジアラビアでも日本ではサッカー観戦の順番待ちにペットボトルに氏名を書いて置いておく、全く割り込みがないのに驚いたと紹介されていました。そして「勤勉、責任感、誠実、公共心などの日本の精神力が中東の人たちの心を捉えて離さない」とありました。

まだまだ私達の遺伝子には素晴らしいものが残っています。ここで私達は昔の煮炊きの心を取り戻し、さらに素晴らしい日本人になっていくのではないでしょうか。

(滋賀県 立木神社 宮司)

岐阜まつりについて

山田 誠也

二〇一六年（平成二十八年）に全国十八府県三十三の全国の祭礼行事が「山・鉾・屋台行事」としてユネスコの世界無形文化遺産に登録されました。こういった世界的な文化遺産としての登録などを背景に、国内外を問わず、改めて日本の祭礼行事に対する関心が高まってきています。

そこで今回は私が奉職をしております、岐阜市・伊奈波神社の祭礼「岐阜まつり」についてお話しようと思います。

伊奈波神社では毎年四月五日を例祭日として神社では祭典が行われ、第一土曜日には市内を渡御する御神幸祭、宵宮として、氏子町内による山車四輜（安宅車・清影車・蛭子車・踊車）の曳き回しとカラクリの上演、神輿愛好団体による神輿の練り込み等が行われます。

本来は四月四日に渡御、五日に例祭を行ってまいりましたが、ウィークデー開催の難し

さや岐阜市の観光誘致政策なども重なり、現在は上述の通りの変則日程で行われています。

さて、それでは岐阜まつりの歴史について少しお話しします。岐阜の町は時代の移り変わりによる権力者の交代や太平洋戦争、とりわけ明治二十四年（一八九一年）の濃尾震災によつて、神社の縁起や当時の住民たちの暮らしの様子を窺う史料の大半が焼失し、その歴史をたどる史料は極めて少なくなっていました。

現存する史料の中で最も古いものは、本縁起の中で、延文四年（一三五九年）、近郊の僧侶が集まり法華八講会を務めたとありますがその内容までは記されておらず、祭礼が行われていたという事実のみがわかるだけです。

時代は下り、十八世紀中頃（江戸時代）に書かれた『岐阜志略』には「毎年三月一日から六日まで勤めていた祭礼も十六世紀末からは衰退した。慶長年間（一五九六～一六一五）には岐阜町から二十四輛の山車が曳かれるまでに賑わいを取り戻したがその後再び衰退し、今は三月三日に社頭に二輛の山車を飾る」とあり、江戸時代初期には二十四輛あった山車も十八世紀中頃には二輛にまで減っていたことがわかります。しかし、同時期に書かれた地元有力商人の日記（享保十年（一七二五年））には「天氣がよく祭礼が首尾よく渡った。特に山車を曳いた町内によるカラクリの上演は素晴らしかった」とある為、

山車の台数は減ったものの、趣向を凝らしたカラクリ上演で祭礼を盛り上げていた様子が窺えます。

十九世紀前半には伊奈波神社の祭礼を実際に見た大平（本居宣長の養子・一七五六～一八三三）の長歌が伝わっているが、その長歌には「遠近の人々が道に垣をなして見物し、太平の御世を喜ぶとともに伊奈波大神の神威を尊んでいる」と詠まれています。

幕末には祭礼の華やかさが増したようで、『伊奈波神社略志』に記載された絵には各町から曳きだされた山車が神社前の坂道を上るのを見物する群衆の姿が描かれました。この頃の山車には大きく分けて、カラクリを行うカラクリ山車と十歳以下の踊り子が搭乗する踊り山車の二種類がある。いずれの山車も彫刻や幕の美しさは目を見張るものであったといわれています。

明治時代になっても幕末の賑わいはそのまま受け継がれました。明治六年（一八七二年）太陽暦の採用で三月とされていた祭礼日は四月と改められ、現在と同じく四月に祭礼が行われるようになりました。明治時代の前半は山車が当番制で曳かれるようになり、明治二十三年（一八九〇年）にはカラクリ山車八輛・踊り山車三輛・神輿二基、明治二十四年（一八九一年）にはカラクリ山車六輛・踊り山車三輛・神輿三基が出されたとあり、明

治二十七年（一八九四年）には濃尾震災で多くの山車を焼失しながらもカラクリ山車二輛・神輿四基が出され、焼失した山車の代わりに各町から巨大な唐獅子・達磨・虎等の作り物や俄芝居が披露されたようで、町の復興とともに祭礼も徐々に賑わいを取り戻していったようです。その後、大正時代を経て少しずつその姿を取り戻しつつあったが、太平洋戦争による昭和二十年（一九四五年）七月九日の岐阜空襲で山車や神輿は再び焼失してしまいました。現在残る山車は濃尾震災後に新造・改修され、空襲の戦火を免れたものであり、非常に貴重な祭りの財産となっています。

ここまで岐阜まつりの歴史についてお話してまいりました。

自然災害や戦禍に巻き込まれ、神社の社殿や多くの貴重な史料、山車などを失ってきた岐阜まつりではありますが、良い時代は良い時代なりに、悪い時代は悪い時代なりに受け継がれ、維持されてきました。神様と人が同時に同じ時間を共有し心から楽しんで過ごすまさに神人一体となって初めて祭礼は受け継がれていくものであったように思います。

しかしながら近年、そうした「祭礼」の認識は薄れ、変化を余儀なくされています。冒頭に少しく触れましたが、祭りを祭礼ではなくイベントとして捉え、神様は置き去りにされ、人だけが楽しむものとなりつつあります。山車の曳行を管理運営してきた旧来の町会

も少子高齢化と人口減少に悩まされ、人財ともに困窮を極める町内も増えてきました。

他方で、二十年ほど前から宵宮の実行委員会、カラクリ保存会、神輿愛好団体の連合会など、祭礼の真の姿を受け継ごうとする団体も発足しました。

岐阜まつりは大きな転換期にあります。今こそ私たち神職は神と人との仲取り持ちとして岐阜まつりの歴史と意義を正しく伝え、後世に祭礼を受け継ぐためにより一層、努めていかねばならないと思います。

（岐阜県 伊奈波神社 権禰宜）

伊勢山皇大神宮について

藤野唯史

本日は伊勢山皇大神宮へようこそ御参拝下さいました。当宮は天照皇大神を御祭神とする、港横浜の総鎮守でございます。創建は明治三年ですので、二年後の東京オリンピック開催の年に、御創建百五十年という祝いの時を迎えます。

さて、当宮は近代になり創建された神社です。神話や伝承によってこの地に鎮座したのではなく、我が国の開国並びに横浜の開港によって創建されるに至った神社です。なぜ、横浜の地に総鎮守として伊勢の大神さまをお祀りする神社が求められたのか。創建百五十年を前に、当時を顧みて、当宮と横浜の繋がりについてお話したいと思います。

先ずは当時の横浜についてお話致します。元々の横浜村は、半農半漁の百戸程の寒村でした。その様子は、森鷗外作詞による横浜市歌の中でも「むかし思えば苦屋（粗末な家）の煙ちらりほらりと立てりしところ」と歌われています。これを一変させたのが、幕末の

嘉永七年、泰平の世の眠りを覚ます黒船の来航でした。横浜村で、ペリーと幕府の会談が行われることとなり、歴史の表舞台へと躍り出たのです。更に安政五年、日米修好通商条約が締結されると、江戸に最も近い開港場に定められます。瞬く間に港と外国人居留地、そして貿易商人街が築かれ、国際港横浜が誕生致しました。商機に逸る貿易商を皮切りに、各地から移住者が相次ぎ、それに伴い町も拡大していきます。明治の御世を迎えた頃には、人口六万人程の都市が出来上がっていました。

このように急速な発展を遂げた横浜でしたが、その住民の殆どが各地からの移住者です。住民同士の繋がり、地域の絆というものに欠けた、冷たい町であったようです。当時の生糸商が郷里にあてた手紙の中にも「横浜では隣に誰が住んでいるかを知らない。人付き合いをしなくて済むので楽だ。」などと書かれています。

また、当時の横浜は、我が国の玄関口となる国際港であり、文明開化の最前線にある町でした。西洋から新たな文化や思想が怒濤の如く流れ込み、それまでの価値観や風習を、次々と変貌させていきます。このことは、横浜の社会に少なからずの混乱と不安をもたらしていました。

このような状況下で、当時の神奈川県知事であった井関盛良は、住民の心の拠り所とし

て人心を安定させ、かつ横浜の象徴となり人々の誇りとなるものとして、日本人の総氏神である天照皇大神を、横浜の総鎮守として祀ることを計画します。

港と東海道を結ぶ街道沿いに、伊勢山と呼ばれる丘があり、そこに天照皇大神を祀る小さな社がありました。伝承によれば、かつて武蔵国の国司が勅命を受けて、伊勢の神宮より勧請したと云いますが、この頃には衰退して近隣の寺院により管理されていました。神奈川県は、この社を港が一望できる高台へと遷し、横浜総鎮守として再興することにしたのです。

明治三年一月、神奈川県は政府に対し「民衆に正しい方向を示し、社会の災いを未然に防ぐ為に、県の祭神として神宮を創建したい」と建白を行い、これを許されます。県は直ちに「四月十四日に仮遷座を行い、後から壮大な社殿を造営する」との布告を発しました。社殿や施設を後回しにしても、遷座を急いだということは、それだけ当時の横浜の社会に、不安な要素が蔓延していたことを示しているのでしょう。

県は、横浜総鎮守の創建を住民に広く認知させ、かつ居留地の外国人にも我が国の国柄を示す為に、五日間に渡り町を挙げて盛大な遷座祭を執り行うことを決め、準備金として各町内へ総額五千両（現在の価値だと数千万円でしょうか）を下げ渡しました。

さて、その頃の我が国の主要な輸出品は生糸であり、その殆どが横浜港で扱われていた。当時、ヨーロッパでは微粒子病と呼ばれる蚕の伝染病が蔓延し、養蚕業に壊滅的な打撃を与えていました。その為に日本産の生糸の需要が急増し、価格が高騰いや暴騰していました。この時の横浜は、未曾有の大好景気に沸いていたのです。その状況下での遷座祭の布告は、県の予想を大きく上回る反響をもたらしました。

各町内が祭りの高揚感に包まれ、他所の町内に負けるなどばかりに、趣向や豪華さを競い出したのです。特に貿易商人街のあった四つの町内は、その豊富な財力によって、競争が激化していきました。それぞれ高さ八メートルもの人形山車を、当時を代表する東京の名工に依頼しますが、その細工や装飾を巡って激しく競い合います。更に豪華絢爛な衣装を何十人分も新調し、踊り手には遊郭の人気の女郎たちをかき集め、先導役には関取を呼んでくる、一事が万事このような調子でした。さすがに県も慌てて余りに華美な出し物を控えるようにと通達を出しましたが、横浜中を包み込む興奮の前には、もはや効果はありませんでした。

結局、この五日間の祭礼の総費用は、十五万両（現在の金額で数十億円）にも及び、これを聞いた当時の外務卿・副島種臣を「外務省の予算半年分に匹敵する」と驚かせたと伝

わります。東京からも数万の見物人が押し寄せ、神奈川県庁の前には、外国の領事や公使の為に棧敷席が設けられました。正に当時の日本一の規模の祭礼が執り行われたのです。この時の生糸商の手紙には、「この祭礼により横浜は日本一の町となった」と書かれています。人々は遷座祭の歓喜と興奮の中で、初めて一体感に包まれると共に、横浜の繁栄をあらためて認識したのです。

更に翌年の四月には、伊勢の神宮に倣った神明造の社殿が造営されます。港を囲む横浜の中心部からは、丘の上に聳える大鳥居を望むことができました。そこから総鎮守が見守っていることを、人々は強く意識したはずで

自分たちの守り神として荘厳な神宮が築かれ、日本一の祭礼が執り行われた。住民は、心の拠り所を得ると共に、自らの町に強い誇りと愛着を抱いたのです。このことは、横浜の住民の意識に大きな変化をもたらします。もはや住民たちは、移住者の寄せ集めではありませんでした。文明開化の町、国際港都横浜の市民としての意識に目覚めたのです。

皆さんは、いささか大袈裟な、当宮にとって手前味噌な話と思われるかも知れません。

実は、以前に横浜開港資料館の先生に崇敬会で講演をお願いしたことがあります。その際に「はまっ子」についてお話がありました。これは「江戸っ子」と同じ、地域の気風や

誇りを現したものです。「江戸っ子」は三代続かないと認められないそうですが、「はまっ子」は三日横浜に住めば、名乗ることが出来ます。横浜に誇りと愛着を持ちつつも、新しく来るものを拒まず、受け入れる。港町、また各地からの移住者で構成された町らしい気風です。この意識があつたからこそ、横浜はそれまでの価値観を揺るがすような西洋の新文化とも、上手く折り合いをつけて取り入れることが出来ました。そして、この横浜の新文化は、生糸の取引に伴って各地へ広がり、横浜港がもたらす生糸貿易の莫大な利益と共に、我が国の急速な近代化を牽引していったのです。この「はまっ子」の気風の源流にあるものは、伊勢山皇大神宮の遷座祭であつた、というお話でした。

このように住民に正しい方向を示し、市民として纏め、社会を安定させるという県の願いは、見事に成功した訳です。県は、更に当宮の権威付けを目論みます。明治八年に当宮を伊勢の神宮の別宮とするよう政府に願い出たのです。これは残念ながら許されませんでした。この時に県の建てた石碑が境内に残っておりまして、そこには「神宮別宮」と刻まれています。

以降、横浜は我が国を代表する国際港都市として、「金港」とも称えられる繁栄を遂げました。当宮の創建とは、いわば横浜の都市計画の要、あるいは基礎であり、また横浜市

民、はまっ子の始まりなのです。

それから間もなく百五十年となります。横浜も、当宮の姿も、大きく変貌を遂げています。公と神社の関係というものも、変わりました。しかし、それでも横浜の根っことなるものは、当宮と繋がっています。当宮が果たすべき役割は、何ら変わりは無いはずです。

この創建百五十年の祝賀として、伊勢の神宮さまより内宮正宮の旧社殿を一字賜り、新たな本殿として移築を致します。神宮さまからは「横浜市民の誇りとなるならば」と、格別の御配慮を頂いたのです。神宮さまの思いに応える為にも、先ずは市民の皆様、当宮のことをあらためて知って頂きたく、御時間を頂戴致しました。ご清聴ありがとうございます。

（神奈川県 伊勢山皇大神宮 権禰宜）

「みたまのふゆ」ゝ年忌祭にてゝ

中木屋 豊

【はたらく】という漢字は人偏に動くと書きます。この【はたらく】は【はた】の人を楽にするという意味なのです。入口に物を持つ人がいたら、ドアを開けてあげると出入りがしやすくなります。高い場所で作業する際は、途中に人を配置することで仕事の効率が上がります。そんな風に【はた】が楽になるような思いやりのある会社にしましょう。」

これは、とある会社の新年祈願の時に話したことです。すると祭典の後、同行していた婿に「多分、皆さん【はた】の人と言われても分からなかったと思います。僕も意味が分かりません。」とバツサリ言われました。

【はた】とは【傍】や【側】であり、自分の周りにいる人のことを指します。

【旗】という役割のもと、皆の目印になって導くことも示します。確かにこの説明が抜けていました。漢字を視覚で見ると理解できても、話してしまえば、ただの声であり単な

る音です。自分では理解して、いて当たり前になっている言葉も、周囲が当たり前を理解していると思つてはいけないという教訓になりました。

歴史の中で私たちのご先祖も、このようなエラーを繰り返した結果なのでしょう。どんな意味を変えていたり、元々の意味を忘れ去られた言葉は少なくありません。しかし、私たちが使う言葉には、必ず元になった言葉が存在します。

例えば「こんにちは」は、太陽のことを敬った表現である「今日様（こんにちさま）」が語源となっています。「こんにちは。お元気ですか。」という「あなたの中の太陽様はお元気ですか。」と聞いているということになります。そこで、聞かれた人は「おかげさまで、元気です。」と答えますが、この「おかげさま」には「様々なことに感謝する」という意味が込められています。そして、またその答えを受けた方は「左様であるならば（よかったです）」という意味を込めて「さようなら。」と言うのです。

ところで本題に入りますが「恩頼」という言葉はご存知でしょうか。神主はごく当たり前前に読むことができる言葉ですが、一般の人にはなかなか馴染みのない言葉でしょう。「みたまのふゆ」と読みます。この言葉も先程述べた通り、語源や意味が存在します。「御霊（みたま）」とは魂のことです。「ふゆ」は増えるという意味です。「魂がふえる」というこ

の言葉は、神様が召し上がったお供えをいただくことは魂が増えることを表現し、わたしたちはお供えをいただくことで「神様のおかげをいただく」ということを意味します。この魂が増えるようにお籠りが行われますが、これが「冬（増ゆる）籠り」であり、そして、その増えた魂がみなぎり、ぱっと張ることで「春（張る）」というのです。

ここからが話の中核となります。「恩頼」という漢字に着目してみましよう。「恩」という漢字には「めぐみ・いつくしみ・相手に感謝されるような行為」という意味があり、私たちが「おかげさま」であると感じるようなことを示しています。漢字自体は2つに分けることができます。「因」と「心」です。つまり「ある原因・理由によって生じる心」という風にとらえることができます。私たちはどんな原因・理由があつて「おかげさま」という心を生じさせているのでしょうか。この原因・理由は、様々なことがあるかと思いますが、実は世界共通するものが三つだけあります。それが「太陽・天然自然・ご先祖」です。この三つは人間である限り、どの人種も必ず欠かすことのできない「おかげさま」の対象です。

まずは太陽について考えてみましょう。太陽が無くなると、誰一人生きることができなくなるのは科学的にも証明されています。これは古事記に登場する話なのですが、太陽神

である天照大御神が岩戸に籠もってしまった時、日本が誇る八百万の神々をもつてしても、皆、十分な力を発揮できなくなったという話が、科学もまともに解明されていない時代から伝えられていることも興味深いと思いませんか。また、「耳なし芳一」の作者である小泉八雲（出生名ラフカディオ・ハーン）は著書の中で「島根県の松江の朝は、柏手の音で目が覚める」と記しています。人々が夜明け前に井戸に集まり、顔を洗い身支度を整え、日の出に合わせてお祈りをしているというのです。日本人にとって、太陽が日本人の絶大な信仰の対象であることがよく表現された文面だと思えます。このように私たち日本人は、日の出や日の入に太陽を拝み、大切に信仰してきました。だから「日（ひ）」が「本（もと）」の「人」で「日本人」であるのです。

次に天然自然について考えてみましょう。海や土が物を育みます。その中にたくさん生命が生まれます。植物にいたっては、光合成で自ら二酸化炭素を取り入れて、炭素だけを残し酸素を吐き出してくれています。私たちは、それらが生み出す命を頂くことで、生命の活動を行うことができます。「生きる」ことは息をすることであり「息る」ことです。「息る」ことの行為を支えるのは、天然自然の命を頂くことに他なりません。それなのに、私たちは常に空気があることが当たり前だと思っています。海があり、川があることを疑

問に思うことはありません。森や木が少なくなっているといわれていますが、自分のことのように考えている人はどのくらいいるでしょうか。本来ならばこれら天然自然に「ありがとう」「おかげさま」で私たちは生きているのです。

最後にご先祖についてです。私たちは、父や母がいなければ生まれればきません。その父や母も、祖父父母がいなければ、生まれていません。私たちは生命を受け継ぎ伝えてきたご先祖の存在があるおかげで、今を生き、生かされているのです。昔の生活を考えてみてください。車や機械のない、すべて人力で行う生活、私たちのご先祖は自然を相手に一生懸命知恵をしぼり、仲間と協力して命をつないできました。決して簡単なことではありません。しかも、それらの活動が出来なければ、今のように保護してもらえない制度があるわけでもなく、常に「死」が隣り合わせだったのです。そのような中で守られ、引き継がれてきた命、そして土地や財産しかりです。

今は、太陽について無関心な人も多いですし、自然からかけ離れた生活の中で、その有難みを感じることも少なくなっています。引き継がれたその命を自分のものだけと勘違いし、遺産の権利ばかり主張し、先祖の墓については放ったらかしの人も少なくありません。戦後にもたらされた「平等な一人一人の権利」はとても大切に文化的な生活の根幹となって

います。ところが、権利ばかりが先行し、義務が薄れてきていることも事実です。義務という、どうしても苦しいイメージがまとわりつき、良くない方向へ向かうと圧力へ変わってしまうので、今の時代にはそぐわないのかもしれませんが。しかし、義務について、私たちは本当に分っているのでしょうか。「義務」の「務」は、古語で「まつりごと」とも読みます。「まつりごと」とは、人が人としての役割を果たすことです。人としての役割とは、ご先祖が変わらず伝えてきたことの中にあります。地域によって様々なルールが存在するかもしれませんが、基本は「命をつなぐこと・自分がおかげさまで生きていることを自覚し感謝すること・親や子、それぞれの立場になったときにその役割を全うすること・弱き者へ手を差し伸べること」ではないでしょうか。それが私たちの「まつりごと」です。

最後に本日は年忌祭ということで、ひとつ歌をご紹介しますと思います。

「廻りては我が身にこそは仕へけれ先祖のまつり忠孝の道」

この歌は島津忠良公（通称…日新公）が残された「いろは歌」の「め」の歌です。

「先祖から受け継いだ魂は、いったい何処にあるのか？よくよく考えてみると、自分身の魂の中にそれはあった。」という意味の歌です。つまりは、先祖を大切にするという

ことは、自分自身を大切に生きるということですよ、と説いているのです。お墓の掃除や花を飾ること、御霊舎へお供えすることなどは、死んでから行うことはできません。生きているからこそ出来ることです。生きているからこそ出来ることをまっとうすることは、自分を大切にするでもあります。

この年忌祭を通して、太陽や天然・自然に生かされていること、先祖からの命のリレーで、この命は生かされていること、そしてそれらを改めて感謝することを感じていただけたと思います。このお供えものを、参列者の皆様に仲良く分けて頂く「みたまのふゆ」を心して味わってください。皆様が支え合い、仲良く暮らしていくことを実践していただくことをお願いいたします、本日の年忌祭を納めさせていただきます。

(鹿児島県 稲荷神社 宮司)

真清田神社について

谷 田 和 悠

本日は私が奉職しております真清田神社についてお話いたします。

私は真清田神社で奉職するようになり今年で九年目になります。

尾張國一宮であります真清田神社は愛知県一宮市の中心地に鎮座し、早朝よりたくさんのお参りがあります。

「一宮市」の名称は当社が尾張國一宮である事に由来しており、全国で「一宮」の名称を冠する自治体で市政が施工されているのは当社が鎮座する一宮市だけであります。

またお宮参り、七五三、厄除け等人生儀礼においては真清田神社に一宮市内を中心にくさんの方々にお参りに来ていただいております。

御祭神は天火明命を祀り天照大御神様の御孫様に当たります。

神武天皇三十三年にこの地に鎮まりまもなく御鎮座二六五〇年を迎えます。

尾張地方を開拓した尾張氏の祖先ともいわれ篤い崇敬を集めています。

また、真清田神社と言う社名は初めて見た方には何と読んだら言いかわからないと思います。

真実の真に清いに田んぼの田と書き「ますみだ」と読みます。

由来は当地が木曾川の清く澄んだ水による水田地帯が形成されていた事によります。

このように大変長い歴史のあり、地域の氏神様として崇敬を集めているお宮であります。私が先輩の神職に聞いた話によりますと、早朝五時位からの参拝者の数は、他のお宮と比べても多い方だという話を聞きました。

このように市民に親しまれる理由の一つに戦後の復興があります。

昭和二十年空襲によりご本殿以下社殿は悉く焼失しました。

この戦災に先立つ三カ月前に当時の市長が防空壕建設費を寄進しその他の物資の寄付や勤労奉仕による防空壕を造り始めました。

幸いにもこの計画が実現し、防空壕に御神体を御移動した為に御神体は無事でありました。

昭和二十一年、昭和天皇の一宮市行幸を仰ぎ、神社東南の一宮市役所屋上から復興途上

にあった市内の状況について御視察あらせられました。

当時の吉田市長は真清田神社と一宮市の関係について一市一社として当社が市民から崇敬されている由来をお話し申し上げ、併せて眼下に見える戦災跡をご覧願った。

陛下は当社の復興をお心にかかけられ「確かに復興をおやりなさい」との有難いお言葉を賜った。

市長始め、そのことを洩れ承わった当社職員、総代一同は感激して復興を心に誓った。

この昭和天皇の一宮市御視察の出来事が与えた一宮市の戦災復興、並びに本社の戦災復興への精神的影響の重大さは、この後幾多の人々から異口同音のごとく語られる事となる。

例えば、昭和三十二年の本殿を中心とする第一期本社造営事業が竣工した事にともなう本殿遷座祭奉幣祭直会の席上、時の一宮市長伊藤氏が述べられた祝辞によると「想えばこの戦火の街一宮市に畏くも天皇陛下をお迎えしたのは昭和二十一年十月でありました。庁舎の屋上に静かにお立ちになった陛下は災害の模様や復興の状況などをご説明申上げる当時の吉田市長に、真清田神社の焼け跡をお目にとめさせられ、「神社の復興もして下さい」とのお言葉を賜った事は、市民各位と共にまだ記憶に新しいところであります。」と述べられている。

吉田市長の感銘が、後の市長をして「市民各位と共にまだ記憶に新しいところ」と言わしめているのであります。

昭和二十六年真清田神社造営奉賛会が設立され昭和三十二年第一期造営事業としてご本殿、社務所、拝殿、同三十六年第二期造営事業として楼門、同四十三年第三期造営事業として神楽殿、斎館が再興され、御社殿等が復興されました。

一宮市は繊維産業を基盤とし栄え、当時はガチャマン景気と呼ばれる好景気にも支えられ、戦後復興の象徴が地域の氏神様である真清田神社でありました。

各地域に氏神様を祀る神社があります。

その地域の中心となる場所が神社であります。

時代の変化と共に神社への関わり方も変わってきます。

変わりゆく時代の中変わらない大切なものがあります。

心を静め氏神様にお参りしましょう。

(愛知県 真清田神社 権禰宜)

アメリカにおける神道教化

中西正史

(当社で行われている神道人門講座にて)

本日は米国における神道教化、つまり日本とは言語も文化も違う米国において、神道をどのように伝えていくのかという課題について皆さんにお話しさせて頂きます。

私は、かつて米国紐育において神道を伝える仕事をさせて頂いた事があり、現地の大学生達に神道に関する授業をさせて頂く機会も度々得ることが出来ました。その際冒頭の自己紹介で、独身なので社交の場でパートナーを探しますと言っていました。

宗教者に限らず世界の宗教の普遍的な戒律は概ね「殺さず」「盗まず」「姦淫せず」「嘘を付かず」「飲酒せず」等と言われます。私も授業の際必ず聞かれるのが、神道にはどんな戒律が存在するのかという事で、東洋から来た伝統宗教の聖職者がどれだけ厳粛な生活を送っているのか年頃の皆さんはとても気になるようです。社交の場にアルコールはつき

ものなので、自己紹介の時点で私は既に二つの戒律を犯していると告白している悪い宗教者ということになります。

ただその後講演の中で、神職が結婚してお宮や伝統儀礼を次の世代に伝承していく事、また祭典の後氏子さん達と共に直会の席でお酒を酌み交わし、コミュニケーションを図る事で、地域社会の絆を深めていく神社界のお話をしていくと、冒頭の「墮落した聖職者」という印象が薄れ、待てよ、神道とは我々のレリジョンという概念とは違うんじゃないかと気付いて貰えます。冒頭の自己紹介は、「東洋の聖職者」という特殊で近寄り難い目で見られていたのが、実は私達と同じ若者なんだと思い、身近な存在として話を聞いて貰うのに役立ちました。日本ではもっと慎重に本題に入っていくのですが、米国人は素直で義理も通じにくく、面白くないと思われたら講演中でも平気で帰られるので、私も話し方を色々考えた結果、この自己紹介に到りました。

また神職は英語でシントウ・プリーストと英訳するのですが、プリーストとはカソリック教会の一室で信者の懺悔を聞いて、神に代わって許しを与える近づき難いイメージがあるので、この英訳が適切か米国の皆さんに問題提起して頂く事もできます。更に神社はシントウ・シュラインと訳するのですが、シュラインとは無人の聖堂を意味するので、日本

未体験の米国人は実際の神社からかけ離れた何かを頭に思い浮かべるかもしれません。

米国ではイスラム教のモスク、ユダヤ教のシナゴーグ等はテンブル・チャーチ等と訳されずそのまま地図にも記載され、またキリスト教会を指す用語も豊富です。神社も米国社会に根差したものになっていれば「ジンジャ」が英語圏の中にそのまま取り込まれる筈ですが、米国、特に本土では大戦期の日系人強制収容により日本人街は壊滅し、ハワイを除いて地域に根差した神社は殆ど無く、新たな日系移民の流入も見込めないのが現状です。

また、戦時中日系人の強制収用の無かったハワイでも、神職はすべて勾留されました。

この問題は米国人の神道に対する無理解よりも更に深刻で、今のイスラムフォビアと同じ他宗教への嫌悪感が影響しています。私も、一度紐育州中部の田舎町のコミュニティカレッジで苦い体験をした事があります。その時は、五年程宮崎県の大学で教鞭を取った後帰国し、「アジアン・インパクト」という授業を担当している先生から依頼を頂きました。その先生は様々な神社に参拝された時のお話や、宮崎県が如何に神話と関係が深いかを懇々と語られ、是非米国人に本当の神道に接して欲しいと頼まれ、喜んで引き受けました。ところが当日会場に入ると日章旗がおどろおどろしく描かれた背景に神道と印字されたポスターが張っており、吃驚する私に客集めの為なのでどうか気分を害しないで欲しいと

の返答でした。不安になりながらも神社の日常や全国のお祭りを紹介する講義を行いました。最後の質問コーナーでその先生が悲しそうな顔で、講義内容とはまったく関係のない「先の大戦における神道の戦争責任をどう考えるか。」という質問を投げかけてきました。講演の後、話が違くと抗議した所、「本当は今の神道は違くと分かっているが、米国人は戦争の話に絡めないと神道に興味を持たないから」と謝られました。その日は講義を聴いていたアジア系の学生にも食って掛られる等苦い思い出が残っています。このように米国人が戦争を絡めたステート神道にのみ興味を持つという現状は神職として悲しい限りです。

そこで今我々が直ぐに取り組めるのが、インバウンドの旅行者に神道・神社を正しく知って貰い、本国に帰って少しでもその真の姿を伝えて貰う事です。その為には、我々神職や神社に関する皆様方が、様々な媒体で情報発信したり、御社頭に外国人参拝者が来た時に丁寧に説明していく事が、正しい神道認識を持つて貰う為の第一歩に繋がる筈です。

(神奈川県 寒川神社 権禰宜)

缶ビールは落としても割れない

河本文夫

さて、TVなどで、世界の果ての不便なところに住んでいる日本人を追うような番組が多々あります。我々は、

「まーよくこんなところに住んでるな」

と若干見下した感情で見ていることもあるのではないでしょうが、又その心理をうまくついて、マスメディアは、番組を制作するフシがあります。

我が国は平和に慣れ、物があるのが当たり前、物に感謝することを忘れ、社会に感謝することも忘れ、人間のあるべき姿も心も忘れ、本当に涙を流す場面を忘れ、○○ちゃんが亡くなったのよって、ウルウルする婦人。よく聞いたら○○ちゃんは飼っていた犬だった。そんな時代。

日本人が、人間として社会として何か忘れていいるのではないかと思われるのです。

これはある大学のチームが取材で、ネパールのある村、ドカラに入った時の出来事です。そこは海拔一五〇〇M。山の斜面に家々がはりつくように広がっている村で、電気・水道・ガスといった現代のライフラインは一切来ていない。

ものを運ぶにも、二本の足で歩くしかない。

手押し車も使えないから、村人たちは体力の限界まで荷を背負ってその一本の道を歩む。だから、茂みが動いているのかと驚いてよく見ると、下で小さな足が動いていたりする。

撮影は日々重装備の登山。十五人のポーターを雇って機材や食糧を運ぶのだが、余分なものをいっさい割愛せざるを得なかった。

まっさきに諦めたビールである。なにより、重い。アルコールとしてなら、ウイスキーのほうがはるかに効率的だ。しかし、ウイスキーとビールとでは、その役割がちがうのである。

さて大汗をかいて一日の撮影が終わったとき、私は眼の前に清例な小川が流れているの
で思わず言った。

「ああ、これでビール冷やして飲んだら、うまいだろうなあ」と。スタッフ全員で協議した末に諦めたビールのことを、いまさら言うのはルール違反である。

しかし、私が口にしたその禁句を聞き逃さなかったのは、私の同僚ではなくて、なんと村の少年チェトリ君であった。

「いま、この人は何と言ったの」

と通訳にきき、意味がわかると眼を輝かして言った。

「ビールがほしいのなら、ぼくが買ってきてあげる」

「……どこへ行って？」

「チャリコット」

「チャリコットは、私たちが車を捨ててポーターを雇った拠点である。トラックの来る最終地点なので、もちろんビールはある。

でも、チャリコットまでは大人の脚でも一時間半はかかるのである。

「遠いじゃないか」

「だいじよぶ。まっ暗にならないうちに帰ってくる」

ものすごい勢いで請けあうので、サブザックとお金を渡して頼んだ。

「じゃ、大変だけど、できたら4本買ってきてくれ」と。

張りきってとび出して行ったチェトリ君は、八時ごろ四本のビールを背負って帰ってき

た。私たちの拍手に迎えられて。

さて次の日の昼すぎ、再び撮影現場の見物にやってきたチェトリ君。

「きょうはビールは要らないのか」

と聞くのである。

昨夜のあの冷えたビールの味がよみがえる。

「要らないことはないけど、大変じゃないか」

「だいじよぶ。きょうは土曜でもう学校はないし、あしたは休みだ、ビールを沢山買ってきてあげる」と言う。

嬉しくなつて、昨日より大きなザックと一ダースぶん以上ビールが買えるお金を渡した。チェトリ君は、昨日以上に張りきつてとび出して行つた。

ところがである、夜になつても帰つてこない。真夜中近くになつても音沙汰ない。事故ではないだろうか、と村人に相談すると、

「なに！ そんな大金を渡した！そりゃ、逃げたのじゃないかな」

と口をそろえて言うのである。

「それだけの金があつたら、親のところへ帰つてから首都のカトマンズへ遊びにだつて

行ける。きつとそうしたのだ」と。

十五歳になるチュトリ君は、小さな村からこの村へ来て、下宿して学校に通っている。土間の上にムシロ敷きのベッドを置いてだけ、暗い土間なので、昼も小さな石油ランプをつけてベッドの上に腹ばいになって勉強している。

そのチュトリが、帰ってこないのである。あくる日も帰ってこない。その翌日の月曜日になっても帰ってこない。学校へ行つて先生に事情を説明し、大謝り、対策を相談するのだが、先生までが

「心配することはない。事故なんかじゃない。それだけの金を持ったのだから、きつと逃げたのだろう。きつとお母さんのいる村に帰ってるよ」と言うのである。

齒ぎしりするほど後悔した。ついうっかり日本の感覚で、ネパールの子どもにとっては信じられない大金を渡してしまった。そして、あんないい子の一生を狂わした。

でも、やはり事故ではなからうかと思う。あの断崖の山道。落ちたら一命を失う。

しかし、そうだったら、最悪である。

いても立つてもいられない気持ちで過ごした三日目の深夜、宿舎の戸が激しくノックされた。すわ、最悪の凶報か、チュトリ君が事故で転落したか？

しかし、なんと、戸をあけるとそこにチュトリが立っていたのである。

その姿は泥まみれでヨレヨレの格好であった。

チャリツコットには三本しかビールがなかったので三つの山を越して別の町まで行ったという。

合計十本買ったのだけど、途中転んで半分割ってしまった。とべそをかきながらその破片をぜんぶ出してみせ、そして釣銭を出したのであった。

私は思わず彼の肩を抱いた、そしてあらん限りの力で彼を抱きしめた。無事でよかった。あーほんとに良かった。

そして、そして私は彼を抱きしめながら泣いた。近頃あんなに泣いたことはない。

そしてあんなに深く、いろいろ反省したこともない。

ご清聴ありがとうございます。

(山口県 宮尾八幡宮 宮司)

神社と広報

小野 俊之

今日は皆さんに「神社と広報」と題しまして、その広報活動によって神社に來た方を一度だけのお参りとして終わらせるのではなく、どのように継続的なお参りへと繋げていくのか、また一般社会との「広報」の違い、当神社の「広報」の行い方などをお話したいと思います。

世間一般の「広報」と言えば、社報、ホームページ等で多くの情報を流して、見ている方へのイメージ戦略などさまざまな動向をつかみ、そのターゲットの方を呼び込んで、利益を追求していく、そのようなことを差すと思います。しかしながら、神社における「広報」となると、世間で行っている方法とは異なり、只単に利益を追求するだけではなく、単純に多方面にPRをしていく形とも異なります。利益よりも信仰ということが大前提であり、不特定多数の方が来ることに對して、どのように対応していくかといった困難も生じるで

しよう。

私が奉仕している神社においては、神社界では先駆け的な形ではありましたが、昔からラジオCMやテレビCM等を活用しての「広報」を展開していき、多くの方に神社の名前を知ってもらうことから始めていました。それは目から耳から、神社を知ってもらうことへの取り組み方であり、今では駅構内やバス車内、また高速道路のサービスエリアなどにおいてデジタルサーネージ（電子看板）を設置して更なる参拝者の誘致と神社への理解を深めてもらうために「広報」を行っています。

最近の神社の好景気と申し上げれば、数年前の江原啓之さんのパワースポットブームから始まり、そのブームの加熱ぶりにより年間の参拝者が数万人だった神社が十万人以上になるところもありました。また、それが落ち着いた頃からは御朱印ブームと続き、観光バスのツアーにて御朱印巡りを行い、この流れは神社にとっては一種の自然発生的な機会を得ながら、大いにブームとなったように思います。しかしながら、パワースポットブームも御朱印ブームにおいても、基本に立ち返りますと、古代の神社は先人達が神を奉り、危険の少ない場所、災害の少ない場所など、また日の出や日没などの太陽の位置を考えて、最も太陽の日が当たる場所を選んで創建した場所であり、全てがパワーと呼ぶべき神々の

恩恵と恩頼を頂くことが出来る場所であって、どこの神様の力が強いとか弱いなどではないのです。またそのブームが沈静化した頃から続く御朱印ブームに関しても、これもまたお賽銭箱でお参りすることよりも、御朱印が欲しくてそれを頂くとまるで神社にお参りに行ったような気分で帰ってしまうということも起きています。このブームこそ、一つの情報が多くの情報を生みだして、本来伝えるべき事や、伝える必要のない情報が流れた結果のようにも思います。

このように多くの方が神社をインターネットや情報誌等で、参拝をする前に知り得ることが出来る時代になっています。神社における「広報」というのは、あくまでも信仰を伝えることが目的であり、参拝を増やすためのみに偏ってはいけない非常に難しい活動でもあります。足を運ぶ前に、画像を見るのではなく、実際に足を運んでもらい、自分の目で見ることで自分の雰囲気にあった神社を見つけることができるのだと思います。

この多くの「広報」の方法が、どのような形であり、神社に人を招き入れたところからが難しい問題であり、神社へ来た方々を一度だけのお参りで終わらせないためにはどうしたらよいのでしょうか。情報過多によって来る方は神社が思ってもいない、考えてもいない多くの想像力を膨らませて参拝に來ます。その広告やPR活動で膨らんだイメージを損な

わないよう、また来た方にとって清々しいお参りとするために、丁寧な対応や御祭神の御神徳の宣揚、それぞれの部分での細かな接遇が次に繋がるように思います。

神社はその日の天候や自分自身の体調、その時の気分でお参りの感覚は様々変わります。風が強い日もあれば、境内の木々が大きく揺れることでその自然に畏怖を感じることもあるでしょう。そういった気持ちを癒やすのはもちろん神様です。

しかし、実際に神様を感じさせるのは人で在り、我々、神職です。人を呼び込むのは人であって、それ以外の何物でもないと考えます。我々は利益を追求するのではなく、信仰を追求することを忘れてはいけません。「広報」の力で多くの方を呼べば呼ぶほど、我々受け入れる側の神職の対応力と資質が求められるように思います。この時代、多くの神社が様々な形で「広報」をしています。とても見やすいホームページや、社殿や境内がとても綺麗に撮影されている写真、興味深い社報など方法は様々です。参拝者一人一人に懇切丁寧な対応、さらには膨らんだイメージをそれぞれの神社にあった面持ちで迎え入れていくべきなのだろうと考えます。

参拝者が自分にあった参拝、自分に合った神社を見つけてもらえればよいのでしょうか。そのような参拝者の気持ちに「広報」の力で伝えることにより、参拝者がどのような気持ち

ちをもっているかを理解して、神社を通じて何を知らうとしているのか、何を必要としているのかを理解していく必要もあるように思います。

今日は「広報」の進め方というよりも、神社としての「広報」への取り組み姿勢を簡単ではありますが、お話をさせていただきました。

本日は誠にありがとうございました。

(神奈川県 寒川神社 権欄宜)

模擬講演

心を置くところ

白山神社 宮司 山下 裕 嗣

心を置くところという演題ですが……。

実は私、昨年十一月によく結婚…籍を入れました。で、ついこの前の五月二十日に披露の宴をさせていただきましたので、バタバタしておりました。で、まあその少し前にこの研修大会の申し込みがございまして、ではその演題を決めるところとで、「まあ十分の話！何とでもなるわい!!」とあまり考えもせず「心を置くところ」と致しました。…がどうも難しいテーマを決めてしまったのと、今さら軽はずみな演題の決め方に後悔をしております。

「心を置くところ」。では、心はどこにあるのでしょうか？自分の心といいますと、心臓の事をさしたり、頭の中であつたりということですね、近頃は便利なものがございます

まして、パソコンの検索サイトのウィキペディアです。これを見ますと、「身体に対して、知識や感情、意志などの、精神的な働きのものになると見られているもの。また、その働き。」とあります。まあ、これ読んでもよくわからないんですね。結局よくわからないものが心だということです。

しかしながら、わたくしには自分にこの「心」ということで思っていることがあります。私どもは神主であります。神主はいわゆる聖職者だと思っておりますし、究極の公務員であると思います。神主の心は常に氏子崇敬者の地域全体、社会全体を見る立ち位置として、大所高所から神様と同じく物事を考えなければなりません。それが神様の心と通ずる神主の心だと思います。周りの方がどう思っているかは知りようがありませんが、少なくとも自分の中だけにあるのではなく広く心を置かねばならないと思います。まあ、こんなわけで「心を置くところ」とテーマを決めさせていただきました。最初は自分のお話をさせていただきます。心の置き場所を知らずに失敗した話です。つい最近の事でございます。

冒頭にお話しさせていただきましたように、私五十五歳になりましたが、五十四歳まではまったく独身でございまして…。「あ、俺はもう生涯独身なんだな…」というような事を思っていたのでございます。後継者も作らず、この国の人口減少に加担しているの

だと思っております。わが本務の白山神社の菊理姫大神様は結びの神様であるはずなのに……。ところが昨年六月にご縁がありまして、嫁さんと知り合ったわけでございます。おそらくそれまでは、わたくしがまだまだ一人前でありませんでしたので、神様は嫁をもらうことをお許しにならなかったのでしょうか。まったくの大器晩成型でございます。

嫁には娘がおりまして、中学校三年生でございました。当時の住まいは滋賀県にあって、中三の途中で転校させるのもかわいそうだと、三月の中学校卒業までは滋賀県に住まいさせておりました。そして四月からは石川県の高校に進ませようと思っておりました。ま、これは自分の心だけに思っていたことであります。娘は子供のころからピアノを一生懸命習っております、自分はピアノで頑張りたいと思っていたようです。滋賀県には県立石山高校という公立高校がありまして、この高校には公立高校には珍しく音楽科があります。おそらく娘はそこに入りたかったのだと思います。まあ、娘の心ですからわかりませんが、うちの嫁はそう言うておりました。ところで石川県には音楽科を有する高校はありません。お隣の福井県には仁愛高校という音楽科のある私立高校があったのですが、昨年三月の卒業生をもって募集停止となっておりました。娘には「北陸地区に音楽科の高校はありませんよ」と言いました。計り知れない娘の心ですが、間違いなく残念に思っていたのだと思

います。しかし、捨てる神あれば拾う神あり。よくよく調べてみますと、小松市立高校の普通科に芸術コースというのがあって、音楽科ほどではないけれど音楽を専攻することができることがわかりました。「これはここしかない！」と思って、娘にそのことを話し、ちゅうど十一月十一日に芸術コースの体験入学があるということで参加させました。…でその日に嫁と娘が石川県にやってきたわけですが、十一月十一日は一が四つ並ぶ日であります。本題とは関係ありませんが、その時に嫁に「ゴロが良いし、この日に席でも入れましようか？」というのが、いわゆるプロポーズの言葉となつて今に至るわけでございます。…別にのろけるつもりはございませんが…。

さて、わたくしもすでに五十五歳でございます。昨年は五十四歳でした、…当たり前ですが。嫁さんのほうも十三歳年下ですがいい歳です。えっ！十三歳も年下のお嫁さん？つて言葉が聞こえてきます。お前はロリコンか？犯罪者かと。いやいやもうこの歳になりますと全然関係ございません。四十超えたら中年という一括りに入つてまいりますし、私はもうすぐ老人のお仲間。で、この歳ですから、披露とか大げさなものはないでおこう、もちろん式はきちんとご神前で挙げさせていただきますが、知人友人を招いての何かは、今さら気恥ずかしいです…。しかし、当地は田舎。地元新聞にご出産とかご結婚とかが

掲載されるわけです。まあ、十数紙面もある新聞のごくごく一部の掲載ですので、まあ誰も見ないだろうと思っております。でも、田舎というところは、毎朝の新聞が待ち遠しいお年寄りがたくさん居られるわけです。で、そういう方は新聞が来ますと、隅々までしっかりと読みになるわけです。

昨年十一月十一日は土曜日でございました。新聞紙面に載るのは週明けの火曜日の十四日。私朝風呂の習慣がございまして……。民謡会津磐梯山の囃子言葉「小原庄助さん。何で身上潰した。朝寝、朝酒、朝湯が大好きで。それで身上つぶした。ハアもつともだ、もつともだ。」……みたいな事ではございせんよ！私は神職として朝の潔斎として朝風呂なのであります！山中温泉地区の住民は、町の中心にあります総湯とよばれる共同浴場を利用します。なんと地区住民は年間一万四千円で入り放題！朝の六時四十五分から夜の十時三十分まで何回でも入れます。山中温泉はいい所ですよ！空き家もたくさんあります！ご家族そろっての移住をお薦めいたします！……と、人口減少地区に歯止めをかけるべく宣伝もさせていただきました。……てなことはどうでもよくて……。この朝風呂は地域のコミュニケーションの場となっております。十一月十四日の朝風呂に行きますと、いつもの朝風呂メンバーで、私より年配の方ばかりですが、隣に座った方がどうもよそよそしいです。

小さな声で：「あのく神主さん。まちがとつたらごめん。今朝の新聞載つとりましたね。」とささやいてきますので、「あつ、ありがとうございます。ま、籍だけ先に入れさせて…」と私の言葉も終わらないうちにその方声が大きくなりまして。「いやくそうですか。おめでとう、おめでと。」「町のみんな、心配しとつたんやぞ！」とおっしゃるものですから、その隣からも「おめでとう。新聞見ましたよ！」等々。あつという間にあつちこつちの氏子さんから声をかけていただきました。で、先ほどお話した通り、もう歳なので何も披露はしないでおうかと。という返事をその都度させていただいております。

数日して氏子総代会長に入籍のお話をしましたら、「何やら聞いたぞ！披露宴せんのか？」「それはダメやぞ！あんた自分の立場をよく考えなさい！」とのお叱りの言葉をいただきました、同年で仲の良い仲間からも、「式いつや？」「何の余興したらいい？」と、周りがどんどん盛り上がりますので、あらためて自分の立場を考えてみました。そうですね、私は地域にあります十五社の宮司であります。究極の公務を生業とする立場にありますので、地域への感謝も含め、やはり何か披露の場は設けねばならないのでしょうか？と。で、本務兼務の神社の春祭りも一段落した五月の中頃に式と披露をすることにいたしました。五月十九日に家族だけで挙式、五月二十日に披露宴をさせていただきました。

歳をとってからのこういった披露というのはなかなか問題ですね。自身のつきあいが大変広がりがすぎておりまして、ざーっと招待者名簿を作成してみますと約百八十名の名前が挙がります。…といっても、ご縁を頂いた方々ばかりですのでそう簡単に削除もできず、結局百五十名ほどのご案内をさせていただきまして、百二十名のご出席をいただきました。披露宴はまだ私が若かりし頃思い描いていた宴を、一応嫁さんとも相談し、ブライダルコーディネーターのアドバイスもいただきながら進めました。雅楽の笛の師匠で元宮内庁楽部首席楽長や地元加賀市長、加賀市教育長、地域の商工会長、観光協会長など様々なご縁のご来賓をお迎えし、所属の雅楽会の舞楽もあり、娘のピアノもありと、近年稀な盛りだくさんの内容でご披露を終えたわけでございます。披露宴の翌日から、来られなかった方、またお呼びしなかった方からのお祝いの返礼に県内外を回り、一週間後の五月二十七日には、以前から依頼を受けておりました、北陸地区女子神職会の正式参拝まで、休みなく嫁と共にバタバタしておりました。

このころは、結婚式、披露宴という大事業でテンションアゲアゲで、自分としては嫁さんと一緒に多くの事を進めていたつもりでしたが、どうも私の独りよがりとはまだはいきませんが、私の先走る考えに嫁さんが必死になって気を使って付いてきたということであっ

たようです。女子神職正式参拝を終えたその夜、嫁さんが倒れました。心労が引き金となつて、以前発症していたてんかんの症状が出たようでございます。ハツとなつて考えてみますと、披露宴出席者のうち嫁さんの関係者は一テーブルのみ。嫁さんの友人は多くが滋賀や京都在住でしかも子育て世代。ほとんどが来られないんですね。三十通ほど出した招待者から「欠席します」「欠席」の返信をもらう度に、嫁が心を痛めていたんだと、今更になつてようやくわかつたわけでございます。ましてや披露宴では、先ほども申しました元宮内庁の首席楽長や加賀市長など……。私は十分に存じ上げております方々ばかりですが、嫁さんには「なんかすごい立場の方ばかり」。人一倍気を遣ういい嫁ですので（あつ！ここはのろけ話ですよー！）、気苦勞もあつたのだと思います。

嫁さんが倒れて入院しましたことを、周りのご婦人方に話しましたが、皆さん異口同音に「嫁に来るのは大変なんや」とお話しいただき、中には厳しいお言葉をいただいた方も：「山下さんはいいよ！自分の好きなこととして自分の知人友人たくさん呼んで！嫁に来るほうの身になったことあるのか？すごい肩書きの人ばかりの前に三時間も座らされて、どれだけ気を遣ったことか！……」思い知らされました。自分の心の置き場所、自分の中だけで「嫁さんがよかれ」と思うことばかりやっていたこと。本心からの嫁さんの立場になつ

て考えていなかったんだということ…。今回のテーマは「心を置くところ」ですので、まずは自信の最近の経験からの心の置き場所の話を長々とさせていただきます。

さて本文に入ります。

言うまでも無く、人は独りつきりで生きて行く事は出来ません。家族・地域・国家、さらには大自然の摂理という多くの関わりの中で生かされて生きているのであります。自分に繋がる社会は、いくつも複雑に絡み合っている中にあるのです。その場面場面において人の心は動き回り、時に自身の心を離れて「心にもない」行動を起こす事もあるのではないのでしょうか？

「自己中」という言葉が言われて久しいですが、今は多くの人々が、ある意味「自己中」とも言えるべき行動をとり、各自が自身の「権利」の主張をぶつけ合って生活しているのではないのでしょうか？現代社会にはそれらのぶつかり合いを解消するためのルールや法律が乱立して、結局「言ったもん勝ち」「やったもん勝ち」の構造は変わりようもありません。私どもが学ぶ日本神話の中にも、こんな風景が描かれていますので、少し紐解いて見ましょう。

素戔鳴尊は誰もが知る神様です。素戔鳴尊の神話は、大きく三話あります。第一話は素

素戔鳴尊のご誕生から、高天原での物語。第二話はそれに繋がる天岩戸の神話。第三話は高天原を追放された素戔鳴尊が、ヤマタノオロチを退治するお話。これらのお話の中に、心の置き場所が見えて参りますのでご紹介いたします。

素戔鳴尊は伊弉諾命のお生みになられた最後の神様として、天照大御神と月読命の弟神様としてお生まれになります。素戔鳴尊は父君の伊弉諾命より、大海原を治めるような言われますが、言う事を聞かずに「亡くなった母君に逢いたい」と泣くばかり。荒男の凄まじい泣きように、川も海も枯れ果てて、地上から追放され、高天原にいる姉君の天照大御神の元へやって参ります。高天原においても素戔鳴尊は、好き勝手し放題で、田畑を荒らし、汚物を撒きちらし、機織り女を驚かせるなどの悪行三昧。この時の素戔鳴尊の心は自身の中だけにあったようです。いわゆる先ほど申し上げました「自己中」ってやつです。

この悪行三昧によって、本来は大所高所から大御光を届けておられた天照大御神も、心を痛めてしまい、天岩戸に御隠れになってしまいます。そう「心を痛める」。心に傷を負ってしまいますと、天照大御神でさえ、本来の向かうべきところを失って、自身の為すべき事（この場合は世の中に「大御光を授ける事」を失ってしまうのであります。「心を置く場所」を見失ってしまうのです。

さて、真つ暗闇になった世の中では、作物は育たず悪霊かはびこり、人々が困り果ててしまします。…これ、チョット逆に考えてみますと、公の代名詞でもある天照大御神が、「心を置く場所」を見失ったがために、「自己中」になっていきますよね？…

さて、物語は天岩戸開きの神話に移ります。細かくは申しませんが、神々が相談してあれこれやって、いよいよ天岩戸が開かれようとする時に、天照大御神を映す鏡が登場します。これ！私の全くの私論ですが、この時天照大御神は自身の中に籠もってしまった、大御心をご覧になられたのだと思いますね。映し出された自身の「心の置き場所」を思い出されたのだと思います。大御心は本来の場所。大所高所からこの世の全てを照らす大御光に戻られたわけです。

さて、「自己中」の素戔鳴尊はどうなったのでしょうか？その後の物語を見ますと、ヤマタノオロチ退治の神話や、蘇民将来伝説に現れるミコトのお姿のように、素戔鳴尊も世の中を治める神々の列に並ぶ「心の置き場所」を取り戻されたようです。

「心を置く所」。少なくとも自分目線だけではなく、自分の外の高い所に心の目線を置いて自身を見つめ、今の自分の立ち位置や、自身の為すべき事を考えて欲しいものです。先頭に立って物事を導いて、引つ張って行かねばならない時もあるでしょう。他の人の助け

となつて、表には出ないけれどその下支えをしなければならぬ時もあるでしょう。その都度都度に、動き回ろうとする心の方向を定めて、社会の一員としての立場で行動することが肝要です。もつともやつてはいけない事は、心を自分の中だけに置いて、自己中心的な考えだけで行動する事です。私も神職は、心の置き場をしっかりと考えて行かねばなりません。人々の、地域の心のリーダーでなければなりません。

模擬講演

明治に学ぶ

旭川神社 宮司 芦原高穂

〈きみまち恋文大賞受賞〉

「天国のあなたへ」

柳原タケ 秋田県・80・無職

娘を背に日の丸の小旗をふって、あなたを見送ってから、もう半世紀が過ぎてしまいました。たくましいあなたの腕に抱かれたのは、ほんのつかの間でした。

三十二歳で英霊となって天国に行ってしまったあなたは、今どうしていますか。

私も宇宙船に乗ってあなたのおそばに行きたい。あなたは三十二歳の青年、私は傘寿を迎える年です。おそばに行った時、おまえはどこの人だなんて言わないでね。よく来たと行って、あの頃のように寄り添って座らせて下さいね。お逢いしたら娘夫婦のこと、孫のこと、また、すぎし日のあれこれを話し、思いっきり、甘えてみたい。

あなたは優しく、そうかそうかとうなずきながら、慰め、よくがんばったねと、ほめて下さいね。

そして、そちらの「きみまち坂」につれて行ってもらいたい。春のあでやかな桜花、夏、なまめかしい新緑、秋、妖艶な紅葉、冬、清らかな雪模様など、四季のうつろいの中を二人手をつないで歩いてみたい。

私はお別れしてからずっと、あなたを思いつづけ、愛情を支えにして生きて参りました。もう一度あなたの腕に抱かれ、ねむりたいものです。力いっぱい抱きしめて絶対はなさないで下さいね。

これは秋田県二ツ井町で平成六年から十六年にかけて町おこしの一環で行われた『第一回きみまち坂恋文コンテスト』大賞に輝いた柳原タケさんの作品ですが、このきみまち坂というところは、明治十四年明治天皇東北巡幸の途中、この土地にさしかかると皇后様よりの旅の疲れを労るお手紙が届き、待っていたと言うエピソードにちなんで行われました。昨年は、明治維新百五十年という年を迎え、近代日本の歩みが始まったわけでありす。因みに道産子である私にとりましては、明治二年八月十五日、太上官布告により北海道

と命名されてから丁度百五十年になります。

泰平の眠りを覚ます蒸気船

たった四はいで、夜も眠れず

と謳われたわけで有りますが、外国船打ち払い令の伴う鎖国政策は、通商を求める米国をはじめとする海外の国々にとりまして、最早許されることのない状況でありました。

明治の御一新により、国家の体勢は一変し幕藩体制から万国公法に基づく法治国家として国際社会の一員としての体勢を整えなければなりませんでした。

そうした状況の中、最早幕藩体制では、乗り切ること不可能と大政奉還と共に、皇祖以来の我が国の根本に立ち帰ることを意味する「諸事神武創業の古に原き」と全国に号令が発せられ新たな時代の始まりが幕を開けました。

しかし、このことは、急激な洋風化を伴い国内に少なからず困惑どころか裏切られた感さえ持つ志士たちが続出したのであります。

所謂鹿鳴館時代などと言われる風潮は、真に輕佻浮薄とも受け止められ、志士たちの失望は極限に達したのであります。

それが後に、佐賀の乱、萩の乱、そして国内を二分しかねない西南の役になっていったわ

けであります。

そうした国内の世情に宸襟を悩まされたのが明治天皇でありました。帝は嘉永二年御生誕遊ばされましたが、御母君のご実家なる中山忠能公の元で養育され、その精神は質実剛健にして武を貴ぶ氣風豊で、何事も活発な若君であつたと伺っております。

無断での幕府による米国との条約締結に、我が国の国是を大切にする立場から、宸襟は暗れることなく、崩御された孝明天皇の後を十六歳にして即位され、大政奉還、江戸から東京に改められた都に遷都、激動の明治期を国家の安寧と民安かれという心で統治遊ばされましたが、交通網の未熟ななか、宮城の中に籠もることなく、積極的に国内を巡幸され国民に接する機会を作られました。

同時に、明治五年に發布された義務教育を求める学制發布は全国津々浦々に波及するには時間がかかり、その内容も西洋における学校教育の焼き直しで、国民全体でも納得出来る内容では無く、帝もいたくご心痛であつたと言われています。

明治五年侍講としてお側近くでお仕えることになった九州熊本藩の出身で、横井小楠に学問の手ほどきを受けた元田永孚という人がいますが、財政難に喘いでいた熊本藩の立て直しに力を發揮し、その実績により、大久保利通の推挙により出仕、宮廷改革に乗り出

したのであります。

多くの女官を罷免し、体勢の変革を成し遂げました。

そうした元田を単に侍講としではなく、教育における課題について、我が国における教育の根本概念を明確にするべく、政府の要人との議論や交渉に当たりました。

しかし、多くの要人は、海外留学や視察をへて、開明的な理論に傾倒し、国の立場で教育の概念を決めたり、進めることには難色を示したのです。なかなか聞き入れられない様子に、ある時明治天皇は伊藤博文に、教育に対する考えをご下問にされました。

伊藤博文はこれに対し『教育儀』と題し奉答されたのです。

その中で、昨今の特に若者の軽佻浮薄を憂いつつも、それは維新以降の教育行政に基づくものではなく、御一新に基づく社会変革のに依ることであり、かりそめにも若者は旧来の陋習のこだわることなく、西洋の新しい知識や技能を習得し新しい時代に備えよと主張するのであります。

こうした教育論のやり取りは、文部省の官僚、閣僚を含め活発に議論されたのは言うまでもありませんが、主に新時代に対応し自尊自立を元とした開明的なものでしたが、帝の意を受けた元田は仁義忠孝を基とする徳育を主張し、趣旨の違いはなかなか縮まりません

でした。

この時期永孚は、頻りに「国教」と言う言葉を口にします、この場合の国教は所謂国の宗教ではなく、国の教えであり、それは我が国の根本は、「皇祖皇宗代々その美をなせるは我が国体の精華」であると言うことです。

一方地方における学校教育では、維新のあと矢継ぎ早に打ち出される制度の変革と共に、修身道德教育の混乱はなかなか解消せず、明治二十三年二月地方長官会議の席上、修身道德の内容は、国であり文部省が主体となつて作成すべしとの声が高まり、その上長官達が文部省に押しかけると言う行動にまで発展しました。そうしたことから時の文部大臣芳川顕正をして『教育に関する箴言（しんげん）』当初は勅語と言わず箴言と言つていたそうですが、特に留意されたのは、『我が国道德の根源は何か』『我が国教育の由来は何か』でありました。

そんな中、東京帝国大学教授の中村正直が草案を作成、しかし、山県有朋総理大臣や芳川文部大臣は、満足出来るものではありませんでした。そこで、これを井上毅内閣法制局長官に示し、改めて修正撰文を依頼、最初は政治的に受け止められかねない勅語で、教育を語ることに反対し断り、文部省案を批判していましたが、総理大臣の頼みであり、六月

には草案を提出、この草案は、同時に元田永孚にも送られるなど、六月から八月にかけて修正に修正がなされ、その間元田を通じて天覧され、元田に修正が命ぜられるなど、活発な議論が行われました。その一語一句の修正も明治天皇に上奏され、十月三十日山県総理大臣と芳川文部大臣参内し勅語を御下賜遊ばされたのでありました。時は憲法実施と帝国議会開会が近づいていた時期で、その前に教育の方針を確立したいと言う事情もあったと言われています。

勅語制定の前後を説明しましたが、この勅語が、上は明治天皇の大御心、下は全国の地方長官がその教育実践の場に於いて渴望されていたものであったということです。そして、触れられた徳目というものは極めて普遍的なもので、後に英語・フランス語・ドイツ語に翻訳され、関係国にも配布され好評を得ました。

そして、大日本帝国憲法が制定され、愈々施行されんとする時、いくら法律を作っても、それを支える人々が育っていなければそれは絵に描いた餅であるとの危機感があり、この勅語は真に法治国家を支える国民を育てるものでありました。

明治、大正、昭和を通じて、我が国の教育の理論的支柱となつて支えてきました。

先年 ある会合でテレビでもおなじみの評論家門田隆将さんの講演を拝聴する機会に恵

まれました。

内容は大正生まれが、戦争では率先して戦場に立ち、一敗地にまみれながらも、戦後は高度成長を支え、我が国を世界でも例のない経済大国にのし上げたと言う内容でした。

私も全くその通りと拝聴したのでありますが、そこには日本人としての原点が脈々と流れていたのではないか、それがこの教育勅語であつたと思うのであります。

さらに、昭和六十年頃頻りに、雑誌で昭和一桁がリタイヤすると日本はおかしくなるという記事が度々掲載されたことを思い出されます。

昭和十一年生まれ位までは、とりあえず学校で教育勅語を学ぶ経験をしているわけですね。

世代の違いでは済まされない、現代日本の不安定要因があるとするれば、教育の内容について幾度も言われたことですが、これこそが戦後教育の最も不備な点であると言わざる終えません

とにかく、ものを知らないいたいけな幼子に教育勅語を伝える努力、今からでも始めなければならぬと思います。

「fan」

椿大神社 宮司 山本行恭

神主も神社を運営している以上は必ず経営ということを念頭におかなくてはなりません。しかしながら時代は経営難です。ここで止まってしまうのではなく、このような状況下をどうにか打破する方法論を展開しなくてはなりません。

実はこういうデータがあります。マーケティングリサーチによると人口推移は平成二十年をピークに減り始め、四十年後には四千万人の人口が減るそうです。毎年百万人の人口が減っている計算になります。やがてやってくるのが超高齢化社会。それに伴い過疎化、限界集落など様々な問題が出てきます。二〇二〇年には女性の半数が五十歳を超えます。そして二〇二四年には全国民の三人に一人が六十五歳以上になります。それぐらいの時代が来ている今、高齢者はどのような生活をするのか？高齢者は新しい物に手を染めない、

無駄な物は買わない。つまり商品開発物が売れなくなる時代が必ずやってきます。その時に、どうしたらいいんだと考えずにまず行動することです。神社も経営の指標を掲げていかなければならないと思います。いわゆる新規顧客が減っていく社会において、新規顧客の獲得を真剣に考える事が重要であります。どのようにしたらよいのか？「fan」をつくることに専念することです。しかしこれは容易なことではありません。指示母体を作って長期的に続けていかなければ「fan」を獲得する事は出来ません。

fanには二つあります。一つは熱烈なfan（コアfan）、もう一つは普通のfanです。企業でのデータでは、一つの商品をコアfanが購入する割合は全体の四十%にも達するそうです。つまりfanを獲得する事により新たに商品開発をする事が出来るのです。神社でも経営をしている以上、全く同じです。まさにこのfanを獲得する事が経営難を打破する糸口になるのです。

神主・巫女にも人それぞれ個性があります。その個性を十分に生かす為にどうすれば良いかということ「fan」という視点にあてた所でございます。

このfanの中には一つの価値観、評価がなければ当然ながらfanにはならないわけでありす。ではどのような要素がfanに繋がっていくのか？

まず常連さん、神社で言う氏子崇敬者をはじめ、遠方からお越しいただくコアなfanはどのようなことがきっかけでそうなったのか。それはその神社に、他の神社では求める事のできない素晴らしい何かがあるからです。

その素晴らしい何かがあるということを我々神主も共感し、それを軸に展開していけば良いのです。ここにもものすごく大きなヒントがあると思います。いくら少子化といって超高齢化社会になったとしても、fanづくりによって、必ず良い現象が随所に起こってくると思います。

一つの神社の形態は決まっている。その形態の中でここにしかないものがあれば、行ってみようとなるわけです。この神社は憩いの場があつて落ち着いて清々しくて気持ちが良いなと思つてもらえたらfanになるきっかけになるわけです。それに加えて愛着。「この神社は何となく愛着が持てるんだよな」と思つていただければ更に良いわけです。子供たちが沢山参拝していて活気があつて神社とは信仰だけではないんだと愛着を感じていただけるようにならないと思います。

それにはやはり職員の間人としての資質を向上させる必要があります。偉そうにするのではなく謙虚に明るく愛嬌を以て対応するように指導しなければなりません。その為には、

まずトップが、それだけの資質を持つておおらかな氣持ちで指導するのです。そうすれば必ずその神社は fan が増え繁榮します。

ところが、俺が俺がと人の足を引つ張つてでもやってやるぞというような意地汚い考えのトップが居る場所は絶対に大きな繁榮はしません。評判、愛着から出来てくるものが、やがて信頼を築き上げ良い縁が結ばれるのです。一つの物事を上も下もなく皆が共感し目標に向かつてひたむきに日進月歩していく。そして勤めている神主・巫女がまず一番の、その神社のコアな fan にならなければならないのです。そしてもともとと他では代え難い唯一無二のものを作り出していかなければならない。

共感と愛着と信頼を作っていくにはどうしたらよいか？それは全職員が宮司であり出仕であり、どんな仕事でも情報共有し、担当が居ない場合でも対応できるようにすることが必須であります。

実は当社にも唯一無二の特権があります。それは経営の神と仰がれた松下幸之助翁をお祀りする松下幸之助社という神社が境内にあることです。幼少期から身体が弱かったが、家庭の事情で小さい頃から働き苦労したおかげでお金のありがたみ、経営の難しさを知り、そして天下の松下電器を創建されました。

そんな松下氏が片田舎の神社に参拝され先代の官司とご縁を結び、fan になっていた
だき、当時のお金で一億円の寄付をして下さいました。そしてそのお金で「鈴松庵」とい
うお茶室を建てさせていただきました。なぜそこまでしてくださったのか。それはこの神
社に共感と愛着を持っていたからです。そして亡くなった後も、この神社なら永遠
に御霊を祀ってくれるだろうと信頼していただいたからです。この松下氏のエピソードの
一つに大阪万博にて、経営する松下電器のパビリオンの列に自ら並び、翌日から列に並
ぶ来場者全員に紙で作ったロゴ入の帽子を無料で配られました。これは、自身が列に並
んだことによって暑さを共有したからです。そしてそのことにより来場者が炎天下を凌げ
るだけでなく、来場者とその帽子を被り園内をあちらこちらに移動することにより絶大な
宣伝効果に繋がり、更には無料で配布して下さる松下氏の優しさに共感し fan になるわ
けです。つまり繁栄しているところには必ず素晴らしい経営者・根源があるわけです。

松下氏は七十年間トップとして君臨し七兆円もの利益を生み出しました。そんな方とご
縁を結んでいただいた当社はとても厚遇に恵まれています。

松下氏は、何事にも前向きで本気で本腰で本物だった。それを象徴するのが、部下に言っ
た言葉に「豊臣秀吉もナポレオンも二百年に一度生まれるか生まれないかの偉人なのに末

路は失敗したな。何故だと言う？それはやな。後ろに怖い人が居なくなつたからや。」とあります。つまり怖い人が居なくなつたらトップは落ちるのです。一人天下になるといけない。上に立つ者でも切磋琢磨し情熱を持って邁進しなければならぬ。そうするとその熱意が伝わって神社も榮えていくわけです。更なるご神徳の発揚に繋がってくるのです。そうなつてくるとコアな fan がもつと共感してくれる愛着を持つてくれる信頼してくれ更に繁榮するのです。寂しい世の中にならぬよう共に研鑽を深め fan 作りに励んでいきましょう。

神道講演全国協議会 役員名簿

— 幹事五十音順 —

幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	参事	参事	参事	副会長	副会長	会長
木下久榮	河本文夫	鍵三夫	小野日隆	井出舜	生寫經和	荒木眞幸	山下裕嗣	落合偉洲	佐古一洌	村田和之	芦原高穂	戸内康雅	山本行恭	
大江山幡宮	宮尾八幡宮	志波彦神社鹽竈神社	八坂社	諏訪神社	松尾大社	月山神社	白山神社	久能山東照宮	松尾大社	長束神社	旭川神社	心清水八幡神社	椿大神社	
宮司	宮司	宮司	宮司	宮司	宮司	宮司	宮司	宮司	名譽宮司	宮司	宮司	宮司	宮司	

幹 事
幹事・監査
幹 事
幹事・監査
幹 事
幹 事
幹 事
幹 事
幹 事
幹 事
幹 事
幹 事
幹 事
事務局長
事務局次長
事務局員

佐々木美津子
鈴木明子
谷田勉
中木屋豊
塙東男
松吉宣和
宮川脩
宮田修
村瀬佳子
山田一孝
山村稔晴
山元義清
大竹久雄
芝幸介
營田英聖

天照御祖神社
立木神社
劔緒神社
稲荷神社
笠間稲荷神社
乃木神社
福井県護国神社
熊野神社
長束神社
靜内神社
高知大神宮
老杉神社
椿大神社
椿大神社
椿大神社
椿大神社

宮司
権禰宜
宮司
宮司
宮司
宮司
宮司
宮司
宮司
宮司
宮司
宮司
宮司
権禰宜
權禰宜
權禰宜